



東方三界黃龍伝 「巽風編」 (後編) 文・絵 小龍



## 主な登場人物

沙龍シャロン（甲斐馨）……主人公。黄龍の保持者。

木佐小次郎（真武君しんぶくん）……四方将神の一人。沙龍の親友。

九雷くらい……天界軍元帥。沙龍の恋人。

景春けいしゅん……東方軍大将。

敖丁ごうてい……南方軍大将。奏欽の兄。

巽凜しゅんりん……沙龍の要請で東海龍王となった。敖広・敖光の妹。

敖閏ごうじゆん……西海龍王。

公務員……泰山府の職員だが、沙龍の配下として動いている中年。

# 1 清林山の美姫たち

仙界領土のやや南にある清林山せいりんざんは、常に清浄な空気に包まれている。

中腹から頂上にかけて、常に濃い霞がかかっている。その全容は知らないが、奇石が豊富に採れることで有名なこの山には、もうひとつ、仙道たちにとっての了解事項があつた。

この山には、西王母せいおうぼの末娘である吉羅公主きらの庵がある、ということだ。

しかし、長姉の竜吉公主が住まう、西の金鑾斗闕ほど有名でもない。

生まれつき病弱な吉羅公主は、清林山の清浄な空気の中でしか暮らせないのだ。

それは、あまり積極的に触れ回るようなことでもない。自ずと、この庵のことは、仙道たちにとっては『暗黙の了解』となるのだろう。

吉羅公主の情人である李偃月えんげつに言わせれば、公主は『控え目な我俣娘』だとい

そうならざるを得ない家庭環境で育ったせいである。

偃月にはそれがよく分かった。

彼自身も、スーパー過ぎる姉たちに囲まれて育ってきたせいか、どこか遠慮がちな所がある。

その共通点は、二人を近付ける大きな要因になったと思われる。

偃月にとって一番スーパーな姉である沙龍のために仙界に来て、この吉羅公主の庵に転がり込んだのは一年ほど前のことだ。

以来、基本的にはここに居候しているような身分で、たまにふらっと旅に出掛ける。

周囲からも『風来坊』と認識されている偃月には、身ひとつで色んな場所に赴く癖があった。

その理由は、特にはない。ただ、寝床が変わるといことが好きなだけである。

いまも、庵に、偃月の姿はない。

恐らく、どこか旅に出ているのだろう、と吉羅は最初の頃よりは気を揉むこと

もなくなつたが、それでももつとマメに連絡くらいは欲しいと思つていた。仕える者が居るとはいえ、この庵に一人は寂し過ぎる。

情人が難儀な目に合っていないか、一日に一回は心配しているのだが、それを語れる友でも居れば、少しは気が紛れるだろう――。

そう思つていた折の奏欽の来訪は、吉羅にとつても歓迎するものだった。

吉羅の母である西王母は、元は天界の皇族なので、吉羅自身も天仙界の境界とは関係なく公に『公主』の称号を持つている。

へりくだる必要もなく、普通の同世代の知人として接することができた。

吉羅が奏欽に会つたのはこのときが初めてだった。

蟠桃会の席などで互いに見かけることはあつたが、特に接点はなかつたのだ。

吉羅は奏欽が持つて来た手紙を読んで、奏欽の滞在を快諾した。

手紙は沙龍からである。簡単な挨拶と、非常事態故に妊婦の友をしばらく静養させてもらえないか、という内容である。

吉羅にとつて、沙龍はほぼ義姉に当たる。その義姉からの頼みを断る理由などなかつた。

そして、奏欽が連れてきた飛龍と天真も同じくこの庵に滞在することとなり、閑静なはずの清林山は久しぶりに賑わいを見せていた。

庵の客の一人である奏欽は、ベランダに出て飛龍の姿を探していた。

空は、霞みは掛かっているものの、奏欽の視力ならば遠くまで見渡すことができる。

それは、ほとんど知られていない、龍族の特徴のひとつでもあった。

所作に無駄がなく、足音を立てない龍族の者たちは、総じて目がいい。

しかし、その『目がいい』という特徴を一族の暗黙の了解としておかないと、色々不都合が出てくるのだ。

通常为天界住民にとっては見えない物も見えると分かれば、そこに差別が生まれる。

それを、優性民族の証として、驕る者も出てこよう。

過去には、その驕りから、龍族でない者が玉座に座るこの天界の行政に不満を



持つ者がたくさん居た。

現在も少数ながら存在はしているのだろう。

その鬱積が、つい先達ての北海龍王のクーデターにつながったのは、奏欽も体験してきたことである。

しかし、現在、東海の龍族たちが肩身狭く暮らし、西海龍王敖閏と南海龍王奏欽が争いごとを嫌う龍王であることを鑑みれば、今後のことはひとまずは問題ないと言えた。

「どこに行っちゃったのかしら、敖開ごうかいったら……」

奏欽は見える範囲に飛龍の姿がなかったので、諦めた。

代わりに、肩に停まった小龍シャオロンに話し掛けた。

「あなたには、遠距離のお使いは頼めないしね……」

「キュウ……」

小龍がすまなさそうに鳴く。

そもそも、この小さな龍は、陽輝が仕事での連絡用に同行させていたはずなのだが、陽輝は、このペットを身重の妻との連絡に使っている。

元はと言えば、緑麗のペットであり、いまは沙龍のペットであるはずの小龍なのだが、有事のときには九雷や陽輝が私物化しているのだった。

帝都の防御結界はずっと解かれていないので、情報は全く届かない。

沙龍から、新たな東海龍王を見つけた、という短い連絡はあったが、それが誰なのか分からないし、詳細を聞こうにもこちらからはどこに居るかも分からない友に連絡をすることはできない。

沙龍にはお礼も言わなければならぬし、その新龍王には祝賀のメッセージくらいは届けたいのだが、何分、いまは非常事態なので、どうしたものか、と奏欽は考えあぐねていた。

「でも、敖開に頼んだとしても、沙龍さんはいい顔しないかも……」

飛龍は、自分の護衛のためにここに居るのだから、その飛龍を使いに出しては、周囲の想いを無にすることになるかもしれない、と奏欽は思うのだ。

「……長閑ねえ」

遠くの山々の稜線を見渡して、奏欽は呟いた。

「きゆう！」

小龍が、奏欽の頬に擦り寄るようにして返事をする。

この小龍の態度は、陽輝に対するものとは百八十度違う。

沙龍はこの小さな龍のことを「セクスレスの正体不明」と断じているが、美女が好きで、粗野な男が嫌いというところは幼年期の男児そのものではないだろうか。

しかし、九雷のことは気に入っており、特に美女の範疇に入らない沙龍には一番懐いているところを見れば、やはり正体不明というしかない。

「天界では『戦争中』なんて、嘘みたい……」

仙界の領土は至って平和だ。

自分の夫も友もその戦争の只中に居るというのに、病気でもない自分が一人、こんな平和な場所で安穩としていいのだろうか、と奏欽は日々思っている。しかし、それで彼らの心配事が減る事になるなら、甘えておくしかないだろう。

そのとき、奏欽の客室に、この庵の主、吉羅が顔を出した。

「奏欽様、お茶にしませんか？」

濡れたような黒髪を持つ、一目で『公主』だと分かる、美しい女性である。

吉羅は奏欽より小柄だが、目が少しきつい印象を与えるので、若干年上に見える。

しかし、女性を二つのタイプに分けるのなら、この二人は同じ部類に入るだろう。

「はい、喜んで」

日課になっている吉羅の誘いに、奏欽は快く応じた。

奏欽は、龍王家の姫君として特別な教育を受けて育ったので、学校には行っていない。

若くして着任した管弦府では周りには全て部下という状況だったし、奏欽の不器用な性格も相俟って、友人というものはほとんど居なかった。

だから、奏欽にとって、初めて出来た同性の友達に沙龍ということになる。

その沙龍の義妹にあたる吉羅とは、わりとすぐに親しくなれた。

「今日は、どれになさいます？」

吉羅は侍女に茶器の用意をさせながら、自分は大きな机に並べた幾つかの楽器

の前に立った。

月琴や、箏、二胡などが、一通り揃っている。

この庵では、特にすることもないので、奏欽はよく楽器を奏でていた。

以前の気負いもなくなったので、庵にある楽器を拝借して、気楽に弾いては、この庵の住人たちの耳を楽しませているのだ。

侍女と護衛のスタッフが数人しか居ない小さな庵ではあるが、清澄な空気に乗って、その音はよく響く。

その音が、山向こうの辺り一帯にもよく響いて、近隣の集落ではちよつとした噂になっていたのを、二人の美姫は知らなかった。

さて、その噂を聞きつけて清林山にやって来た人物が居る。

一見、ごく普通の成人男性に見えた。

清林山は特別保護区として指定されており、崑崙防衛庁のスタッフが麓に常駐している。仙界の『皇族』の住まいがあるから、というのが表向きの理由であつ

た。

しかし、その小綺麗な格好をした男は、山麓の護衛スタッフをノリだけで言いくるめて、なんのお咎めもなく、山門をくぐった。

あまりにも堂々としていたので、護衛スタッフたちも、なんの不信感も抱かなかったのだろう。

事実、その人物は不審人物ではない。

が、崑崙側としては何人たりとも無許可で素通りさせるわけにはいかないにも関わらず、通してしまったわけである。

それを、上空から不審に思っただけで見ていたのが飛龍である。こういうときのために、普段から空を飛び回って清林山のパトロールをしているのだ。

風火輪を駆る飛龍は、麓の影に向かって、一気に降下した。

「貴様、何者だ。勝手にこの山に入るな。命が惜しければすぐに帰れ」

着地した飛龍は、やや華奢に見える男の前に立って言った。

短髪というには少し長めの黒髪に、普段着のような暗い色の直衣を着ている。

一見して龍族と分かる男だ。



「相変わらず、男の顔と名前を覚えないう子だねえ……。何度も会ってるのに」  
慌てた様子もなく、男は肩をすくめる。

その言い方からして、相当の自信家か、皮肉屋と推測された。

腹に一物どころか、二物も三物も抱えてそうなその目は、飛龍とは徹底的に合わないだろうとすぐ分かる。

「……。お前、親父の隠し子か？」

飛龍は、どうも向こうが自分を知っているようなので、そう言ってみた。

母の違う兄弟のことはあまり把握してないし、会ったことのない兄弟が居てもおかしくはない。

「それは、ボケなの？ 確かに敖閨様にはいっぱい居そうだけど」

「……」

「僕は敖丁<sup>ごうてい</sup>。君のお兄ちゃんじゃない。欽ちゃんのお兄ちゃんだよ」

「……」

無表情の飛龍の顔が、一瞬、「あ」という表情を見せた。

そういうえば、奏欽には、彼女曰くの『無能な兄たち』が数人居たな、と思いつ



す。

飛龍も、小さい頃は祝賀の席などで何度か会ったことがあるはずだが、飛龍の脳内では『どうでもいい男』というのはすぐに消される運命にあるらしい。

普段、自分と無関係な人物に対しては、ほとんど関心を払っていないのだ。

飛龍の基準で言えば、『敵』か『味方』か、というのがポイントで、そのどちらにもならない人物を覚えていられるほどの許容量はないのである。

「で？ なんの用だ」

「用がなければ大事な妹に会いに来ちゃいけないの？」

「ここは仙界の領土だ。天界の者は帰れ」

そう言う飛龍も、元はと言えば西海龍王家の一子で、天界出身なのだが、いまの公的な身分としては『崑崙防衛隊長、九天玄女保護下』になっているので、飛龍自身は仙界関係者である自覚の方が強いのもかもしれない。

「とは言っても、はいそうですか、とすごす帰るわけにも行かないんでねえ」  
敖丁が、大袈裟に肩をすくめる。

「ホウ……、それは俺に喧嘩を売ってる、ということだな？」

飛龍の群青色の瞳が好戦的に光った。

## 2 其ハ女心ニ非ズ

東極山から、港町の桑野に戻ってきた沙龍一行は、そこから、それぞれの向かうべき場所に赴くことになった。

巽凜と景春は水晶宮へ、木佐は鎮江楼ちんこうろうへ、白帝君は西域へ、九玄は崑崙へ。公務員はというと、帝都の泰山府本部へ戻るつもりのようなだったが、防御結界のせいでそれが叶わないと分かると、ボヤきながら沙龍ではなく木佐に同道した。

本来なら沙龍に同道すべきなのだが、気まぐれなボスが『清林山に行く』と言い出したからだ。

仙界の領土である清林山に、天界の泰山府の一職員が勝手に行くことはできないのである。

そこで、なんの縁もない上に近付きがたい景春や、畏れ多い龍王公主と一緒に水晶宮に行くのは遠慮したいということ、木佐についていくことにしたらし

い。

「阿姐……、いいのかよ？」

同じ方面だから途中まで送っていく、と言い出した白帝君が念を押した。

九雷の居る鎮江楼に戻らなくていいのか、という意味である。

しかし、

「なにが？」

と、聞き返す沙龍の表情が「なにも聞くな」と言っていたので、白帝君もそれ以上は追求しなかった。

「緑麗様、なにからなにまでお世話になりました。情勢が落ち着いたら、水晶宮に遊びに来て下さいねー」

朗らかに言う巽凜には微笑みを返して、沙龍は、無意識に最後に順番を回した景春には「じゃあな」とだけ言った。

「……」

景春も、仕事の顔をしたまま、軽く頷いただけである。

やけにあっさりとした別れの挨拶だった。

西に向かう沙龍は、白帝君の背の上であれこれと考えていた。  
なにかが引つ掛かる。

新たな東海龍王を見つけ、自分の目的は果たしたのだから、もっと晴れ晴れと  
していいはずなのに、どうにも落ち着かない。

まだやり残したことがあるような、しかし、それがなんなのか分からない——  
といったところである。

「……なんで旦那ん所に戻らないんだ？」

白帝君がその疑問を再び口にしたのは、皆と別れて、だいぶ経ってからだっ  
た。

既に天界の領土を東から西に突っ切るように移動して、そろそろ仙界の領土に  
差し掛かる頃合である。

「うん、まあ……」

と、言葉を濁すだけで、沙龍ははっきりと答えない。

途中まで一緒に行くと同行した九天玄女が、青鸞せいらんの上から指摘した。

「原因はあの東方軍大将か？」

「娘々、するどすぎ……」

苦笑する沙龍は、本当は否定しようかとも思ったのだが、否定すればするほど、真実味が増しそうだったので、やめた。

「浮気かよ……、阿姐、やるな……」

「違うつ！」

白帝君の頭を軽く叩く。

「まあ、確かにイイ男だったからな。浮気したくなる気持ちも分からんではない」

九玄はニヤニヤしながらそんなことを言っているが、言ってるだけである。

「どこがイイ男なんだ……。娘々の好みもよく分からん……」

「ん？ そろそろ、圈内か」

九玄は携帯電話を取り出して、コールに応えていた。

沙龍と白帝君は、そのまま、「浮気だ」「浮気じゃない」という不毛な会話を続けている。

「あのなー、確かに聖霄には隠し事はできないだろうけど、こういう微妙な女心

を、そうあからさまに言うもんじゃない」

「いや、浮気は冗談だとしても、阿姐のは、それ、女心じゃないだろ？ 思いつきし、なにか企んでる奴の思考だぜ？」

白帝君には、そういったものが分かるのである。

沙龍がさつきから撒き散らしている思考そのものが読めるわけではないのだが、雰囲気は読み取れるというわけだ。

「黒いつてか？」

「いや、黒というより、グレーだな」

「ム……、そうかもね」

「そういや、汎々ファンファンから聞いた話だが、あの大將って、ちよつとワケありなんだろ？」

「ん？ なんの話？」

「四方軍の下積みを経験してないのに、いきなり大將になるには相当のコネがないと無理だって話」

「なにそれ？ だって、景春さんは元帥が推挙したんでしょ？ だったら、別に

問題ないんじゃない？」

「普通はいくら元帥位からの推挙があっても、天界での軍功がそれなりにないと、大将にはなれないと思うぜ？ まあ、あのオッサンも人界で長いこと軍人やってたらしいから、その腕を買われたのか、よっぽど天ちゃんに気に入られたのか、そんな所かもしれないが」

「ふーん……？」

そこに、電話を終えたらしい九玄が声を掛けてきて、

「沙龍、悪い。私はちよつと先に行く」

すぐさま、青鸞を加速させて行ってしまった。

「……？」

九玄の進行方向に顔を向けると、霞の掛かった山並みがある。

沙龍の目的地である清林山もその中にあるはずだった。

「な、なに……!？」

沙龍の視界の中で、何やら、赤とも黄色ともつかぬような閃光が一瞬光った。

山の中腹よりは下の、かなり麓に近い辺りだ。



「ありや、なんかオモシレーことになってるんじやねえの!？」

沙龍も白帝君も、いまの閃光が間違いなく戦闘シーンであることを理解した。

既にその現場に接近している九玄は、山の麓付近を破壊しまくっているその犯人が誰であるのかも分かっている。

「あんの、ガキヤアアアア！」

叫びながら、青鸞で、一気に地表に接近する。

「聖霄！ 娘々を追って！」

「ほいきたー！」

喧嘩の真っ只中に突っ込んだ九玄は、敖丁の振り下ろした太刀を右腕で受け、更に飛龍の放った光弾を左手の太刀で弾いていた。

「両者、そこまで——！」

「……!？」

敖丁は驚きながらも太刀を引いたが、飛龍は戦闘態勢を崩そうとしない。

「九玄!? 邪魔をするな！」

しかし、飛龍もいきなり現れた保護者に向けて発砲はしなかった。

敖丁は、九玄がなぜ、自分の太刀を素手で受けられたのかと一瞬思ったが、九玄の手首に手甲がつけられているのを見て、納得した。

それでも、その手甲の幅はそれほど広いものでもない。下手すれば腕一本斬り落としていたかもしれない。

そうならなくてよかったと思うが、恐らく、九玄はそうさせないだけの自信があつたのだろう。

「お見事……」

遅れてその場に到着した沙龍は、九玄が一瞬にしてその喧嘩を止めたのを見て、眩く。

「沙龍、飛龍を頼む」

九玄は、まだ興奮冷めやらぬ飛龍のことを沙龍に任せ、自分は敖丁に対して姿勢を正した。

「さて、南方軍大将、敖丁殿。なぜ、この地に？」

面識はないのだが、相手の顔と立場くらいは知っている。

それは敖丁の方も、同じだろう。

「九玄隊長が直々に来たということとは、ここは崑崙の軍事的重要拠点だつてこと？」

敖丁の物言いは、まるで海千山千の政治家のようにも聞こえた。

九玄は、大刀を鞘に納めながら、横目で敖丁を見る。

「そういう質問返しは嫌いなんだ。さつさと私の質問に答えてもらおうか」

相手が例え一軍の将であろうと、ここは仙界の領土である。質問する権利は九玄の方にあつた。

「僕は今日一日非番でね。一般市民の訪問という意味以上のものはないよ」

「……」

九玄は、改めて敖丁の全身を見た。

崑崙の諜報部のファイルにもこの曲者の南方軍大将のことは、かなり詳細に載っている。

大学は首席で卒業したが、士官学校での成績は下から数えた方が早いとか、さ

る内親王と婚約関係にあったが一方的に破談を言い渡されたとか、そんな妙なエピソードばかりある男だ。

中でも特筆すべきは、『極度のシスコン』という一事だろう。

「いえね、最近ずっと姿を見せない妹がこの事態にどこでどうしてるか、もう超心配で！」

そのシスコンぶりが始まった。

芝居がかったその口調と身ぶりは、しかし、芝居ではない。

妹に言い寄る求婚者たちにはあの手この手を使って、全員帝都から追い出した、という噂まである男なのだ。

「僕も帝都が防御結界を張った直後から、八方手を尽くして探していたんだけど、なにせ、あの陰険総司令官から命じられた無駄で余分な仕事とかもあつたりして、中々、自由に動くことができなくて……」

それを背中で聞いていた沙龍は、ヒクツと頬が引きつりながらも、なんとか飛龍を宥めていた。

しかし、敖丁の口上は止まらない。

「大体、あの人も性格悪いよね。僕が帝都を離れたくないって知ってて、わざと帝都外任務とか押し付けるんだから、もう、いつか絶対下克上されると思うんだよね」

(なんだと?)

瞬間湯沸かし器のように沸騰した沙龍の怒気を、今度は飛龍が宥める。九玄はただ、腕を組んだまま、じっと敖丁に鋭い視線を飛ばしていた。

「まあ、そのときは僕が総司令室の椅子に座ってると思うけど——」

「それで？」

九玄が、苛立ちを抑えながら急かした。

言下に、脱線するな、要点だけを言え、と言っている。

「ああ、そうそう。それで、身も細る想いでいた所、やっと、それらしき噂が聞こえてきたんで、ここまでやって来たというだけの話さ」

「噂？」

「清林山には、この世のものとは思えぬ美しい音色がする。どこかの美姫が手慰みに楽器を奏でているに違いない——って噂」

「なるほど……。しかし、だからといって、貴方のような軍事職に就いてる者が、この地を訪れるのが許されるとでもお思いか？」

「えー、九玄殿、カタスギじゃん？ それ。この世に、賄賂と顔利きでなんとかならないものなんて、ないんだよ」

「ホホウ……」

見下げたように睨む九玄。

当然、敖丁の第一印象はひどく悪い。

内心、なんだこのふざけた官僚主義もどきは、と思っている。

そのとき、沙龍の肩に緑色のものが舞い降りてきた。小龍である。

「あれ？ お前、どこ行ってたの……？」

「九玄さん、沙龍さん、ウチの愚兄が迷惑をかけてゴメンなさい」

小龍の口から、細い感じの女性の声が聞こえた。

「奏欽殿——？」

九玄が小龍に近付く前に、敖丁の顔が崩れた。

「欽ちやうん！」

その顔立ちからは想像もつかぬような猫撫で声で、九玄がビビツたほどである。

「敖丁お兄様、一体なんの用なんです？ 自身の立場も考えずに、ただ私に会いに来ただけというなら、即刻、お帰り下さい」

「イヤ〜ン、冷たいんだから、欽ちゃんってば！ 欽ちゃんが元気にしてるかなーって心配で心配で心配で、はるばる会いに来たんだよ！ ちょっとだけでも顔見せてよ。ね？ ね？ ね？」

九玄と沙龍は示し合わせたように顔を見合わせて、敖丁の馬鹿っぷりに呆れていた。

とりあえず、九玄は、奏欽に免じてこのハタ迷惑なシスコン野郎を糾弾するのだけはやめた。といっても、相手は仮にも一軍の将である。天界軍の大將を、境界越えの一事だけで法的に拘束することはできない。せいぜい、司令本部に厳しく抗議するくらいだ。

庵の主である吉羅への挨拶もそこそこに、敖丁が奏欽にベツタリくっついてい  
るのを、少し離れた場所で見ている九玄は苦い顔のまま沙龍に零していた。

「飛龍が問答無用で喧嘩をふっかけるわけだ」

「……ホントに妹に会いに来ただけだと思う？」

「さあな……」

九玄の表情はどちらとも取れるが、やはり、この時期に、というのが最大の憂慮事項になっている。

その奇抜な言動からして、敖丁の力量はまるで読めないが、龍王家の一員とい



うだけで大将になれるほど甘くはないだろう。

となれば、その曲者大将が、この戦時下に、大事な妹に会いにだけはるる界にきたとは考えにくい。

客間では、遅れて登場してきた天真が加わって、ちよつとしたホームパーティーの様相を呈してきた。

沙龍は、敖丁のはしやぎぶりに押されて、初対面の吉羅とろくに挨拶も交わせなかつたし、奏欽や天真とゆつくり話す機会も逸したが、それは明日以降でもいい、と思い、個室へ下がった。

「阿姐、疲れてんのか？」

なぜか部屋の前までついてきた白帝君が、心配そうに言った。

「え？ いや、そんなことはないけど……」

「ふーん？」

「でも、今日はもう寝る。おやすみ」

「……」

なにか言いたげな白帝君の目の前で戸を閉め、沙龍は部屋の寝台の上に寝転

がった。

実際、疲れは感じていた。

ずっと強行軍で、戦時下の緊張感の中に居たとはいえ、東海龍王を見つけると  
いう目的を果たしたいま、こんな疲労を感じるのは、おかしい。

天界全域で敵の出現が確認されている現在の状況では仕方が無いのかもしれないが、沙龍にとってそれ自体は大したストレスにはならない。

敵の亡者に遭遇したとしても、叩きのめせばいいだけの話である。

沙龍がいま感じている疲労の原因は、恐らく、水晶宮で出逢い、今日までずっと傍に居た景春という男の存在そのものにある。

彼が、木佐のような存在なら、こんなに疲れはしないだろう。

しかし、沙龍にとって、景春は、不幸にして『男』だった。

それを、期せずして『浮気』と言ってしまった白帝君は、あながち間違っ  
てはいない。

景春を『男』として見ている時点で、精神的には浮気をしているのと同じこと  
なのかもしれないからだ。

だから、余計、白帝君が言っていた『ワケあり』が気になる。

それは沙龍自身の『なにかやり残したことがあるような気がする』という想いと緬い交ぜになって、沙龍の心を重く占めた。

ただ、幸いにして、沙龍は景春に惹かれてはいない。

いまの段階では、そうなる可能性があり、恐れがある、というだけの話である。

（『大将』ってのは、曲者だらけなのかね……）

沙龍は、今日初めて会った敖丁のことも付け加えて、そんなことを考えていた。

これで、四方軍の大將全員に会ったことになるが、王霊君以外の三人は、どうも一筋縄ではいかないイメージが先行してしまう。

それくらいの存在感がなければ、あの職は務まらないということかもしれないが、その曲者たちの手綱を九雷は捌いているわけである。

我が恋人ながら大したものだ——と思った所で、寝所まで沙龍にひっついてきた小龍が「キュ？」と鳴いた。

いいタイミングである。

もしかしたら、九雷はやはり千里眼なのかもしれない。

「沙龍」

ゆっくりと低く、自分を呼ぶ声が小龍の口から聞こえてくると、沙龍は小龍を伴って、月光の射すテラスへと出た。

誰に聞かれる心配もないのだが、室内よりは外の方がいい、と思ったのだ。

遙か遠くの『鎮江楼』に、より近い場所で、という無意識もあつたかもしれない。

「いま、丁度、元帥のことを考えてた」

沙龍がそう言うと、九雷のいつもの『間』と同じ時間を持って、小龍が笑った気がした。

「てつきり、こつちに戻ってくるもんだと思ってたんだが。俺が振られた原因があるなら、聞いておこう」

九雷のその言葉は、内容としては叱責に近いが、口調は柔らかい。

沙龍は少しホツとしながら、

「うん、ごめん。欽チャンに報告しておこうと思ったから」と、嘘をつく。

それは、後付の理由に過ぎない。

「なるほど、俺は奏欽殿に負けたわけだ」

「フフ、そうだね」

自分も笑ってはみたものの、沙龍の表情は言葉とは少しズレている。

「しかし、俺としては、しばらくお前にはそこに居てもらおう方がいいかもしれないな」

「……うん。そう言うだろうとは思った」

「と言ってもな、沙龍。南西方面に少し不穏な動きがある。仙界の領土とはいえ、清林山は玄都にも近い。充分気を付けてくれ」

「うん、こっちは飛龍も聖霄も、九玄娘々も居るから大丈夫だよ」

「東極山でのことは、真武君から大体聞いた。まさか巽凜公主が生きているとは俺も思わなかったが、龍王としては申し分ないな」

「でしょ？ 桁違いの『木行』だったよ」

「頑張ったな、沙龍。よくやった」

こういう労いの言葉が自然に出てくる所は、やはり役職柄なのだろうと思う。しかし、沙龍は九雷の部下ではない。

素直に受けるには、少し照れがあった。

「極東側とは、これから本格的に『戦争』になるだろう。もしかしたら、巽凛公主にも龍王として、一役買って貰うことになるかもしれないが……」

「リンリンさんのことについては、景春さんが、西海龍王に連絡して頼んでみたい」

「そうか。なら、心配は無用か」

「……」

会話が終わってしまう気配に、沙龍は急に寂しくなった。

声を聞いてしまえば、やはり逢いたくなる。

なぜあのとき、木佐と一緒に鎮江楼に戻らなかったのだろう、と不思議に思う。

景春から離れたかったというのは分かるが、九雷の下に帰らなかったのはなぜ

だろう、と。

「……」

そんな、無言の溜息が伝わってしまったらしい。

「どうした、沙龍」

「なんでもない」

その短いやりとりの中に隠されているものを、九雷は、月下の鎮江楼で理解した。

沙龍の心が微妙に揺れているのは、東極山行きを許可する前から気付いていた。

その原因が景春であることも、沙龍自身、それを自覚しているであろうことも、である。

しかし、そう仕向けたのが、他ならぬ九雷であることを、沙龍はまだこの時点では理解していない。

「えっと……、いや、なんでもなくはないんだけど、ちよつと逢いたくなっただけ」

沙龍は取り繕うようにそう言った。

嘘偽りのない、正直な気持ちなのに、言葉にしてしまうと、途端に嘘っぽく聞こえてしまう。

「……」

やはり言わなければよかった、と後悔して下を向いたが、次に沙龍が顔を上げたとき、九雷の姿がそこにあった。

「沙龍、俺はここに居る」

「どっ、どーいう魔法？」

腰を抜かしそうになって、沙龍は欄干に手を伸ばしてみたが、その手は、九雷の身体を通り抜けて空を彷徨った。

「……？ 幻？」

「触れることはできないが、声だけよりはいいだろう？」

まるで、そこに居るように、欄干に腰かけて、話す。

よく見れば、微かに半透明であるが、沙龍にはその姿だけで充分だった。

「巷では陰険総司令官とか言われてるのに、なんで私にはこんなに優しいんだろ



う

笑いながら言う沙龍は、それが昼間の敖丁の言だったと思ひ出す。

「敖丁が言いそうな言葉だな……。いま、清林山に来てるんだらう？」

「うん。欽チャンに会いに——なのか、任務なのかは知らないけど」

沙龍はふと、分かりやすい鎌を掛けてみた。

敖丁の清林山訪問にはなにか意味があるのか、その答えを教えてくださいませんか。それでいい。が、別に誤魔化されても一向に構わなかった。

沙龍は、ただ、九雷が敖丁の件についてどういう反応をするのか、知りたかったのだ。

「……。お前は、敖丁をどう思った？」

少し間を置いた九雷のその言葉は、沙龍の予想通りのものだった。

景春のときと同じである。

「うん……。そうだね……」

敖丁が任務を負っているかいないかは、双方にとってどうでもいい。

九雷が、沙龍に、大将の評を聞く、という所が重要なのだ。

そして、景春のときと同じように聞いてきた九雷に、沙龍ははっきりと意図的なものを感じた。

だから、秘め事を知ってしまった子供のようには悪戯っぽい笑みを浮かべたのだ。

「あれは元帥と同じタイプだね？」

「ほう……？」

「言っていることと言わなくていいこととか、全部自分で決めちゃうタイプ」  
沙龍も、巷の評判くらいは耳にしている。

“東は無愛想、西は仕事をしない、南は曲者、北は実直——”

確かに、実際に会ってみるとその評判通りだとも思うが、一番要注意のはずの敖丁にそれほど警戒心が湧かなかったのはなぜだろう、とも思った。

公然と上官の悪口を言っていた敖丁に引きつりはしても、それ以上気にならなかったのは、やはり景春の存在感と比較しての問題なのか、それとも、単純に『口にするヤツは腹に溜めない奴だから』という理屈かもしれない。

「……なるほど」

沙龍は、九雷の沈黙の『間』を読みながら、自分ほとんど思い違いをさせられていたかもしれない、と思った。

自分にまで、そんな権謀術数を仕掛ける九雷には、軽い苛立ちも感じるのだが、それを看破したときの「してやったり感」は苛立ちに勝る。

いや、もしかしたら、自分が“そこ”に気付くことすら九雷の計算のうちかもしれないが、いずれにせよ、この時点で、沙龍は、九雷の企みのひとつに気付いたのである。

「元帥、なにか私に言うことはない……？」

軽く責める口調で言うと、半透明の九雷が微笑んで、いつだったか、沙龍が言った三文字を口にした。

『我愛你』（注1）

そうじゃなくて——と、赤面しながらも、沙龍は敢えてそのお約束に乗った。

『我也』

(注1) 「我愛你」 「我也」 という『帰還』 31話でのやりとり。

4 火雲宮の事情

沙龍と九雷が遠恋の語らいをしている頃、九玄と天真はごく普通に応接室でブランドーを呑んでいた。

「え？ 日本まで行ってきたんですか？ ……なんですか？」  
「土産だ」

天真は、九玄が差し出した平たい箱を受け取った。中身を開けてみると、俵型の饅頭がみっしりと詰まっている。

職場への義理で買う土産物にしか見えなかったが、元々、九玄には気の利いたものを選ぶようなセンスがないのである。

この『俵まんぢう』を買ってきてくれただけでも、進歩だと思わなければならない。  
ない。

「ありがとうございます。一生大切にしますよ」  
天真は、ニッコリ笑って礼を言った。

「いや、大切にしても腐るだけだと思うが……」

九玄は吉羅に挨拶だけして、すぐに清林山を辞すつもりだったが、天界側のV IPが来たことで、その予定をひそかに延ばすことにした。

いま、敖丁から目を離すわけにはいかない。なにを考えているか分からぬような曲者なのである。

しかし、夜も更けてきたいまは多少リラックスしていた。

「東極山でな、真武君に会ってきた」

同性の親友に報告するような口調で、九玄は零した。

が、天真は複雑な心情である。

「……それで？ 決して報われない恋を、貫く覚悟でもしちやいました？」

半分嫌味のような言葉も出る。

「いや……、そういうもんでもないんだが。ずっと関わっていられる関係の方がいいかもしれない、と思うときもあるしな……。沙龍と真武君のように」

それは自分の望む関係じゃない——と天真は思うのだが、九玄の心が動きそうにないなら、これ以上口説くのは逆効果かもしれない、とも思った。

そのとき、フフツと、九玄は思い出し笑いをした。

「真武君は、沙龍に嫉妬しているらしい」

「……真武君が？」

九玄は、東極山で木佐が漏らした本音のことを言っているのだが、それを自分に語ってくれた、ということが嬉しいのだろう。

木佐の方は、そんな重大事を打ち明けたというつもりはないだろうが、九玄にしてみればそれは進歩なのである。

「それはそうと、帝都の様子はどうなんでしょうね」

天真は俵型の饅頭をひとつ、手に取って、違う話題を探した。

「火雲宮の情報はなにも届かないし、私もですが、欽姫も毎日心配してますよ」

「そこら辺は天界軍に任せるしかないんだろうが……、あの南方軍大将にはなにを聞いても誤魔化されそうだな」

「軍部ですが、私は秦様が気になりますね」

「ああ、そうか。貴方にとっては従兄弟になるのだったな」

いまの秦帝の父が、天真と玉帝の父親の弟に当たる。

しかし、天真と秦帝は歳がだいぶ離れているし、天真は若くして東宮を辞退して軍医になったので、普通の従兄弟同士ののような気安さはない。

ただ、自分が東宮を辞退したことで、第一位の継承権を持つに至った秦帝のことを、天真なりに気に掛けているということだ。

「帝都の防御結界は、秦帝の勅命なのか？ それとも九雷元帥の入れ知恵か？」  
九玄は、東方天界にとっては初の事態とも言えるあの大々的な結界を敷いたことがなにを意味するのか、未だに読み切れずにいた。

秦帝が腰抜けと言われるのを覚悟で、帝都だけを守り通すつもりなのか、それとも、他になにか意味があるのか、ということである。

確かに、あの防御結界を張ってしまえば、帝都は安泰である。

しかし、現在、天界軍部は帝都外にそのほとんどの部隊を展開させ、敵勢力に対して好戦的とも言える姿勢を見せている。

その双方の動きが噛み合っていないように見えるのは、なにも九玄だけではないだろう。

「さあ、どうなんでしょうねえ……。一介の開業医に火雲宮の事情は分かりかね



ますが、秦様が戦争を望んでないのは事実ですよ。ただ、だから『守りに徹する』という御方でもないはずですが……」

その天真の感想は、大体、沙龍や奏欽の抱いている印象と同じである。

翌日、敖丁の目を盗むようにして奏欽の居室を訪れた沙龍は、まず、東海龍王の件を報告した。

異凜が承諾してくれたことを告げると、

「ええっ!? 新しい東海龍王って、異凜様のことだったんですか!?!」  
奏欽が驚いた理由というのは、沙龍たちとはまた少し違う。

「異凜様は、一度、神仙であることを放棄した方ですから、五行の力は失われたはずなんです……」

「え? そうなの? でも、私が会ったリンリンさんは、文句なく『木行』のマスターだったよ?」

「なんか、不思議な話ですね……。これも『東海の至宝』の力、ってことなんで

しようか……」

独り言のように言う奏欽は、無意識に胸元の懐剣に触れていた。

奏欽が常時携帯している武器である。

この懐剣とガーターベルトに挟んである銃、更に、奏欽自身の五行の力があれば飛龍のボディガードなど本来不要のだが、奏欽の見た目から、周囲が『保護欲』といったものを感じてしまうのは仕方がないのかもしれない。

その意味では、華奢な沙龍も男にとっては『保護欲』を刺激する存在なのかもしれないが、沙龍自身はそれを常に撥ね付けている。

「本来なら私がやらなくちゃいけないことだったのに、沙龍さんに全部任せてしまつて、申し訳なかつたです。でも、これで『新しい東海龍王を探そう会』も解散ですね」

「ちよつと寂しいね」

沙龍がニヤツとしながら言うと、奏欽も微笑んだ。

しかし、その表情は、なにかを考えてる風だった。

「沙龍さん、これから、どうします？」

「うん……。一応、元帥にはここでノンビリしてろって言われたんだけど」

「……」

「……」

二人は、なんとなく黙った。

沙龍がそうするつもりはないことを、奏欽も分かっているようだ。

「沙龍さん、あの、厚かましいついでに、ちよつと相談に乗って頂きたいことがあるんですが……」

「うん？ なに？」

「前に、私が『東海の至宝』を探してる理由を話しましたよね」

「うん、確か、四つの至宝は四海龍王家が管理すべき……って話だよね？」

「ええ……。でも、陛下は、そうお考えではないのだと思います」

沙龍には、火雲宮の事情は全く分からない。

せいぜい分かるのは、あの若き天帝が宝に目が眩むタイプには見えない、ということくらいだろう。

だから、奏欽が言うように、秦帝が龍王家から『至宝』を取り上げようとして

いるのだとしたら、それはなにか政治的戦略があるのだろう。

「『神器』です。恐らく」

奏欽は、以前、沙龍に語ったその話を、もう一度、今度はかなり詳細に告げた。

元々はひとつの『神器』だったという龍王家の至宝は、太古の天帝が四つに分け、四人の龍王に下賜した。

巽凜はそれを、『陽中の陽』とされた始祖の魂魄——と言っていた。

「始祖って……、つまり、天界の創世に関わった、天界住民たちの先祖ってことだよな？」

「そうです。創世を成したと言われている数名が『始祖』と言われています。噂では、始祖たちは全員『五行行使者』（注1）でもあったようです」

「ふーん……」

「で、ここからは私の推測なので、大きな声では言えないんですが——」

と、身を乗り出して声を落とした奏欽に、沙龍も興味津々に顔を近付けた。

「陛下は、神器を使って、新たな『将神』を造ろうとしてるのかもしれない」

「……？」

「つまり、その始祖の魂魄をベースにして機械人形を……って意味です」

「ちよっと待って、欽チャン。私、そこらへんの事情とか全然知らないんだけど」

「……」

奏欽は眉根を寄せたまま、迷った。沙龍にこれを言っているのだろうか。

しかし、九雷や陽輝から聞いている可能性もあるし、例え初めて知る事実だったとしても、前世の自分をほぼ別人と見ている沙龍なら大丈夫ではないか、と奏欽は思った。

「『将神』という職は、昔から『無敵』であることが要求されてきました。四方将神たちを統率できるだけの力と、外敵を単独で狩ることができる、絶対的な力——、そういう力が必要だからです」

「うん……、そうだろうね。聞く所によれば、哪咤なた太子や緑麗は、半端なく強かったらしい」

「ええ……。でも、その強さは、天性のものや、修行によって得たものだけでは

ないんです……」

奏欽が、言いにくいことを言おうとしている気配は分かった。

だから、沙龍は自分から言った。

「やっぱり、そこにはなにか秘密があるんだな？ なにか、タブー的な秘密が」

「そのタブーをずっと担っているのが、南方軍の研究施設です」

「ああ、大体分かった。つまり、緑麗も半分は機械人形だ——ってことか」

「……」

奏欽は息を呑む思いで、沙龍のこの無謬に畏れを感じた。

「機械というのは少し語弊があるんですが、哪咤太子も緑麗様も、生命操作をされ、生体操作をされたというのは間違いないです。昔、ラボでそのデータを見たことがありますから——」

「なるほど……。欽チャンがちよつと前にしかめっ面をして、南海龍王家の業とやらを憂っていた背景も、なんとなく分かったよ」

「……」

暗い顔をしている奏欽に、沙龍は端的に言った。

「まあ、それはいまは置いておこう。感情は後で清算すればいいんだ」

そして、沙龍は自分が知っている、数少ない『将神』に関する話を整理してみた。

哪吒太子は仙界出身と言われている。それが、なぜ天界の将神になったのかは知らない。飛龍の『憧れの人』であり、緑麗を上回る数の妖魔を掃討した、最強の力を持つ、少年神——というのが沙龍の知っている全てである。

そして、東海龍王敖光の策に嵌められる形で、予ねてから不仲だった敖広を討つつもりが、敖光の方と刺し違えて死んだという。

なぜ、仙界出身の哪吒太子が、天界の役職に就いたのかは、奏欽が補足するよ  
うに、教えてくれた。

「哪吒太子は当時、危うい拮抗を保っていた仙界と天界の関係を修復するため  
に、仙界から天界に『献上』されたそうです」

「物扱いか……」

「天界側には、スパイとして送り込まれたのではないか、という疑心暗鬼があつ  
たようで、それ故に『将神』という地位に就けたと言われてますね」

「それを、直情型の敖広さんが訝しんで、衝突したってのは分かる話だな……」  
奏欽は幼い頃から、南海龍王家が担う裏の顔、すなわち南方軍の研究施設の実態というものに薄々気付いていた。

非人道的な人体実験の数々、生命操作や生体操作までして造り出される『最強の将神』、それらが部分的には必要悪なのだど理解はしても、感情の部分では許せない。

だから、南海龍王は継いでも、南方軍大将は拒否したのである。

自分の代わりに、大将の地位を継いでくれた敖丁には、だから感謝もしているし、後ろめたい気もしている。

「最近は、南方軍も研究機関としての役割は薄れていたようなんですが、現在の火雲宮の動きを見ると、静観していられる状況ではないです。陛下の要請があれば、すぐにでもラボはまた『最強の将神』を造り始めるでしょう」

「『四海の至宝』を揃えた秦帝が一言命じれば——ってことか」

「ええ……」

「しかし、火雲宮で『将神』の必要性が論じられてるって話は、私も元帥から聞



いたけど、そんな切羽詰った状況なのかな？ 極東勢力は、天界軍が退ければ済む話じゃん？ 実際、そういう準備をしているわけだし」

「陛下本人が軍部を信用してないのか、『将神』を造ることがなんらかの打開策になる、と信じているのかもしれないね」

「うーん……。でも、欽ちゃんや西海龍王が『是』と言わない限り、秦ちゃん陛下の下に至宝が揃うような事態にはならないわけじゃん？ そこら辺も向こうはなにか策を打ってんの？」

「いまのところ、火雲宮側から、龍王家に直接の打診はないんですが……。敖閏様が『北海の至宝』の保管許可を願い出たとき、やんわりと拒否されたらしいんです。私が陛下に東海龍王家の捕縛者の助命を願い出たときも『東海の至宝』と引き換えなら考えてもいい、といった趣旨のお言葉を頂いたので……」

「そうなる気配は確実にあるってことか」

「それに、景春大将も『東海の至宝』の探索任務を極秘に負っていたのではないかと私の配下からの報告もありまして……」

「うん……。そこなんだよな……」

沙龍は、唸るように呟いた。

四方軍の大將というのは、従うのは元帥位のみで、天帝の命令は聞かなくていいことになっている。

組織として、軍部を総括する元帥位からの命令と、国家の頂点である天帝の勅命が、微妙に食い違ったときに迷わないためである。

しかし、その元帥は、勅命の下に動くわけなので、そういった食い違いは普通に考えれば皆無と言っていい。

ただ、現場のプロと、会議室の決定では、言葉の表現の仕方が違うので、その混乱を避ける意味もあるのだ。

といっても、実際に、大將たちが、天帝直々に、勅命を受けることがないわけではないし、それに無意味に逆らうことは当然許されていない。

景春が、天帝から直接『東海の至宝』に関する命を帯びていたのか、それとも九雷からなにか命じられていたのか、それは沙龍の知るところではない。

「でも、景春さんは、自分の個人的な理由で『東海の至宝』の在り処を知りながら、それを隠してたんだよね……。実際、至宝は東極山に置いてきたし、それを

秦ちゃん陛下にチクるようなこともしない気はするんだけど……」

「沙龍さんは、結構、景春大将のこと、買ってるんじゃないですか？」  
奏欽までもが、悪戯っぽく微笑みながらそんなことを言う。

しかし、沙龍は難しい顔をしたまま、その冗談には乗らなかった。

「いや……、イメージだけで推測してると、痛い目見るんじゃないかって、昨日  
気付いたところ」

「……？」

奏欽の話、昨夜の九雷の意味深な問い掛け、そして、景春のいままでの言動——。それらを合わせると、どうも妙な結論になるのだ。

「欽ちゃんの心は分かってるよ。至宝は秦ちゃん陛下には渡したくない——って  
んでしょ？ それはリンリンさんも同じだと思う。西海龍王は分からないけど  
ね」

「敖閏様のお心は私にも分かりませんが、少なくとも、面倒なことはしたくない  
と思ってるはずです」

「だったら、しばらくは大丈夫じゃ？ 龍王たちがバックれてる限り、火雲宮側

の好きにはならんでしょ」

やはりこういう結論でしめられた、と奏欽は思った。

しかし、自分は誰かに——それが心強い友なら尚更である——そう言って欲しかっただけかもしれない、とも思うのだ。

(注1) 五行行使者……五行の力(木・火・土・金・水)を全て同時に使える者のこと。現在の天界では秦帝と沙龍しか居ない。

当然と言えば当然だが、敖丁のシスコンぶりには、皆、呆れ果てた。

猫っ可愛がりなんてものではない。

朝、顔を合わせれば「オハヨウ、欽ちゃん。よく眠れた？」から始まって、朝食の席では「コーヒーは絶対飲んじゃダメ！ ミルクいる？ オレンジジュースいる？ 僕がとってあげるよ」と、一人劇場である。

基本的に誰にでも人当たりのいい天真でさえ、「あの人はちよつと苦手です」と言っていたくらいだ。

敖丁は、文字通り、奏欽しか見ていない。

そして、周囲が敖丁に声を掛けても『なにか用？』と言わんばかりの、露骨に嫌な顔をして一言二言しか口をきかない。

こういう態度では、嫌われて当然である。

更に、敖丁は、妹だけが可愛いようで、フェミニストでは決してない。

客観的には相当の美女である九玄に対しても、可憐な美姫である吉羅に対しても、同じようにぶすくれた反応しかしない。

これは、『美女に靡かない』という意味では多少評価ができるかもしれないが、沙龍のことはそこら辺のゴミのように扱うので、やはりそこにはなにかしらの差別も見られた。

そして、当然、ゴミ扱いされて黙ってる沙龍ではない。

敖丁が一人になったところを狙って、沙龍は、喧嘩を売ってみた。

「で？ てめーはいつまで居るんだ。妹の元気な様子が見れたんなら、とつとと帰りやがれ」

「ここは君の家じゃないでしょ。なんでそんなこと言う権利があんの」

沙龍の不機嫌な顔に負けない、不景気な顔で言い返してきた。

「吉羅公主に、ここに欽チャンを滞在させてもらってるのは、私が頼んだからなんだよ。居候の居候まで増やしてどーする」

「……」

敖丁は、口を開くのも面倒とばかりにブスっとしていたが、沙龍の文句が一段

落ついた所で、ここぞとばかりに口を挟んだ。

「なんかさー、全然変わってないよね。少しはマトモな姿になったかと思えば、その唯我独尊なところってのは、何度転生しても治らないの？」

「……」

今度は、沙龍が怒気を含ませたまま黙った。

「大体、なんで君が僕の妹とあれこれ、こそこそとやってるワケ？ 龍族のことに首突っ込むの、やめてくれない？」

「……」

「そもそも、妹がこんな場所に避難しなきゃいけなくなったのは、誰のせいなの？ 君があちこち連れ回したからじゃないの？ だったら、喧嘩売るのは僕の方なんだけど？」

「ほーう……」

沙龍は、いい加減、怒気と殺意の視線を飛ばすだけに飽きたので、握った拳で、背にしていた木の幹を叩いた。

メシツという音を立てて、木が倒れていく。

勿論、こんなものは脅しにもなんにもならない。

ただ、自分の鬱憤を晴らすためだけの行動である。

「喧嘩なら、二十四時間、言い値で買ってやるぞ……。なんなら私の利き腕を封じてやってもいい」

それは、沙龍がよく使う言い回しである。

自分に不利な状況すら、付け加えてもいい、と言い放つ。

その上で、相手を屈服させ、平伏させるといふものだ。

「……。そういう根拠のない自信とかハツタリは、ここじややめておいた方がいいんじゃないの？」

「お坊ちやまは分かってないな。喧嘩ってのは、最初のハツタリが一番肝心なんだよ！」

「ちよつ、——っ!？」

このとき、敖丁は本気で喧嘩をするつもりなどなかっただろう。だから、沙龍は仕掛けたのである。

辺り一帯が、聖魔剣の一突きの影響で、陥没した。



痛み分け——ではあるが、沙龍は、一発も、一撃も、貰っていない。

それは、敖丁が手加減したからではない。

沙龍が全力で挑んだからである。

しかし、その二人の喧嘩は、白熱する前に、奏欽に哀願された飛龍に止められた。

仲裁役など、飛龍にとっては恐らく人生初の経験だっただろう。

敖丁は、恐らく、体中に青痣と擦り傷を負っていたはずだが、子供のような捨て台詞を残し、奏欽に引きずられて行った。

『なんだ、昔の方がずっと強いじゃん』

そんな負け惜しみのような言葉だったが、沙龍はその一言に、腹の底から煮えたぎるものを感じた。

「……カキ氷、ペンギン、シベリア……」

沙龍は、昼寝をする白帝君の隣で、先ほどから、なにやらぶつぶつ言ってい

る。

北方軍大将は、堅物ではあったが、礼儀は一級品だった。

東方軍大将は、礼儀はなかったが、筋は通っていた。

しかし、あの南方軍大将は、礼儀云々の問題ではない。

「キュウ……？」

沙龍の手が止まったのを不思議に思った小龍が、見上げてくる。

クールダウンするための単語をぼそぼそと呟きながら、沙龍は地面に○印を描いた。

そこに描かれた格子は、沙龍が描いた○印と、小龍が描いた×印で埋まっている。

こういった単純なゲームは理解できるようで、小龍は、なかなかの（幼龍にしては）頭脳派だった。

気を抜くと、負けてしまうのだ。

「……ム」

自分の印を描いて、誇らしげにまた見上げてくる小龍は、勝利を確信している

ようだ。

澄んだ空気と、青く茂った原生林と、小さな源泉のような泉——。その憩いの空間で、沙龍はしばらく、怒りを鎮めながらも、色々と考え込んでいた。

ゲームの勝敗は、既に放棄している。

「なんであるシスコン馬鹿大将が旦那のお気に入りなんだ？」

てつきり熟睡してると思った白帝君が、欠伸をしながらそんなことを言った。

「……読むなよ」

しかし、いまのは自分の落ち度だろうと思った。

あまりにも撒き散らしていたので、嫌でも伝わってしまったのだろう。

「俺にはあっちの東方軍大将の方がお気に入りに見えたけどな？」

「そこが元帥の屈折してるとこなんだよ」

沙龍は苦笑した。

自分も最初はそう思ったのだ。

権力に靡かない頑固な景春と、官僚主義丸出しで嫌味な敖丁、である。

どちらが上官の信頼を得ているか、といえば、普通に考えれば、景春に軍配が上がる。

しかし、九雷は違うらしい。

旧知の仲で、景春のことを信頼しているのは事実だろうが、自分の悪口を公然と言う男のほうを信頼している、というのは、俄かには信じがたい。が、昨夜のやり取りで、九雷はこういう聞き方をしてきた。

『お前は、気に入らなかったか？』

景春のときは、『お前も、気に入ったか？』と聞いたのである。

その正反対の言葉に、九雷の真意があるのだ。

「ところで、いま、ファンファンはどこ？ 帝都？」

沙龍は、目を瞑ったままの白帝君に聞いた。

「んー。多分」

「いま、帝都の中に居る人と連絡って、できる？」

「パンピーには無理なんじゃねえ？」

「だから、君たちにできるかどうか聞いてるのだよ」

そう言うと、白帝君は「よッ」と掛け声を掛けて、半分身体を起こした。

「なにが聞きてえんだ？」

「火雲宮の内情とか、そこらへん」

白帝君の秘書官である汎々は、見た目は脳天気美青年だが、その実、優秀な元諜報部員である。

上司の無頓着な性格と怠惰な仕事ぶりを充分にカバーできる能力を持っていた。

「ちよっと待ってる。直接話せるようにしてやる」

白帝君は、ぐるっと周囲を見渡してから、やっぱここしかない、という風に足元の泉を覗き込んだ。

そして、右手を水面にかざして、水鏡を造り出す。

少し時間が掛かったが、その水鏡が汎々の居る帝都と繋がった。

大口開けてハンバーガーを頬張ろうとしている汎々の驚いた顔が、水鏡の中に見えた。

「随分早いランチだな……」

何度か会ったことのある顔に、沙龍が軽く手を振ると、汎々は、にへら、と誤魔化し笑いのような笑みを見せた。

とりあえず、自分のすべきことは終わった、と沙龍は思っていた。

東海龍王は見つけたし、巽風は元通りに吹くようになったし、これで、結果として九雷は青龍のまままでいられるはずだ。

しかし、なにか、しなきゃいけないことが残ってるような気がするのはなぜだろう――。

その思いは、汎々の話を聞いて、具体的になった。

「……それで？ その話はどこかに報告とかしたのか？」

「いえ、特にどこにも」

「自分の上司にも？」

と、隣を見れば、白帝君はまたも昼寝モードで、沙龍と汎々の話など聞いちゃいない。

「俺の立場としては報告義務もないし、そもそも、ボスも報告しろなんて言わないで。いまだって、お昼寝中なんですよ？」

水鏡の中の汎々は、肩をすくめて言った。

「呑気だね、アンタらは……」

四方将神がかなり自由な裁量を持っているのは沙龍も知っているが、外敵の侵入を受けている真っ最中の天界で、中央が諸問題を抱えているというのに、五行のバランスを担うべき一人は、ここでのんびり、昼寝なんぞしている。

「その監察府ってのは、そんなに厄介なの？」

「まあ、構成メンバーがそもそも明かされてませんからね。別名『地獄の告げ口係』とか『隣の執行人』なんて呼ばれてますよ」

天帝のみが知るそのメンバーは、各府の内情を天帝に報告するという義務を負っている。

普段の業務と兼任するのが常らしく、隣の机で仕事をしていた同僚が実は監察府のメンバーで、自分の仕事ぶりが直接天帝に報告されているなんてこともあるかもしれないので、そんな別名がついているようだ。

尤も、多少の汚職程度は問題にはならない。

よつぽどのがない限り、いきなり投獄されて、断罪されることもないのだが、過去には、そういった事例も少なからずある。

「構成メンバーは、諜報部ですら把握してませんよ。ただ、今回は、リークされたって可能性があるようですけどね」

「リーク、か……」

沙龍にとっては、もう顔も思い出せないような、あの元宰相の話である。

失脚して、盆裁でもいじっているかと思っていたあの中年官吏が、いま、その監察府を率いているというのだから、驚きである。

再度、働く場を与えようという秦帝の恩情なのだろうか。

「確かに、あの元宰相なら、私や元帥に恨みがあってもおかしくはないな……。軍部にも入り込んでいるというその監察府のメンバーの誰かが、『東海の至宝』の所在を秘匿し続けた景春さんのことを、秦帝に告げ口する可能性だってある……」

「とは言っても、元帥閣下のことだから、そこら辺はもう手は打ってると思いま



すよー？」

「ム……。そうだろうけど」

沙龍が心配しているのは、九雷の『煽って尻尾を出させる』というやり方そのものである。あれでは、いつか、背中から刺されてもおかしくはない。

「あ、それとですね、帝都が防御結界を張ったのは、その元宰相殿の指示だって噂ですよ？」

「なんだって……？ 秦帝本人の判断じゃないのか……？ どういう事情だよ」

「さあ？ よく分かりませんが、陛下が無事で、元帥が敵勢力を追い払ってくれりや、それでいいんじゃないすか？」

「この上司にして、この部下か……。なんか、あれこれ考えるのが馬鹿馬鹿しくなってきた……」

いびきをかいて寝ている白帝君と、話は終わったと判断して食べかけのハンバーガーを頬張る汎々を交互に見て、沙龍は嘆息した。

6 清林山の鏡石

「敖丁大将、一体いつまでご滞在されるおつもりか」

夕餉の終わった時間を狙って、九玄は敖丁に詰め寄った。

朝は沙龍に、夜は九玄に同じ話をされて、敖丁の方もいい気分ではないだろうが、傍目にはのらりくらりとかわしていた。

「仙界に迷惑かけるなっということについてはさ、僕も上官にきつく言われてるから。そこら辺は大丈夫だよ」

ここに滞在してるのが既に迷惑なんだよ、と思いつつも、九玄は沙龍よりは遥かに大人の態度で接した。

「もし私が個人的に出来ることがあれば、貴官がここを出て行く手伝いくらいはするが？」

「……フム？」

そう言われて、敖丁は考えた。

いや、考えるふりをした。

「つまり、あれ？ 早く出て行って欲しいわけだ？」

「無論だ」

なんの余地も与えない、九玄の無駄のない事務口調の方が、敖丁相手には効果的かもしれない。

「じゃあ、出て行く前に、ちよつと世間話くらいはしておこうかな」

「心得た」

険のある笑みを浮かべて、九玄は頷いた。

敖丁がなにをしに清林山に来たのか、九玄にはほぼ分かっている。

が、それを、まず敖丁本人に認めさせない限り、話は進まない。

だから、まずはそれに成功した、という笑みである。

「僕はある物を探している。『それ』は恐らく君たちにとってはそれほど価値のないものかもしれないが、いまの天界の状況においては、そこに住む者全員の命運を左右するほどに価値のあるものだ——と言え、貴女には分かるだろう」

いきなり核心をつく話を切り出されたことが、九玄には少し予想外だった。

敖丁は『それ』を黙って持っていくつもりはないようだ。

「しかし『あれ』を天界軍部に渡すわけにはいかないな」

「うん、だろうね。じゃあ、軍部や陛下に、じゃなくて『個人に』だと、どう？」

「個人？」

「もしくは、そうだな。貴女が最も信頼している天界の住人に、という条件だとしたら、どうだい？」

「……」

九玄は慎重に敖丁の真意を読んだ。

あの鉱石を天界側に持ち出すのは御法度中の御法度だ。

過去に一度禁を破った者が居たせいで、天界には『五行砲』という無敵の武力が存在することになってしまったのである。

元々『五行砲』は、天界側が、仙界を作った西王母に圧力をかけるために考案されたものだった。

初代南海龍王が設計し、南方軍の研究所の技術者たちが形にした、最高の武力

——、それが『五行砲』である。

しかし、実際には西王母は武力衝突を望まず、天界による支配を大人しく受け入れたので、圧力をかける必要もなくなり、『五行砲』は外敵防衛のために水晶宮に造られることになった。

以来、『五行砲』の要とも言える反射鏡に、清林山で千年に一度だけ採れるという『鏡石』が使われているということは忘れ去られていたし、この鏡石のことを知る者はほとんど居ない。

天界側で鏡石の存在とその所在を知っているのは、南方軍の研究施設の責任者、つまり、南方軍大将だけなのである。

「つまり、使用するつもりはない。持っていることを武器として、外敵を一掃したい。そして『持つ者』はこの際誰でもいいが、できれば軍部寄りの者がいい——。そういうことか？」

「そういうこと」

敖丁はあっさりと言った。

「しかし、それでは足りないな。例え最も信頼できる者に預けたとしても、鏡石

が使われない、という保証はどこにもない」

「フム、困ったな……。なら、僕たちは大人しく滅びるしかない」

「五行砲ひとつあったところで、戦争を終らせられるわけでもあるまい？ 更に、なければ滅びるほど、天界軍部が脆弱だとは思わないが？」

「いや、間違いなく滅びるね」

キツパリと言った敖丁は、帯刀の柄の部分から、小さなチップを取り出した。それは、敖丁が数年かけて探っていた、『外』の情報が詰め込まれた、データ・チップである。

敖丁は、まだこれを九雷にしか見せていない。

他の大将たちは知らない事実である。

その最重要機密事項を、仙界の武力を束ねる九玄に漏らすのは、危険といえた。

が、これで九玄を説得できるのなら、安いものである。

「そこまで事態が深刻なら、私個人でなく、正式に西王母様と直接交渉するという方法もあるだろう。むしろ、その方が双方のリスクは少ない」

九玄は、完全に仕事の顔で言った。

いま見せられた画像や、敖丁の説明に、どれほど信憑性があるのか、九玄自身は判断しかねるが、敖丁がなんとしても鏡石を手に入れなければならぬ任務を帯びているということは理解した。

「それを視野に入れるのが遅すぎたのが、若き陛下のミスなんですよ」  
「なるほど」

「いまは、事務レベルの手続き踏んで、西王母に面会のアポを取って、優雅に晚餐しながら交渉を進める、っていう段階じゃない。向こうさんが、いま、五行砲が実は使えないって事実を知ったら、相当やばいね。帝都は防御結界でなんとかもつかもしいれないけど、最悪、帝都以外は全滅だ」

「……」

九玄は苦い思いで夜空を仰いだ。

当然、奏欽や吉羅には聞かれぬように、敖丁を連れ出しての野外での密会である。

周囲に人の気配はないが、事が事だけに、慎重に、音を遮断する結界を張つ

た。

そして、冷たい夜気を吸い込んでから、九玄は言葉を探した。

苦しい決断である。

自分の立場を貫いて『否』と言えば、自分の友も恋する人も命の危険に晒すことになる。

しかし、禁を犯して『是』と言えば、強大な力を一方の陣営に渡すことになる。

が、九玄には指針があった。

それに従えば、迷うことはない。

「ここで、口約束で貴方が『五行砲は攻撃には使わない』と言ってくれても、結果がどうなるかなど誰にも分からない。最悪が最悪を呼んで誤射などという事態になったら、東方天界も極東世界も、そして、ここ、崑崙も全滅するかもしれない。それが、私一人の命で償えるのなら譲歩してもいいが、そうではあるまい。

……つまり、崑崙防衛隊長としては、鏡石を渡すことは決してできないな」

敖丁は、九玄の澱みない物言いに感心しながらも、今度は本来の目的で刀の柄



に手をかけた。

できれば実力行使はしたくはなかったが、仕方があるまい。

その挙動を見ながら、九玄がゆつくりと言葉を続ける。

「しかしな、敖丁殿。そちらの出した条件、『私の最も信頼する者』に預けるのなら、鏡石の採掘現場に案内してもいい」

「……誰です？」

敖丁に、小一時間ほど待て、と言った九玄が向かった先は、沙龍の居室である。

寝入り際を起こされた沙龍は、それだけでも不機嫌だったが、九玄の話聞いてますます不機嫌になったようだ。

「え〜〜〜、なんで私が〜〜〜」

思いつきり嫌そうな顔をした沙龍は、面倒なのが嫌というより、同行者が嫌なのだ。

わずか十二時間前に喧嘩をした相手に協力する義理など微塵もない、と言いたげである。

九玄は、「やはり」という顔をした。

「もう、四方軍の大将と個人的に関わりになるのは、遠慮したいんですけど……。あ、陽輝は別ね」

「ほう……？ 東方軍の大将とは『仲良く』やってたじゃないか」

「娘々……、ミヨーな誤解しないでくれ。私は屈折男も無礼者もどっちも嫌いなんだ」

「プ……」

と、九玄がにやけた目で笑うので、沙龍はムツとした。

「なんだよ」

「屈折度も無礼度も、お前の情人は一級品だと思っただが？」

「フン……」

この面白くない気分は、せめて缶ビールで晴らさなければなるまい、と冷蔵庫に向かう。

小さな備え付けの冷蔵庫には、沙龍の好きな銘柄の缶ビールが数本入っていた。

しかも、サイズまでいつもの愛飲しているものと変わらない。

この行き届いた配慮は、恐らく、吉羅の指示なのだろう。

九玄にも一本渡したが、彼女は話の決着を見るまで飲むつもりはないらしい。

「お前も事の重大さは理解しただろう。頼む、お前しか居ないんだ」

「しかし、その鏡石とやらは、天界側にあっちゃいけないんだろ？ 娘々が手引きしたってバレれば、娘々の身が危うくならないか？」

「それはお前の気にすることじゃない。上手くやるさ。それに、例え罷免されようが、追放されようが構わん」

「なんでそんなに潔いんだ。裸一貫になっても気にしないってか？」  
九玄はフフッと笑った。

「なあ、沙龍。以前、こんな話を聞いたことがある。戦乱の中で、己の立場に縛られ、これから失われるであろう命の数を天秤にかけ、たった一人の友を失ってしまった馬鹿な将のことをな……」

それは、他ならぬ九玄自身のこと、失った友とは、緑麗のことである。

「私は、その人の選択は正しかったと思うけど……？」

「確かに、正しかったかもしれない。だが、そいつは後悔したんだ。なぜだと思  
う？」

「いや、分からん」

「別に立場が惜しかったわけでもない。一人よりも多数を救いたかったからでもない。真実は、『友を売りたくない』という信念を、多数の命が救われるということ、を免罪符に、自ら折ってしまったからだ。自分のせいで、何万という命を散らす事実耐えられなかったからだ。つまり……、保身だよ、沙龍」

「……」

「だから、私はもう二度と、そんな保身故の選択はすまいと決めたのだ」

「分かったよ……」

沙龍は静かに頷いたものの、思い直すように九玄を見た。

「あのさ、娘々……。私は、元帥は『五行砲』を使うつもりはないような気がするんだよね。でも、それは私が思うだけであって、本当は核弾頭一発でこの戦争

を終らせるつもりかもしれない。で、そうなったときに、私は彼を殺してまで止めたりはしないよ。それでもいいの？」

「私が信じてるのは九雷元帥じゃなくて、お前だ。そして、お前の選択は、すなわち、私の選択だ。お前の好きにしろ」

そこまで言って、やっと九玄は缶ビールを開けた。

「うん、ありがとう。……元帥に渡すかどうかはまだ分からないけどね」

「それならそれでもいいんだ。とにかく、奴が待ってる。行くぞ」

深夜、沙龍は、九玄と敖丁と共に、庵を後にした。

まだ起きていた天真には「体が鈍るから娘々の修行に付き合ってくる」と言っ  
て出てきたが、天真はそれを信じてはいまい。

沙龍の出掛ける気配を察した飛龍がむっくりと起き出してきて、ついてくると  
言い張ったが、奏欽の傍に居ろ、と沙龍に諭されてしまった。

「欽ちゃん、一人にして大丈夫かな」

敖丁が未練がましく後ろを振り返りながら言っているのを、九玄はさらりと無視したが、沙龍はいい加減ブツツリいつてしまった。

「飛龍も聖霄も居るんだから大丈夫だろう。大体、崑崙一の美女と、天界一の美女が二人も揃って両手に花なのに、なに文句たらたら不平たらたら言ってるんだよ」

「崑崙一の美女はいいとしても、天界一の美少女って、誰」

「……」

「かつての緑麗は、確かに『天界一の美女』だったけどね。……美しけりやい  
いってもんでもないよ」

なぜか嫌悪感あらわに、唾棄するように言った敖丁に、沙龍は初めて彼の本音を見た気がした。

7 龍王たち

水晶宮の周囲には東方軍の部隊が展開されていて、蟻の子一匹通れないような厳戒態勢が敷かれていた。

その第二戦闘配備の真っ只中に、黒塗りリムジンが速度を落として、水晶宮の玄関先に停車した。

丁度、景春が副官の冬践から、指令書を受け取っていたときのことである。

「敖閏殿——？」

リムジンから優雅に降りて来たスーツ姿の西海龍王敖閏が、景春に向かって片手を上げてにこやかに挨拶をすると、三百六十度、リムジンに向けられていた緊張の視線が止まった。

「景春君、久しぶり〜」

「よくご無事で。晶都も封鎖されたと聞きましたが」

景春はつくづく龍王には縁があるな、と思った。

これで現役の三人の龍王全員に短期間で会ったことになる。

「蛇の道は蛇ってね」

「『陰符』（注1）をお使いに？」

「まあ、無駄に味方を警戒させるのも、敵を煽るのも嫌だったんで」

陰符とは、皇家の者などがお忍びで行動するときを使う符のことであるが、姿を消せるという便利さに比例して発動させるのは相当難しい。五行のマイスターの中でもさらにトップクラスの力量がなければ使えないといわれている。

敖閏が来るかもしれないという触れは、一応、水晶宮に展開させている部隊には出しておいたが、一方的な無線連絡しかしてないし、その連絡をした後に晶都が例のランクAの亡者に襲撃されたと聞いていたので、心配していた所だったのだ。

「異凜殿は、奥殿にいらっしやると思っています」

「うん、ありがとう」

いつもより少し引き締まった表情で、敖閏は水晶宮を見上げた。

龍王に即位したばかりの異凜に色々手助けをしてやって欲しい、というのは景



春から敖閏への依頼であったが、それは年長の敖閏が自発的にでもしなければならぬ役割でもあった。

水晶宮の内部は、綺麗に整っていた。

すっかり掃除もされて、ちらほら人手も見える。

散り散りになっていた東海龍王家縁の者たちが、新龍王の帰還と聞いて、自主的に戻ってきたらしい。

といっても、その数はかつての半数にも満たなかった。亡き敖坤に対する遠慮や、世間体を気にしてというのものもあるだろう。

広い廊下を奥殿まで進んで、敖閏はかつて敖坤が書齋にしていた部屋に赴いた。

開け放たれた部屋の中には、見た目は二十代半ば過ぎくらいの女性が書類に埋もれながら、熱心にパソコンのモニターを見ている。

淡黄の衣装がまず目を惹くが、その柔らかなイメージは衣装の色のせいだけではない。

「お帰り、巽凜チャン」

開いているドアをわざわざノックして、敖閏は声を掛けた。

異凜が、パッと輝く顔をあげる。

「敖閏様……!? お久しぶりです〜!」

異凜にとっての敖閏は、歳の少し離れた親戚のお兄さんのようなものである。降嫁する前に、琥珀宮まで挨拶しに行った記憶がある。

「うん。ホントに久しぶりだ。色々、大変だったみたいだね。景春君から連絡もらって、すっ飛んで来たんだけど、大丈夫?」

「ええ、なにからすればいいのか迷ってた所なので、色々お力を貸して下さい」

「うん、そっちもだけどさ、異凜チャンの心情とかも色々ね」

「あ……」

敖閏らしい気遣いに、異凜は微笑んだ。

数奇な運命を経て、故郷に戻ってきた異凜には、もう、兄も父も、甥も居ないのだ。

その孤独さは、異凜自身の前向きで楽観的な性質だけで癒されるものでもないだろう、と敖閏は思っている。

確かに、水晶宮の門前を見上げたとき、巽凜は懐かしさと共に、言い知れぬ寂しさも感じた。

そのとき、隣に景春が居なかったら、涙のひとつも零れていたかもしれない。しかし、巽凜はさめざめと泣く術を知らなかったし、世間知らずの少女でもない。

「私は大丈夫ですよ。なんてったって、しぶとく生き返った未亡人ですから！」

「さすが、巽凜ちゃん……。変わってないなあ……」

水晶宮に駐在している東方軍の士官たちは、半分は好奇心でこの新龍王を出迎えたのだが、巽凜を悪く言う者は居なかった。せいぜい「頭が弱そうだ」と漏らす正直者が居たくらいである。

上官である景春が巽凜に敬意を持って接しているのが大きかった。大将の意が、すなわち全軍の総意になるところが、東方軍が統率が取れている証でもある。

「いま、世の中便利になったんだなーって感動してた所です」

巽凜がパソコンで見ていたのが『釣りスポット案内』だったので、敖閏は微笑んだ。

しかし、実際には、それは片手間に見ていただけで、巽凜がマニュアルを見ながら奮闘していたのは、別のことである。

「ひとまず、水晶宮は最低限使えるようにはなってるみたいだね」

「ええ。一応、最優先で防御システムは再構築しました」

着任した当初、景春はそれをしようとしていたようだが、龍王でなければメイ・システムが起動できないので、諦めたようだ。

そのシステムは、一晩かけて、なんとか巽凜が起動させた。

「就任したばかりの巽凜ちゃんには酷かもしれないけど、いま、ここは一番危険な場所になってるんだよね」

「そうみたいですわね……」

水晶宮に帰還するまでの旅程で、景春から大体の状況は聞いた。

景春自身は、自分になにかを要求するといったことはなかったが、「元帥から龍王になんらかの要請があるかもしれない」とは言っていた。

「私……、なにをすればいいんでしょう？」

心細げに呟く。

敖閏は、それに対してはつきりと言った。

「龍王の唯一にして重要な仕事は、任地を護ること。それだけだよ」

四海を護る——、それは言葉で言うほど簡単ではない。

ここ数百年、『外敵』の侵攻は数えるほどしかないが、過去には何度も異民族神魔との闘いを余儀なくされてきたのが龍王家である。

四方軍は常時、その方角に配備されているわけではない。

そして、四方将神の仕事というのは、メインは五行のバランスを整えることであるし、基本的には単独行動であるので、限界がある。

つまり、まっさきに侵攻の被害を蒙るのが龍王家であり、それを撃退しなければならぬのが龍王なのだ。

それ故に、それぞれの龍王たちは独自の軍事力を持つことが許されているのである。

「問答無用で仕掛けてくる敵以外には、外交で宥めて、下世話な話、金で解決っ

て方法もある。もし戦端が開いてしまったとしても、軍部と協調できれば、交渉次第で停戦させることもできる。その裁量は、各龍王に任されてる」

「あれ？ でも、龍王は確か政治的な介入はできないんですよね？なのに『独自の外交権』があるっておかしくないですか？」

「それは本人次第——って所かな」

「……？」

「つまり、野心があれば介入できるってことさ」

「野心がなければ、とりあえず四海を護っていればいい、と？」

「そうだね」

「なるほど。……で、敖閏様は『どちら』なんです？」

巽凜はストレートに聞いてみた。

敖閏はほとんど本音を言わないので、誰もが都合よく誤解しがちだが、巽凜は理解しているつもりだった。

同じ龍族として、というのもあるが、敖閏の比較的若い時代を知っているからである。

『南の島でリゾート生活をしたい』と敖閏はよく言っているが、それは『緊張を強いられる日々の合間には』という条件がつくのだと巽凜は思っている。

『たまの緊張感』を嫌がって言っているわけではないのだ。

「さあ、どっちだろう。玉座に座ってみたいとは思わないけど、ただ錆びていくだけの男で居たくはないね」

上手な言い方だ、と巽凜は思った。

「どっちにしても、ある程度、中央の動向を把握してる必要があるってことですね……」

「そうだね」

「いまから、極東勢力を説得することは可能でしょうか？」

「残念ながら、時既に遅しだろうね。軍部は既に各地で本格的な戦闘を繰り広げている。これを龍王一人で止めるのは……、正直言って絶望的だ」

「やっぱり……。仁、いえ、景春大将も同じことを言っていました。戦うことを知らない私が、戦いを止めたい、なんて、所詮、甘い考えでしょうか」

「……」

デリケートな問いである。

敖閏がどう答えようかと考えている間に、巽凜は言葉を続けた。

「戦争するのが仕事の彼らに、私は戦わない方法を探します、なんて偉そうに啖呵切ってしまいました……。案の定、呆れられてしまいましたもの」

「まあ、景春君は、男所帯に慣れ過ぎてるからねえ」

「ええ……」

景春のぶっきらぼうな態度は、自分が『斉』の後であつた頃からも変わっていない。

気難しそうで険しい顔をしていながら、冷淡なわけではないということも知っているが、やはり自分に対して距離は置いているというのが分かる。

それは、かつて臣下だったという遠慮から来るのか、それとも、他の理由があるのか、巽凜には分からなかった。

敖閏は、先ほどの巽凜の問いかけを考えながら、自分の身長以上ある大きな窓から、東海を眺めていた。

その一面の深い青は、琥珀宮から見える淡い色をした西海とは、だいぶイメー



ジが違う。

こんなにも目の覚めるような青色をしているのは、東海が血を吸ってきたからだ——とも言われている。

それだけ、歴史の表舞台を担ってきた土地柄でもあるのだ。

天界の要所でもあるこの東海を護るのは、普通の女性として生きてきた巽凜には荷が重いのかもしれない——と敖閏は思う。

尚武思想を重んじてきた東海龍王家では『変わり者』と称されてきた巽凜である。

しかし、その重すぎる荷を覚悟の上で背負った巽凜には、なまじ腕の立つ武将とは別の強さがあるはずだった。

敖閏は、それを評価したいのだ。

「巽凜ちゃん、僕は、君の覚悟は軍人よりも厳しいと思うよ。『非暴力』は誰も  
が選べる道じゃない」

敖閏の視界に、波頭が、白く畝った線を作っている。

やがて深い青い色の中に消えていくが、またいつしか光る海面の一部になっ

て、その白さを見せる。

その繰り返しだ。

そうやって、何百、何千、いや、何万もの年月を、飽きもせずを重ねていくこの世は、冷酷なまでに恬淡なものに敖閏には見える。

いつも、苦しみ、足掻くのは、情を持つ側である。

「一度、死んで尚、この苦しみを貫こうというなら、もう賞賛や脱帽を通り越して、やっぱり魂つてのは変わらないんだな、と思うね」

「変わらないだけかもしれないません」

真昼のガラスに写る巽凜の微笑みが、白い波頭に重なった。

「『龍王の仕事』なんて言っても、それは結局一個人の生き方だよ。いや、美学と言った方が格好はつくかな」

敖閏は、その美学を貫いている。

西海は数千年前から変わらず、琥珀宮が戦場になったことは一度もない。

それは、敖閏が『武力による戦争回避』を徹底しているからだ。

では、東海は、というと、敖光・敖坤の代では言葉は乱暴だが『喧嘩上等』の

立場を貫いていた。

だから、何度も戦場となり、水晶宮は『難攻不落の砦』と呼ばれているのである。

「いま、水晶宮は君の物だ。東海がどうなるか、どうしたいかは、巽凜ちゃんの胸ひとつで決まる。……君は、どうしたい？」

敖閏は振り返って、巽凜をまっすぐに見た。

「そうですねえ……」

巽凜はしばらく考えていたが、全く別のことを言った。

「ところで、私がここに戻ってくる前に、どうやら敖丁が水晶宮に来てた形跡があるんですが、なんででしょうね？」

「敖丁君が？」

南方軍大將がなんの用事で？ と、敖閏も不思議に思った。奏欽あたりに言われて水晶宮の様子を見に來ただけだとしても、不可解である。

いまは天界領土内を容易く移動できるような状況ではないのだ。

しかし、巽凜も不思議そうに眺めているその折鶴は、メモ魔の敖丁がよくやる

癖だった。

パソコンの脇に、ご丁寧に三羽くらい置いてあったのだが、用無しになった紙切れを破るのではなく、手慰みに折り紙にしてしまうような変わり者がそうそう居るはずもない。

敖丁がそれを故意に残したのかは分からないが、巽凜は幼き日の思い出をそのまま見つけたような、ちよつと嬉しい気分だった。

だから、思い出したように、言った。

「思いもかけずに龍王になってみました、私、やりたいことがひとつありました」

「……？」

「光哥々も広哥々も居ないこの水晶宮で私が龍王になったのは——、多分、この東海で釣りをするためなんですよ」

巽凜は、敖閏の隣に来て、同じものを見つめた。

そこには、どこまでも深い青がある。

窓を開けた。

海と同じ色をした巽凜の髪が、風を受けて揺れる。

東極山から吹く巽風が、新しい龍王を祝福するように水晶宮を包んでいた。

「釣り……？」

なにかの比喩だろうか、と敖閏は思ったが、巽凜は釣竿を垂らす真似をしてみせた。

「光哥々は、水晶宮の周囲では釣りをさせてくれなかったんです」

「なんで？」

「釣りをしてる私をあまり見たくなかったんじゃないでしょうかね？」

巽凜はなにも考えずにそう言ったが、言ってみてはじめて、敖光の心情が分かった。

カツオの一本釣りともなれば、もはや格闘技である。真剣勝負である。男のロマンである。

それは、龍王家の姫君のやることではない、ということだろう。

しかし、敖広の方は、よく巽凜の釣りに付き合ってくれた。

敖光の目を盗んで南海近辺の浅瀬まで出掛け、赤帝君も交えて、釣りを楽しん

だものだ。

「でも、いま、この東海が私の庭になったのなら、ここで釣りをしない手はないでしょう」

にっこりと笑った後、巽凜は群青色の瞳に強い光を映した。

「だから、この穏やかで美しい釣り場を荒らす人は許しません」

(注1) 陰符……元は『六韜』卷三竜韜、第二十四に出てくる言葉で『割符』の意味。ここでは『姿を隠せる』というマジック・アイテムのひとつ。

水晶宮の正門付近、軍事エリアの簡素な一室では、冬踐が次々と入る『仮司令部』からの通信を処理している。

その隣で、いつもの三割増しに険しい顔をして打電文を読んでいる景春は、内容はもう読み終えていたが、別に考えることがあつて、読む振りをしているだけだった。

(敖丁の奴、余計なことをしやがったな……)

東方軍の部隊のほとんどを残して、景春が沙龍や奏欽と共に北の鎮江楼に向かった後、ここ、東の水晶宮には南方軍大将の敖丁が訪れている。

景春と敖丁だけではない。

王霊君は負傷のために大将代理に代行させたが、それぞれの大將たちは時を同じくして、皆、自分の任地を放棄するように、別の方面に謎とも思われる徒歩の行軍を行っている。

その行動の意味を、四人の大將たちは理解していた。

九雷の、徹底したリーディングである。

しかし、上からの命令とはいえ、自分の任地を一時的ではあるにせよ、他の大將に任せるというのは、あまり気分のいいものではない。

愛着があるのだ。在任期間のまだ短い景春ですら、水晶宮は単なる寢床以上の場所だと思っている。

その愛着のある場所を、敖丁は、滞在していた間に色々変えていったようなのだ。

要塞としての水晶宮を、敖丁の気まぐれで滅茶苦茶にされてしまっっては堪らない。

一番酷かったのは、五行砲の砲門に、デカデカと黄色い文字でラクガキがされていたことだった。

### 『故障中』

ご丁寧に、黒い縁取りまで施された文字でそう書かれてあった。

勿論、景春はすぐにそれを消させたが、これが敖丁のブラック・ジョークだと



したらセンスの欠片もない上に、悪質すぎる。

背任罪を問われてもおかしくないような内容である。

一体、どういうつもりだ、と景春は憤慨した。

敖丁は、昔から『天才病』などと呼ばれていた、癖のある男である。

それは、本人曰く『IQの低い奴には理解できない』といった類のものだそう  
で、毎日まとまった睡眠を取らないとか、夕飯はほとんど食べないなどという生  
活態度から始まって、公の場で堂々と上官の批判をしたり、職場では自分の研究  
成果をある日突然壊しまくったりする。

だから、平気でこういう悪戯もやるのだらう——と周囲は慣れているし、諦め  
てもいるわけなのだ。

しかし、いま、景春が険しい顔をしている一番の理由は、そんな、消せばどう  
にかなるようなラクガキではなかった。

景春が巽凜と共に水晶宮に戻ってきたとき、コンクリートで四方を覆っただけ  
のこの執務室の、景春の机に、紙で折ったにしては見事なアートが残されてい  
た。

クラシツクな天秤と、その両方の皿に乗っているものも、全て折り紙だった。皿に乗っていたのは、蛇のような長い動物に見えるが、ヒゲや角があるので、かろうじて龍に見える。

この、龍の色が決定的だった。

黄と青――。

その二匹の龍は、それを見た景春が一瞬息を呑むほどの力を持っていた。

（これは、敖丁の警告か？ からかって遊んでるだけなのか？ それとも――）  
その判断はできなかつた。

ただ、敖丁を問答無用で一発殴りたいという忌々しさだけが残った。

この二匹の龍も、景春がすぐに握りつぶした。

ラクガキと同様、人目に触れさせていいものではない。

しかし、その折り紙はずっと景春の軍装のポケットに納まったままになっていく。  
る。

捨てればいいのに、と自分でも思うのだが、今度敖丁に会ったとき、目の前に突きつけて「どういうつもりだ」と喚き散らしたい思いも少しあるからである。

無意識にポケットに手を入れると、紙の感触がある。

だから、景春の顔は険しくなり、隣の冬踐がビクビクしているというわけである。

冬踐は、上官の事情など、知る由もない。

東極山で一仕事してきたばかりなので、疲れているのだろう、と思うくらいだ。

自分は鎮江楼の『仮司令室』に参加した後、水晶宮に戻るように言われ、昨日、やっとここに到着した。

夏招は鎮江楼に残ったらしい。

なぜ、その役目を自分に課してくれないのだろうか、と、少し九雷を恨んだが、本来の仕事をずっと放置していたので、そろそろ戻る頃合だと感じていた。

が、久しぶりに景春の周囲で仕事をしていると、自分の上官はこんな疲れた表情を見せるような人物だったのだろうか、と思った。

「元帥は本当にあの人数で、北の残存勢力を殲滅したのか。……化け物だな」  
目の下に疲労を滲ませた顔で、景春は口だけで笑った。

いま見ていた打電文には、その概要が記されているが、同じことをやったとしても自分にはできなかつただろう、と景春は思った。

「真武君の功績も大きいようですが」

「まあ、あの偏屈美人を『協力させることができる』のもあの人の凄さではあるんだがな」

景春はそう言って、脇に置いていた刀を取る。

時間通りなら、もうすぐ哨戒部隊が戻ってくる。

彼らの報告を聞いて、新たな指示を出さなければならぬ。

「109 は了解した、と言っておけ。但し、二一については敖丁次第だ。遅延の可能性も含めて検討する旨、鎮江楼に伝えておけ」

「了解しました。あの……、さしでがましいようですが」

冬踐は恐る恐る言った。

「少しお休みになられては？」

「そんな疲れた顔してるか？」

「い、いえ、そういうわけではありませんが。大将には休めるときに休んでおい

て頂かないと」

「ああ、分かっている」

余計なお世話だ、と言わんばかりに部屋を出て行った景春だったが、足元になにか動くものがあつたので、それを避けようとして、バランスを崩してしまつた。

が、それくらいで転ぶことはない。

「キュ……？」

「っ、な、なんだ——？」

下を見れば、緑色の小さな龍が丸い目で景春を見上げている。足を引っ張る気はなかつたのだろうが、景春が自分に気付かなかつたので、思わず手が出たのかもしれない。

「……疲れてんの？」

横から掛けられた少女のような声に、ギュツと体がこわばつた。

確かに、壁に手をついている景春は、軽い眩暈も感じたのだが、足がもつれたのは決して疲労のせいではない。

連日連夜、この警戒態勢で、神出鬼没のように現れるランクAたちを相手にしているのも、疲労が溜まっていくのも事実だが、景春は『疲れた』などと死んでも言う気はなかった。

それよりも、大将ともあろう男が副官や民間人に心配されるなんて、なんて無様だ、と思う。

「なんだ。なにしに来た」

水晶宮に居るはずのない沙龍が、少し離れた場所から心配そうに自分を見ている。

景春にとっては、一番心配されたくないような人物である。

小龍がふわふわと低空を舞いながら、沙龍の肩口に戻った。

「……えーと」

沙龍は自分がここに来た経緯を説明しようとしていたが、景春は無理に姿勢を正して、背を向けた。

自分で聞いておきながら、興味はない、と言いたげだ。

「邪魔しに来たんじゃないなら、勝手にしろ」

「……」

沙龍は、ムツとした。

完全に無視されるのもムカつくが、こういう紋切りの態度も妙に腹が立つ。

この戦時下では、毎日気軽に会えるものではない。

別に嬉しそうな顔をしろ、というわけではないのだが、もっと労いの言葉や態度があってもいいんじゃないか、と沙龍は思った。

巽凜にはきっちり家臣のように丁寧な態度を取っていたくせに、更に言うなら、奏欽に対してもわりと紳士的だったのに、自分に対するこの無遠慮さが余計に癢に障る。

「なんか、ご機嫌斜めだな……」

「フン……」

気の置けない間柄、というレベルにはまだ至ってないはずなのに、この無愛想具合である。

それは、景春がいつも自分を『格下』として見ようとしている心情の表れではないかと、沙龍には思える。

景春の背中が止まって、わずかにだけ振り向いた。

「異凜殿に会いにきたのなら、奥殿だ。いま、ちょうど、敖閨殿も来ている」  
「あ、そ……」

景春がこういう態度を取る以上、喧嘩にもならない。

沙龍がなにかを諦めて水晶宮に向かおうとすると、景春が躊躇いがちに、また、声を掛けた。

「どうして、元帥の所に戻らないんだ……？」

奇妙な聞き方ではあるが、的を射ている。

東極山から戻つての沙龍の行動は、景春には不可解に見えるのだろう。

「四六時中一緒に居なきやいけないのか？ 新婚夫婦じゃあるまいし」

「ほう……、しかし、それがお前の選択じゃなかったのか……？」

景春が強気に、嘲笑するように言う。

しかし、沙龍はその言葉にムツとするよりも、少しホツとした。

「文字通り解釈すんなよ。子供か、お前は」

「子供はどっちだ。お前の生きてきた年月は、俺にとつちや、赤ん坊みたいなもの



んだ」

「あー、やだやだ。長く生きてりや偉いなんて、誰が言ったんだ。とっしよりは知ってることが多い可能性があるってだけじゃん」

「フン……」

鼻を鳴らしながらも、その本来のやりとりに、景春もホツとしているようだった。

しかし、沙龍の存在は、景春にとってはすぐ近くにあるようで、とても遠い。それが、ひどく虚しかった。

「『どうして』か——」

沙龍がひとりごちた。

「……?」

「実は、私も分からない……。いや、分かってはいるのかもしれないけど……」

『どうして』の答えはいつも、気軽に口にできるものではない。

暗黙の了解や、禁断の事実を含んでいることが多い。

だから、沙龍もこればかりは気軽に説明することはできない。

代わりに、沙龍は差し当たってのここに来た目的を告げることにした。

「景春さん、鏡石は私が持ってきたよ」

「な——、なんだって!？」

それこそ、気軽に言える類のものではないのだが、沙龍は懐から拳大の石を取り出すと、風船のようにポンポンと手の上で上下させた。

景春は、それを、半分口を開けたまま見ている。

「だけど、これは景春さんにも、元帥にも渡さない。私がリンリンさんに直接渡す」

「なにを、また、そんな勝手なこと言い出すんだ、お前は!？ 大体、なんでお前が持つてる!？」

喚き出した景春に、沙龍はニヤニヤしながら、弄んでいた鏡石を大切そうに仕舞い込んだ。

「“これ”を私に託してくれたのは九玄娘々だ。敖丁は提案しただけ」

「しかし、天界の領土にある以上、その鏡石をどう使うかは、軍部に一任される。お前の勝手にできるもんじゃない」

「再三言うようだけど、私は軍人じゃないし、天帝陛下の命令を聞く義務もないただの人間だ」

舌打ちしそうな景春は、握っていた刀の柄をグツと握り締めた。

斬ろうというのではない。

斬れないのは分かっている。

ただの、苛立ちである。

「なぜそう突っかかるんだ。お前は、俺の邪魔ばかりする」

「突っかかっているのは景春さんの方だろう」

「……」

「……」

暫しの睨み合いの後、景春はなぜかフツと笑った。

「……?」

「まあ、いいさ。お前の信念を折れる人が、それを渡せと言え、お前は渡すんだろ?」

「どうか。いや、元帥は私の好きにさせてくれると思う」

「それは、女の自惚れってヤツなんじゃないのか？」

「フン、どうとでも取ってくれ」

沙龍は背を向け、行ってしまった。

その後ろ姿を景春はしばらく見送っていたのだが、その顔には微かに笑みが浮かんでいる。

「大将——！」

冬踐が小走りにやって来て、また新たに入った指令を手渡した。

その紙片を受け取りながらも、景春は視線を戻そうとしない。

「……？」

冬踐が景春の視線を追うと、沙龍を出迎えに正面玄関まで出てきた巽凜が居る。

「ああ、眼福ですね。今回の作戦は、不謹慎ながら、幸せですよ……」

短い間だが、奏欽と共に行軍し、いまは新しい龍王公主が居る。

普段、男所帯の中に居る冬踐にとっては、夢のような状況だった。

巽凜が男であることを知らないなら、それも幸せだろう。いや、知っていて

も、最早それはあまり関係はないかもしれない。

「まさに、戦場の花といったところですねえ」

「……そうだな」

冬践が言ってる『花』は巽凜の方かもしれないが、景春が見ているのは沙龍の方だった。

9 五行砲の使い方

相変わらず三つ揃えのスーツを上品に着込んだ敖閏が、大袈裟に沙龍を出迎えた。

「緑麗チャン、久しぶり〜。元気そうだね？」

いま、各地が戦場になっている天界で、街から街まで移動するのはかなり大変である。

沙龍も、清林山から水晶宮まで、超低空飛行で飛龍に送ってもらったのだ。

普通、霊獣や龍族たちが飛行する場合、高度はせいぜい地上から百メートル以内である。

しかし、その高度だと、確実に両陣営のレーダーに引っ掛かるので、それを避けるためにはそれよりも高度か、地上すれすれのコースを飛ぶ以外に方法は無い。

が、生身の沙龍に高い高度はきつい。

最近はただでさえ寒がりになっているので、仕方なく木々を薙ぎ倒しながらの地上すれすれコースでここまで来たのだった。

敖閏がどうやって晶都からここまで来たのか、沙龍は気になったのだが、本人は、

「僕は狡い手を使ったんで」

と、あっさりと手のうちをばらした。

敖閏が使ったという『陰符』は、太上老君クラスでないと発動できないということ沙龍も知っている。

「誰でもちよつと修行すれば使えるよ」

と言っていたが、『千年くらい、死ぬ気で頑張つて修行すればね』と沙龍には聞こえた。

「……それで、この鏡石を使えば五行砲を修復できちゃうんですか？」

巽凜が、先ほど沙龍から手渡された銀色の石を眺め回しながら言った。

「仕組みは南方軍大将に大体聞いてきた。研磨して詰め込むだけでいいらしい」

「でも、なぜ私に……？」

「水晶宮はいまはリンリンさんのものだから、リンリンさんに渡すのが筋だろう  
と、思っている」

ズズツとアイスコーヒーを飲む沙龍は、そういえば、ちよつと前にこの部屋で  
殺し合いがあったんだよな、ということ思い出していた。

敖坤や、代々の東海龍王が自室として使っていた部屋で、半分は五行砲のコン  
トロール・ルームになっている。

「いいんでしょうか……？ 軍部に協力しなきゃいけない義務もあるってお話  
を、いま、敖閏様から聞いたばかりなんです」

「巽凜ちゃんは、やっぱり水晶宮に桁違いの武力は要らないと思ってる……？」  
敖閏が確認するように聞いた。

聞くまでもなく、巽凜は頷いた。

「ええ……」

沙龍はその表情を見て、早くも軍部と龍王の腹積もりの差を感じるのだが、

「うーん……。元々、この鏡石を採ってきて五行砲を修復するっていうのは南方  
軍大将の第一任務だったらしいんだよね。なのに、あっさり私にデリバリーさせ



たつてことは、敖丁はもしかしたら、本当は修復なんかしたくないのかも……？」

「だとしても、いまの元帥のお考えでは、撃てる状態にしておきたいということなのでしょう？」

巽凜は九雷とは面識がない。

知っているのは、東王夫が元帥位に就いていた時代だ。

「どうかなあ……」

沙龍は、口に含んだ氷を、口の中で回しながら考えた。

九雷の予測しているシナリオと、敖丁の腹の底は果たして一致しているのだろうか。

そして、景春はどうだろう。

更に、西と北はどう思っているのか――。

(まあ、陽輝はあんまり深刻に考えてないかもしれないけど……)

沙龍自身も、実は『五行砲』のことについてはそれほど深刻には考えてない。

強大な武力を持つべきとか、持たざるべきとか、そういった観点では物事を考

えていないのだ。

しかし、奏欽や巽凜の主張は明らかに『核は持つな』である。

「九玄さんも、この鏡石が大量殺戮の道具にされることを望んでいないわけですよね？ だから、緑麗様に託したんですよね？」

「そうだね、多分」

巽凜はしばらく手の中の鏡石を見つめながら、今度は敖閏に聞いた。

「もし、五行砲がフル充填で発射されたら、その被害はどうなります？」

「大陸ひとつなくなっちゃうね」

「……」

沙龍も巽凜も、その威力の凄まじさを見たことはないが、敖閏は一度だけ、威力を抑えた試射を見たことがある。

敖閏の言葉だけでもその片鱗は窺えるだろう。

かつて、奏欽がこの五行砲を水晶宮と共に自爆させようとした心情も、巽凜ならば分かるというものだ。

「でもさ、緑麗ちゃん。五行砲を修復させたとして、だよ？ それを起動できる

人は限られてるってのに、軍部はそれを『誰に』やらせるつもりだと思う？」

「……うーむ」

沙龍は、氷を噛み砕きながら唸った。

五行砲を修復したいのは誰か——と言えば天界軍であり、それはイコール九雷である。

九雷にそれを命じたのが秦帝だというなら分かる気もするが、この前汎々から聞いた事情を考えれば、それは有り得ない。

秦帝は、極東勢力の侵攻以前からほぼ監禁状態にあるという話で、自分の意向を外部に伝えることはできない状態なのである。

それはそれで重大事なのだが、ここではひとまずそれは置いておく。

「元帥が、強大な軍事力に物を言わせて敵を黙らせるつもりなのか、といえ、それは違うと私は思う。自分の力でないものを使って相手を屈服させるのは、あの人のプライドが許さないはず……なんだけど、そう断言できないところがなんとも……」

それは、九玄にも語った、沙龍の考えである。

「で、私の予想に反して、あの人が五行砲を最終手段として使うつもりなら、秦帝が動けない以上、やっぱ私を当てにしているのかもしれない」

五行砲を起動、発射できるのは『五行行使者』のみである。

『五行行使者』、すなわち、五行の力を全て同時に使える者——。それは、太古から、天帝の証でもあった。

かの太上老君や、泰山府君でさえ、それはできない。

しかし、幸か不幸か、五行属性全てを備えた黄龍をその身に宿す沙龍には、それが出来てしまうのである。

「僕は、九雷君が緑麗ちゃんにそんなことをさせるはずがないと思ってるけどね」

「……うん。ということとは、やっぱり、＼そういうこと＼なのかな……」

沙龍は独り言のように言った。

結局、どう考えても、そうなる。

鏡石はキーアイテムではあるが、九雷はそれを『使う』つもりなどないのだ、と。

敖丁が命じられ、沙龍がデリバリーした鏡石は本物であるが、九雷が使うつもりがないのなら、これは偽物でもいいはずである。

しかし、本物でなければならぬ事情があるのだ。

（そのリスクを冒さなければ、五行砲の威力を信じない人が居るから——？ ……  
…ってこと？）

その『誰か』が、自分の知らない人であればいいとは思うが、どうやらそうもいかないようだった。

「まあ、そこら辺は私の仕事じゃないけど……。とりあえず、リンリンさん。鏡石は確かに渡したから、後はお任せする。誰かに渡すか、粉々に砕くか、それは自由だ」

「……いいんですか？」

「……」

沙龍にも、迷いはある。

自分の読みが間違ってる可能性も、なくはない。

本当は、間違っていて欲しい、とも思っている。

「リンリンさん。私は、どっちでもいいと思ってる。五行砲はただの武力だ。威力が強かろうが弱かろうが、所詮、物だ。だから、それを扱う側が迷わなければ、最悪の結果にはならないはずだとも思う。そこに、予想外のトラブルがあったとしても、ね」

例え、そのせいでこの世界が崩壊しようが、大陸が一個なくなろうが、沙龍は、九玄と違って、気に病むことはないだろう。

それは開き直りでも、悟りでもない。

叡智と信念を以ってしても滅びる世界なら、それまでのものなのだ、と沙龍は思っているのだ。

「私はリンリンさんの戦争反対って気持ちも、元帥の能力も、どっちも信じてるし」

「私が、こんなもの要らなくい、って言ったら？」

巽凜が、鏡石を放り投げる真似をして軽やかに言った。

「それが一番かもしれないけどね」

げんと はつけいきゆう  
玄都、八景宮――。

夜の帳が下りたその宮殿の一室では、太上老君が寝転んだままの格好で、モニターに映る人物と話をしていた。

テレビ電話なのでこちらの姿も筒抜けなのだが、まるで構わないといった感じだ。

正装を着込んでいる西王母は怒っているようだったが、それは太上老君のだからしなさに対してというよりも、その言動に関して、である。

「敖丁は妹御に会いに行っただけじゃろう。大目に見てやりなされ」  
寝酒をやりながらの会話だった。

「しかし、かの軍大將は重大な禁を犯したのですよ？　いくら玄都の護衛隊長も兼ねているからといって無罪放免にしては、仙界の面子が立ちません」

西王母の言も尤もである。

「鏡石ひとつ盗まれたところで、なにも変わらんじやろうが」

「変わる可能性があるから、抗議しているのです」

「可能性は、どこにでもあり、また、どこにもない——」

そんな禅問答のようなことを言う太上老君には、なにを言っても無駄である。かつて、西王母が火雲宮で暮らしていたとき、太上老君も官吏として勤めていた。

その頃からの付き合いであり、その頃から西王母はこの飄々とした老人が苦手なのである。

自分が火雲宮を出て行ったときは並々ならぬ手助けしてもらったという大恩もあるので、余計、苦手意識が拭えない。

「心配するだけ、老けるぞい」

「しかし……」

「敖丁は釈放してやってくれんかのう。実際に鏡石を持ち出したのは緑麗だというではないか。とすれば、罰すべきは緑麗ではないのか？」

太上老君は、西王母がそれをできないのが分かって、言ってるのだ。

沙龍には『四大保障』というお墨付きがある。

天仙界における沙龍の自由は、四人の実力者によって認められている、という



ものだ。

しかも、その四人のうちの一人が西王母自身であるので、西王母は沙龍を罪人として捕えることはできない。

さらに、沙龍の弟は、西王母の末娘たる吉羅公主の（内縁ながら）夫君でもある。

身内のような沙龍を、仙界内で罪人にするわけにもいかないのである。

「とにかくじゃ。いま、四方軍の大將を拘束しておくわけにもいかんじやろう。不問にせよとは言わん。『戦争』が終わってから、九雷にでも直談判すればいいではないか」

それもまた骨の折れる話ではある。

が、ここで天界軍に恩を売っておく必要もあるかもしれない、と西王母は思った。

「では、然るべき人員を引取人として寄越すのであれば、南方軍大將は条件付きで釈放しましょう」

西王母は数時間の話し合いの末に、とうとう折れた。



## 10 捕われの秦帝

秦帝の事実上の監禁には少し入り組んだ事情がある。

異風の結界が弱まり、東からの外敵を警戒しなくなつた段階で、火雲宮の閣議では意見が真つ二つに割れていた。

単純に、こちらから積極的に討つて出るか、専守防衛に徹するか、である。

秦帝は、どちらかというと後者寄りの主張をしていた。

『仮想敵』がどう出てくるか分からなかつたし、神魔世界における『列強』の一国として、動じない態度を取るべしという自負もあつたからだ。

しかし、実際に東海付近で小競り合いが確認される頃になると、秦帝は『交戦已む無し』として、九雷に外敵の撃退を一任した。

ここより、九雷は独自の行動を取るのだが、この前後に、『将神』の必要性を主張してきた一派が居る。

平時でもたまに出て来る議題ではあるが、実際の外敵の侵攻が確認されれば、

確かに説得力はあった。

秦帝も、その必要性については反対しなかった。

そこで、『元将神』である緑麗（つまり沙龍）を推す者や、別の有力者を選出すべきだと主張する者が出てきたのだが、中でも『四海の至宝』に目を付けた一派が居た。

『四海の至宝』が元はひとつの神器であり、さらに、大元は始祖の魂魄の欠片であるということは、ほとんど知られてはいない。

しかし、どこから漏れたのか、その一派は、それら事実を突き止めた上で、『その神器で最強の将神を造ればいい』と言い出したのである。

人道的な観点から反対する者も多かったが、監察府の巧妙な内部工作を経て、『候補の実力者をむざむざ危険な職に就けるよりはいいかもしれない』と考える者も多くなった。

ここに問題の監察府が出てくる。

九雷に失脚させられた元宰相が率いる監察府は、『地獄の告げ口係』だの『隣の執行人』だのと呼ばれているほど、火雲宮の暗部を知り尽くしている。

天帝のみが知るその構成メンバーは、表舞台では活躍できなくなった優秀な官吏から、ごく平凡な事務員までもが参列しているという噂だ。

なぜ、秦帝がそのような役所に元宰相を放り込んだのかといえば、やはり、秦帝のわずかながらの温情と、監視目的があつたからだろう。

つまり、監視しておかなければならない人物を、周囲を監視しなければならぬ役目に就けることで、当の本人を板挟みにし、身動きを取れなくするためである。

実際に、監察府のメンバーとして裏の事情を色々と知ってしまったえば、自分もまた告げ口されるかもしれない、という不安が出てくる。

かつては、そのせいで自分も失脚させられたのではないか、という疑心も出てくる。

これでは、誰も信じられなくなるものだ。

監察府のメンバーには二種類のタイプがいるという。

完全に秦帝に信頼を得て、揺ぎ無い信念の元に仕事をする者と、監視されつつ監視する仕事をしている者である。

当然、元宰相は後者だった。

そして、秦帝の狙い通り、元宰相は動いた。

『四海の至宝』の件を持ち出して、この開戦の危機に決定打とも言える提案をし、自分の立場を有利にしようというというものだ。

秦帝は、敢えてその話に乗った。

『至宝』を龍王たちから強引に取り上げるつもりはなかったが、元宰相の野望は別として『将神』を空位にしておくことには彼自身、後ろめたい気持ちがあったからだ。

提案した本人の目的は頂けないが、その提案には一考の余地がある、といった具合だ。

しかし、秦帝はまだ若い。

頑なに戦争回避を主張する者や、将神不要、いや、いまこそ必要だ、と論じる者たちの意見をうまくまとめることができなかった。

そうこうしているうちに、極東勢の目的のひとつが、監察府のメンバーによりもたらされた。

“敵の狙いは『五行行使者』そのものにあり”

諜報部ですら掴めていなかったその目的のひとつを、どうやって当該エージェントが知りえたのかは秦帝の知るところではないが、これにより、秦帝は火雲宮に閉じこもることを余儀なくされてしまったのである。

『五行行使者』は、東方天界において最強の武力である『五行砲』を、唯一撃つことのできる人物である。その切り札を奪取してしまえば、極東勢は圧倒的優位に立てる——。非常に、分かりやすい目的である。

だから、側近たちは、秦帝を護るべく、監察府のメンバーの後押しにより、半ば強引に『防御結界』を張った——というのがいままでの経緯である。

保護という名の、事実上監禁である。

一度張られてしまった防御結界は、秦帝一人ではとても解除などできない。

勿論、秦帝本人はこの状況を許容してはいない。

外聞が悪いというだけではなく、自分だけが強固に護られてはいても、『五行行使者』は現在もう一人居るのだ。

それを極東勢が嗅ぎ付けてしまえば意味がないからである。

しかし、それは九雷がなんとかしてくるのではないかと、秦帝は期待していた。

“彼になんとかできないのなら、他の誰にもできないだろう——”

だから、大人しく、火雲宮の自室で汗を流すことに専念しているのである……が、

「陛下……。ルームランナー（注1）に八つ当たりなされませんように……」  
体がなまるからせめて運動がしたい、と秦帝が言うので、魁星はバーベルやベンチプレスやら色々用意したが、非力な秦帝はルームランナーくらいしかまともに使えるものがなかった。

しかし、そのルームランナーさえ「前に進まないではないか」と言って、扇子でバシバシと叩いている。

「苛立ちは分かりますが、いまは辛抱の時期かと……」

近衛府の隊長として、ここに魁星が居るのはごく自然なことである。皇族の警護をする彼らは、主と寝食や入浴まで共にする場合がある。

尤も、いくら隊長とはいえ少し距離を持って待るのが通常であるが、秦帝は魁



星の闊達なところが気に入って、常に傍に置いていた。

「分かっている。いまの私に出来ることは祈るだけなのだ。我慢と忍耐は、生まれたときから持てるだけ持ってきた！　そう心配するな」

「はあ……」

「お前も見えているだけではなく、一緒に走れ！」

「と、仰られても、私も本来肉体派ではありませんので……」

魁星は駄々をこねる子供を見守るような気分だった。

普段、官僚相手に気丈に振舞っている秦帝も、普通の少年と変わらない部分もあると分かれば、顔も綻ぶというものだ。

「それで、太上老君には連絡が取れたのか？」

秦帝がその名を口にすると、魁星も、少し表情を引き締めた。

「いえ、毎晩夢枕に立ってるんですが、一向に」

「ム……。この防御結界の中で、唯一、外部と連絡が取れる可能性があるのは、お前の術だけだというのに、なんと体たらくな」

無線も有線も通り抜け不可、と言われている防御結界である。

反則的に五行の気脈を通して、なにかしらのアクションができるのは四方将神くらいのものであった。

「あのご老人の場合、分かかって無視してるところもあるんじゃないですかねー」

魁星は呑気にそんなことを言って、サイクリング・マシンで遊んでいた。

(注1) 余談ながら、ルームランナーの正式名称は「トレッドミル」と言うそうです。

誰が敵なのか――。

それは、いつも慎重に見極めなければならない。

しかし、赤帝君は少なくともこの南方軍大将は敵ではないと思っている。

赤帝君自身は、世間で言うほど、敖丁を曲者だとは思っていないし彼を嫌ってもない。敖丁の『天才病』が半分演技であることを知っているからだ。

「四方将神のお迎えとあつては、帰らないわけにはいかないね」

敖丁のふざけた調子に、奏欽はきつい視線で睨んだ。

「なに言ってるんです、敖丁お兄様！　ご自分で呼びつけたくせに！」

「だって、しかるべき引取人じゃないと釈放してくれないって西王母様が仰るから」

「もう……、この歳になつて留置所に入れられた挙句に……。こんな恥つさらしなこと、もう二度としないで下さいね！」

そうやって、奏欽は赤帝君の前で背筋を伸ばし、深々と頭を下げた。

「この度は、本当に、申し訳ありませんでした」

「いえ、私は太上老君の命で来ただけですので、そうお気になさらず。それよりも、九玄殿のことが気になるのですが……」

赤帝君は、太上老君から概要を聞かされていたので、九玄もなにかしらの罪を問われたかもしれない、と心配しているのだ。

「ああ、大丈夫ですよ。彼女はなにもしてないってことになってるから」

「……？」

「つまり、僕が散歩中に偶然見つけた綺麗な石を、緑麗にあげただけだから」

「なるほど……」

赤帝君が敖丁を敵ではないと思うのは、この分かりにくい男気が誰かに似ていると思うからだ。

『鏡石の入手』は敖丁にとっては第一優先任務だったが、崑崙側の事情を考えればその成功率は限りなく低かった。

が、彼は見事に目的を果たし、結果だけを見れば『無関係な民間人』は誰一人

として巻き込んでいない。

一人で大人しく留置所に入れられていたのも、最初から全ての責任を負うつもりだったからだろう。

奏欽はそのまま、飛龍と共に庵へと戻ったが、敖丁と赤帝君はひとまず二人で玄都に向かった。

南方軍の本陣があり、赤帝君の任地でもある、天界領土の南の拠点である。

「それで？ 玄都襲撃の規模はどれくらいだったんだ？」

清林山を後にしながら、奏欽には決して見せないであろう固い表情で、敖丁が聞いた。

「貴方の副官殿が被害を最小限に留めてくれましたから、軽微なものです」

「そう……。もしかして、君も相当無理してくれたんじゃないの？」

「それほどでもないですよ」

と微笑む赤帝君が謙遜でそう言っているのを、長い付き合いで敖丁も分かる。

「はあ、借りが出来ちゃったね……」

「それは、いずれ返してもらいますから」

赤帝君は、同じ南を護る者として、この南方軍大将との関係は結構気に入っていた。自分と全く違う人種だからかもしれない。

なのに、なぜ、あの同僚とは上手くいかないのだろうかと思う。

ともすれば、似通った性質を持っているはずなのに、九雷と敖丁は似ているようにやはり違う。

「そういや、君は景春には会ったことあるんだっけ？」

「いえ——？」

赤帝君が一瞬、眉をひそめたのは、その名が白帝君の言っていた『要注意人物』だったからだ。

といっても、白帝君のニュアンスはかなり明後日の方角にある。

東極山から戻ってきた白帝君が言っていたのは、『俺が見た限り、アイツ、阿姐に気があるな。どーするよ？ ライバル増えちやって大変だねえ』

そんな軽い言葉だった。

赤帝君にしてみれば「余計なお世話」と言いたい所なのだが、その言葉の裏にはなにか別の意図も感じた。

「東方軍大将が、どうかしたんです？」

「いや、元帥も酷なことするな、と思って」

「……？」

「あの人は、景春に天秤持たせてるんだよ。そして、最終的に景春は自分を取るだろう、と思ってる。それが過信でなきやいいんだけどね」

「天秤のもう片方にはなにが載ってるんです？」

用心深く聞いた。

赤帝君は新任の東方軍大将の背景をなにも知らない。

ただ、敖丁の言葉の端から、九雷と景春の間にはなにかしらの見えない駆け引きがある、という凶式は垣間見える。

「監察府でしょ」

敖丁の口から、意外な言葉が出た。

「……よく分からないんですが？　つまり、東方軍大将は監察府になんらかの含みがある、と？」

「いや、違うよ」

赤帝君が善人過ぎる思考でそう考え付いたのを、敖丁は苦笑した。

「景春自身が、監察府のメンバーなんだ。もう、ずっと昔からね」

「え……!？」

「景春にとって監察府は『古巢』だ。直々に陛下からも色んな命を受けてる。

人界周遊してたのは、途中からはその仕事の一環だろう」

「それを……、九雷元帥はいつからご存知なのか？ まさか知ってて、監察府のメンバーを東方軍大將にしたのか？」

「いや、さすがに最初は知らなかったと思うよ。途中で気付いたんじゃない？」

「……それで、泳がせているということなのか？ なんて話だ。軍部に爆弾を抱えるようなものではないか」

「そういう人じゃん、だって」

敖丁はあっさり言う。

その言い方から、九雷に対する敬意はとても感じられないのだが、そこに敖丁の癖があるのを赤帝君は知っている。

「だから、俺を取るのか、古巢を取るのか？」って天秤さ」



敖丁が両手を広げて見せる。

しかし、敖丁が景春をからかうつもりで残した折り紙では、その片方の手に乗っていたのは黄色い龍だった。

それにも、ちゃんと意味がある。

監察府がイコール黄色い龍というわけではない。

元宰相をそそのかし、監察府を使って、『黄龍』を潰そうとしている黒幕が居る、ということである。

(陛下は宰相を泳がせて、あの好々爺をどうにかしようとしてるだけさ)

『起家』と軍部では符牒で呼ばれることもある、隠居老人のことである。

その『起家』が悪い意味で執着しているのが『黄龍』だということを、敖丁は知っているのだ。

正確には、感じ取っている——というだけだが、敖広が密かに敵視していた人物を、敖丁もまた同じ龍族としての自身の勘で忌避しているのだ。

だから、敖丁が残した黄色い龍の折り紙は、景春に対する『忠告』の意味でしかなかったのだが、凶らずして、それは景春を別の意味で苛立たせてしまったこ

とになる。

敖丁は、景春と沙龍の関係については知らないし、興味もないのだ。

「しかし……、極秘のはずの監察府のメンバーがなぜ、いまになってリークされ  
たんです……？」

「さあ？　内輪揉めじゃないの？」

「……」

対岸の火事とはいえ、嫌な気分だった。

赤帝君には、九雷の高笑いが聞こえる気がする。

常に二歩、三歩先を読み、物事を上から見ているあの男には、景春の最終的な  
行動さえ予測がついているに違いない。

「煽って事を起こさせて叩きのめすという彼のやり方は、どうにも感心しない  
な」

しかし、敖丁は違う考えを持っているようだった。

「今回、煽ったのは、陛下自身じゃないかって気もするけどね」

「……そうなのか？」

「さあ、どうだろ？」

敖丁は誤魔化すように肩をすくめた。

12 鎮江楼の一夜

北方の地に現れた極東勢は一掃された。

いまは、事後処理と引き上げ作業中の鎮江楼の正廳である。

そこでは、仮司令室の仮スタッフとも言うべき数人が、ぼんやりとした空気の中に居た。

「なんか、あつという間だったな……」

まだ夢を見ているような気さえするのだ。この少人数であの物量の敵を全滅させたということが、未だに信じられない。

それは、東方軍から仮参加した夏招も同じだった。

「そうだな。真武君が居たとはいえ、実質、七人だもんな……」

九雷は、夏招と、王靈君、更にその部下三名を使つて、この北の地を平定した。

その三名の中には、燕も居る。沙龍に『鎡石』を手渡したあの士官である。

東極山から戻った木佐も助っ人参戦したが、それは最後の最後である。

負傷を押して出陣した王霊君の鬼気迫る働きがあつての勝利だろう。

しかし、雑談をする数人は、その王霊君よりも指揮を取った九雷の方を賞賛している。

体を張って戦場に赴くだけなら、軍属である以上、誰でもできるし、やらねばならない。彼らが普段やっていることと同じである。

が、「戦局を号令ひとつで支配する」ということを、彼らは今回、ほぼ初めて体験したのだ。

普段の火雲宮の司令本部に居るスタッフなどはそれが当たり前だと思っているが、現場に出ることしか知らない彼らには、戦慄さえ覚える出来事だった。

「大将が『この世で一番怖い人』って言ったのがよく分かるな……」

普段無口な夏招までが、そんな評を口にしていた。

その夏招が、無線機のトランシーバーを上げた。

丁度、水晶宮に詰めている冬践から、景春の報告という形で連絡が入ったようだ。

「なんだって……？」

やや興奮気味の冬践が支離滅裂な話をしているのを、夏招は俄かには信じられなかった。

「緑麗様が、鏡石を……？」

聞けば、敖丁が持ってくる予定だった鏡石を、なぜか、民間人の沙龍が水晶宮にもたらしたというのだ。

これでやっと五行砲が修復できると思いきや、しかし、沙龍はそれを景春ではなく、異凜に渡してしまったらしい。

「俺には判断できん。後で元帥に指示を仰ぐから——」

夏招がそう言ったところで、そのトランシーバーは、いま、正廳に姿を現した王霊君が横からゆっくりと取り上げた。

「どういうことだ？ 景春を出せ。それと、敖丁本人はなにしてる」

冬践はいきなり大将クラスが出てきてしまったので恐縮しながらも、なんとか説明をした。

「五行砲の修復は、四方軍のいずれを問わず、最優先任務だ。なら、景春から、

東海龍王に協力を仰ぐのが筋だろう。……いや、緑麗様は関係ない。あの方に軍務の縛りはないからな」

『しかし……』

「……」

王霊君はなにか、腑に落ちないものを感じた。

水晶宮で、なにか起こっているのかもしれない。

景春の下士官が、景春本人ではなく、それをこちらに報告してくることがそもそも、おかしい。

「指示を待て。俺が直接元帥に腹を聞いてくる」

王霊君はぞんざいにトランシーバーを戻すと、階上に上がっていった。

陽はとつくに落ちていく。

鎮江楼に降る夜陰は、依然、凍りつくような冷気を含んでいたが、この地を覆う水行の気脈は安定している。

冷え込む廊下から見えた窓の外の雪が、しんと輝いていた。

王霊君自身も『水行マイスター』である。

だから、この雪の美しさが、安定した気脈から来るものであるのも、体で理解できた。

五行のマイスターたちも様々で、頂点に立つような四方将神たちに比べれば、大将の持つ力はかなり落ちると言わざるを得ない。

それでも、一行を極めた者として感じるものは同じだった。

王霊君が向かった先は、木佐の部屋である。

ここに九雷が来ているのではないか、というのは、ここ数日の鎮江楼の空気を読めば分かる。

九雷と木佐はまだ付き合いも短いし、二人の性格からして会話が弾むというわけでもないのだろうが、大抵、自由な時間は二人で酒を酌み交わしたりしているのだ。

そのささやかな酒宴に、参加してるんだかしてないんだか分からぬ無気力さで、ひよろ長い感じの男がもう一人居ることがあるが、彼に至っては文字通りの居候らしく、王霊君も特に注意は払っていなかった。

「失礼。やはりここでしたか」



部屋を訪れると、意外にも朗らかな九雷の姿がある。

二人の囲んでる卓には安酒だろうが、茶けた色の酒瓶が乗っていた。

「……水晶宮からなにか緊急の連絡でもあったか？ その様子じゃ、鏡石でも届いたか」

九雷が杯を置いて言うと、王霊君が畏まった。

なぜ、いつも分かるのだろう。

「は……。しかし、その、事情が色々……」

王霊君がその場に居る木佐や公務員に遠慮をして二の句を告げないでいると、九雷は構わないという仕草をして促した。

今更、隠すことはなにもない。

王霊君は咳払いして、続けた。

「鏡石を持ってきたのは敖丁ではなく、緑麗様だそうです。しかし、現在、その鏡石は東海龍王の手にある、ということ……」

「そうか……。景春は動かないのか？」

「それが……。よく分からないのですが、動く気はないのかもかもしれません。いや

……、これは自分の感じたことではありますが」

「……」

その沈黙の間に、木佐は、王霊君を椅子に座るように薦めたが、王霊君は首を横に振った。

まだ仕事が残っている、と言いたげだ。

そのとき、窓辺で煙草を吸っていた公務員が、もそもそと九雷に声を掛けた。

「あんたが畏にはめようとしてるのは、あの東方軍の大將なのか」

王霊君は内容よりも、まず、その物言いにギョツとした。

元帥位である九雷に、こんな口が聞けるのは最高神（天帝、太上老君、太上道君、泰山府君の四名）くらいのものだろう。

仮に、公務員が東宮であったとしても、許されるようなものではない。

しかし、公務員はその辺りをちつとも気にしていないようで、それが却って自然だった。

九雷も別に咎める様子はないので、王霊君は、今度は、彼の言った『畏』という物騒な言葉に着目した。

が、王霊君がなにか言う前に、苦笑気味に九雷が、窓辺を振り返る。

「『真意を量っている』とでも言ってくれ。こんなのは、俺の立場なら誰だってやる」

「……。その……。景春が、なにか？ 裏切り行為でも？」

まったく状況を分かっていない王霊君とはいえ、噂くらいは耳にしていた。

もしかしたら、景春が東方軍大将に着任したことになるのか意味があるのかもしれない、と思った。

「いや、そういうわけじゃない。ただ、可能性はある、というぐらいだ」

「な、なぜです？」

「監察府のメンバーだからな」

「な、なんですって!？」

大男の王霊君が大声を出す。

そのとてつもない大きな声が窓ガラスに響いて、公務員は半歩後ろろずさった。

「あの景春が『地獄の執行人』!? 一体、なぜそんな——」

「なぜそんな危険人物を大将に据えたのか、と言いたいんだろう？」

「あ、いや、まあ、それもありますが……」

王霊君はしどろもどろに弁解した。

急に声も小さくなる。

「監察府のメンバーが軍部に送り込まれた理由が分かりません。ラボを暴こうとでもいう話ですか？」

「いや。俺を失脚させたい奴が居るとい話だ」

九雷がさらりと言うので、王霊君は啞然とした。

「その片棒を景春が担いでいる、と!？」

「落ち着いて下さい、王霊君。僕が見た限りでは、そんなことはありませんよ」

木佐がたまらず口を挟んだが、王霊君はいまからでもその裏切り者を成敗しに行く、という勢いだ。

「天上国家を守るべき我々の中に、そんな『告げ口係』が紛れていると分かったからには、我が身に変えてでも、誅殺致しますぞ！」

「うわー、前時代的なオッサンだなー……」

公務員がぼそつと言った。

「王霊君——」

なぜか宥める役になっている木佐の横で、九雷は椅子に背を預けたまま、ゆつくりと呼びかける。

その声に、なにか特別な力があるように、王霊君は我に返った。

まるで、恋人を呼ぶような『間』と調子なのである。

「ハ……ッ」

「事情はいまから話す。俺の仕事はあらゆる可能性を考慮して、先手を打っておくことだ。景春の件もそのひとつに過ぎない」

「ハ、ハア……」

「その上で、お前が俺の指示通り動いてくれれば景春を『誅殺』せずに済む。どうだ？ 話を聞く気になったか？」

九雷の優しげな声は、逆に緊張感を強いる。

王霊君は軽く頭を下げた。

「も、申し訳ありません。お聞かせ下さい」

公務員はその話を聞いても、大して驚きも感慨もなかった。

元々、関心のあるような話ではないし、ドライな感想しか持てない。しかし、王霊君は大泣きした。

二メートルを超える熊のような大男が、まるで酔っ払いのように泣いているのである。

「そ、そんな辛い過去があつたなど、自分、思いも寄りませんで……！ 不肖、この王霊君、同僚の義は通してみせますぞ！」

景春がなぜ、巽風を護り続けたかという話である。

「だがな、王霊君。話はここからだ」

九雷は軍装を解いた格好で、手酌で杯を開けているが、その目は明らかに仕事  
中のものであった。

その目が気になるので、木佐は、公務員とは違って、多少の興味を持って同席  
していた。

「……と仰いますと？」

「『斉』を滅ぼした当時の列強には、盤帝ばんてい（※玉帝の先々代の天帝）のバックアッ  
プがあつた。人界の覇権をひとつの巨大な国家に取らせようという、天界側の思

惑だ」

「……なんと」

「つまり、景春大将は当時の天政権にずっと恨みを抱いてるってことですか？」

木佐が聞いた。

「可能性はある。しかし、残念ながら、当の盤帝はとっくに死んでるし、恨みが強いのはいまの東海龍王の方だろう」

「あの龍王公主は、そういうの、ないと思いますが」

木佐は、春の陽だまりのような印象しかない巽凜の笑顔を思い出しながら言った。

「景春大将だって、国家転覆の野望があるような人には見えませんが」

そうなのだ。

景春は無愛想な性格はともかくとしても、芯の通った正義感であることに変わりはない。それは木佐だけでなく、景春と関わりを持った者なら誰でも思うことだろう。

「しかし、真武君」

ズビツと鼻を鳴らして、王霊君が口を挟む。

「景春はやはり、なんの存念もなく生きてきたわけではありません。善なる信念だけで一軍の将は務まりません。負を抱えてこそ上に立てるのだ自分は思っております」

その言葉に、九雷が頷いていた。

「敖坤亡き後の東方軍をどうするか考えたとき、ふと思い出したのがあの男だ。天界軍での実績はなかったが、腕は充分すぎるほどだったからな」

「そのときから、景春が監察府に在籍していたことをご存知だったので？」

「いや。それを知ったのは実は最近だ。大将に推挙する際に、士官学校を卒業してからの景春の動向はざっと調べたんだが、不思議と記録はどこにも残っていなかった」

「なるほど……、『洗濯』されたんでしょいな」

「おそろくな」

九雷は、沙龍に聞いて初めて、景春が人界の『斉』という国に仕官していた、と分かったくらいだ。



そして、汎々經由で景春が監察府のメンバーであるを知ったときは、なるほど、とも思った。

秦帝は知っていたはずだし、過去が洗われていたのも頷ける。

「景春の方は、元帥が全て承知していることを、知ってるんですか？」  
王霊君が聞いた。

「それはまだ分からんが、薄々気付いてはいるだろう」

「そうでありますか。しかし、お恥ずかしながら、自分にはこの先の展開が読めません……」

「はつきりしてるのは、元宰相殿が俺を失脚させたいというだけだな」

「……あの、小心者めが」

「それを、景春が手伝ってるのか、そうと見せかけて下克上でも狙ってるのか、それとも、陛下が景春や元宰相を使って俺を辞めさせようとしているのか、まあ、その辺のどれかだろう」

「結構、樂觀的なんですネ……」

木佐が本当にはそう思っていない口調で言うと、九雷も苦笑した。

王霊君はというと、未だ全快していない体を揺るようにして敬礼した。

「自分はここでの残務を片付け次第、敵勢力の総攻撃が予想される水晶宮へ向けて発ちます」

「ああ、そうしてくれ。俺も明朝には発つ」

「その総攻撃の際に、元帥閣下が味方に背中から斬られるようなことがないよう、祈っております！」

多少、皮肉にも聞こえた。

やれやれ、無謀な上官だ、と思っっているのかもしれない。

しかし、王霊君の自信と信頼に満ちた瞳は、どこまでも澄んでいた。

王霊君が去った部屋は、急に広くなったように感じる。

いつの間にかいなくなっている公務員のことなど気にもせず、九雷はまだ安酒を呑んでいた。

今日はやけに長居をしている気がするが、なんのためかと言えば、酒の力でも借りないと言えそうにない一言を言うためである。

だから、九雷が再度口を開いたのは、夜もだいぶ更けてからだだった。

「長いこと、協力させてすまなかつたな」

「……いえ」

木佐がまじまじと見るので、苦笑した。

「なんだ？ 俺が礼を言うのがそんなに珍しいのか？」

「そうですね。初めてのような気もします」

事務的な顔でそんなことを言う木佐に、初めて出会ったときのことを思い出

す。

若年の割に、思慮深い目をしているのが印象的だった。

九雷は、以前の真武君とは朝見での面識くらいしかなかったので、いまの方がよっぽど近くに感じる。

付き合いの長さから言えば、本当にまだ一年くらいしか経っていないのだが、一緒に居るのが楽だと感じるのだ。

不思議なものだ、と思う。

「景春大将は……、どういふつもりなんでしょうね」

これも、随分経ってから、木佐が何気なく言った言葉だが、九雷はすぐには答えなかった。

いや、答えられなかったのだろう。

それは、九雷にも本当の所は見えていない。

「俺を、殺したいのかもしれない……」

静かな響きを持ったその声のせいで、木佐は一瞬、言葉の内容を理解できないでいた。

が、理解した後に、沙龍が言っていたのはこれか、とも思い当たった。

九雷の場合、言葉よりもまず『音』が先に来る——というのだ。

だから、数秒後に、その内容がひどくそぐわないものであることに気付く。

「なぜです……？」

いきなりそこまで飛躍するのが、木佐には理解できない。

景春が九雷に対して殺意を抱いているとはとても思えないのだ。

だから、いまのは九雷の戯言か、多少オーバーに言っただけだろう、と思った。

「……」

九雷は、自分の手の甲をじっと見ていた。

普段、手袋をしているので、そこは日に焼けていない、少し病的とも言える色をしている。

その甲に、微かに、何筋かの赤い線が浮かんでいた。

「これのせいだ」

その右手の甲を木佐に見せた。

暖炉の火に照らされ、うつすらと見える赤い文字のようなものは、焼印や刺青ではない。

特殊な血を持つ者にだけ現れる印で、木佐はこれと似たようなものを、沙龍の額に見たことがある。

しかし、沙龍の場合は常時そこにあるわけではない。

自身の『氣』を最高値まで高めたときに、顕れるものだ。

「……なんの印なんです？」

四方将神としての証か、とも思ったが、それは自分にも、白帝君や赤帝君にもないものだ。

「さっき言った盤帝は、玉帝の大伯父（祖父の兄）に当たる人物だが……、それが俺の父親さ。会ったことはないが」

木佐はそうと知られない程度に、嚙下した。

九雷の出生の話は、なにかタブーがつきまとうらしい、という噂だけは聞いたことがある。

それを、いま、本人が話そうとしているのだ。軽く聞き流すわけにはいかな

い。

「つまり、皇家の血筋の証——ってことですね」

「そうだ。いまの治世にはあつてはいけないものだ」

「なぜ、あつてはいけないんです……？」

親王や内親王は他にもたくさん居る。

九雷だけ忌避される理由が、木佐には分からない。

問題は、『血』にあった。

「盤帝から、その甥である敏帝への譲位は、ほとんどクーデターだった。しかし、この在位は長続きせず、血で血を洗う交代劇が続くんだが、そのロクでもない権力争いを圧倒的な采配と力で治めたのが玉帝さ」

始祖の天地開闢からまだそれほど長い年月も経っていない頃である。人界では、まだ夏王朝が起こるかどうかという時代の話だ。

以後、天界においては玉帝の治世が長く続くわけだが、その間も、九雷は自身の血を世間に公表することはなかった。

継承権の問題がややこしくなるからである。

それは、若き日に、家庭教師の庖犧ほうぎにも諭された。

玉座に座る気がないなら、秘匿せよ、と。

実際、九雷は玉座に興味などなかった。

しかし、盤帝のシンパたちや、九雷の能力の高さを惜しむ者たちはそれを許さなかつた。

せめてナンバー2の地位に居てくれれば、かろうじて血の面子が保てるし、そこから玉座も狙える——と彼らは考え、幼い九雷を士官学校に放り込んだのである。

「玉帝は内外の評は別にして、優れた為政者だった。しかし、盤帝の直系ではないという一点が、火雲宮に棲み付く古参の狐狸にとっては気に入らなかったんだろう。最終的には、彼らも玉帝の政治力を認めざるを得ない状況に追い込まれたが——。それでも、まだ、この血を惜しむ輩も居るのさ」

「……」

つまり、未だに、事と次第によっては九雷が継承権を得ることもできる——と  
いうことである。



勿論、そうなれば波乱も予想されるだろう。

「盤帝は、俺に言わせれば、女にだらしがなく、甥に背中から斬られた間抜けな男だが、この血というのが、火雲宮では面白いように力があつてな……」

皮肉めいた嘲笑を見せるので、木佐は黙った。

自分も両親とは縁が薄かった方だが、顔も知らぬ父親にこうもはっきり憎悪の感情を持てるものなのか、とも思う。

沙龍も同じく、両親の顔を知らないようだが、かなりドライな対応をしている。

しかし、九雷には、父親を嫌う明確な理由があるようだ。

「盤帝は名前から分かるように、始祖の一人、盤古真人ばんこしんじんの血筋で、曾孫に当たる。始祖の中でも、この盤古真人というのが特に五行の力が強かったらしく、初代の大王となって、盤帝の代まではずっと直系がその血を守ってきた」

静かに歴史を語る九雷の脳裏には、常に、牢獄のようなあの四角い部屋がある。

分厚い石の壁で四方を覆われたその部屋には、正気を失った母親が一日中座つ

ているという記憶だけがあった。

「しかし、この血は、景春や巽凛公主にとつては、忌むべきものでしかない。

『斉』を滅ぼしたのは、間違はなく盤帝だ。その子孫を殺したいと思つても不思議はないだろう？」

「そんな……、馬鹿な」

呻くように、木佐が反論した。

分からない話ではないが、現代日本に生きていた木佐にとつて、親の罪は親の罪である。

それを子が負う必要もないし、連座の考え方は馬鹿げている、と思う。

「恨み辛みは個人に向けられるものであつて、『血』じゃないはずです」

「緑麗もよくそう言っていた。いま思えば、あいつの考え方は、かなり現代的だつたんだな」

九雷は、今度は素直な微笑みを見せた。

あまり、他人には見せない顔である。

「しかしな、真武君。考えてみる。殺しても足りないほど恨んでるような男の、

その子孫に対して、なんの偏見もなく接することができると思うか？ 理屈では、確かにお前の言う通りだろう。しかし、感情はいつも理屈とは全く関係のない場所で作用する」

「……」

それも一理ある、と木佐は思う。

自分の言ったことは綺麗事かもしれない。

「昔、帝都の繁華街で梯子をしていた頃、景春の目にあんな昏い鋭さはなかった。人界に降りて、仕えた国を失い、それが一方的な天界の歴史介入のせいだと気付いたときに、なにを思ったのかは俺には分からない。しかし、あいつの俺を見る目は明らかに変わった。恐らく、景春は、俺が盤帝の血を引いてることを知っている」

『斉』を滅ぼした国はその後、歴史の覇者となったが、天界が玉帝の治世になると、その影響を受けて、別の支配者にとって代わられた。

景春は、その興亡を見てきたのである。

自分の護りたかった国を失い、その地に新たな国が興り、また滅んでいく様

を、時の番人のように長い間、自分の目で見てきたのである。

そこには艱難辛苦だけではなく、一時の平穩もあつたはずだが、『巽風』を見守り続けた一人の男の心境が、長い時の中で、達観や怨恨の入り混じつたものになつたであらうことは、木佐にも想像はできる。

「しかし……。やっぱり僕には、あの景春大将が……つてのはちよつと信じ難いですし、仮に、そうだとしても、貴方に『それ』を向けるのは間違つてる」

木佐は、九雷相手にこの綺麗事を主張し続けるのはどうかと思ひながらも、そこまで言つて、ひとつの可能性に気付いた。

(まさか……)

九雷を見ると、相変わらず伏目がちに手の甲を見ながら、口元だけで笑つてい

る。その笑みは、権謀術数に長けた者の自信の顕れというよりは、そういう方法でしか人の情を量れないという自分に対する冷笑だろう。

木佐が知る限り、九雷は景春の義侠を信じているはずだつた。

にも関わらず、その上で自分への殺意を煽っているに過ぎないのだ。

(なんて、また、屈折した……)

木佐はそう思うのだが、この九雷の心境は分からないでもなかった。

「馨は、知ってるんですか？ その——、貴方が色々、企んでることを」

「半分くらいは気付いてるんじゃないか？」

軽く言う九雷に、木佐は頭を抱えた。

手のかかる友人に対する仕草だ。

「前にも何度か言った気がしますが……、嫌味でなく、大した自信ですね。大体、東極山にあの二人を行かせたのだって、僕としては相当、危険な気がしてま

したが、あっさり許可しちゃって……」

「だから、お前に一緒に行ってくれるよう、頼んだんじゃないか」

「全くもう、知りませんよ……。ホントに……」

酒に飽きたのか、九雷が傍らの月琴をいじっていた。

曲にもなっていないような、単音を弾くだけの遊びである。

しかし、いつしか、その単音が旋律となつて、静かな鎮江楼の冷氣の中に溶け込んでいく。

(この人は、もしかしたら、詩歌管弦の世界に居る方が幸せなのかもしれないな……)

それは、昨夜だったか、九雷が手慰みに弾いていた古箏の音を聞いたときにも思った。

鎮江楼に置いてあったもので、木佐はそれを触ったことはなかったのだが、九雷は調子の外れていた弦を調整して、にわか名器にしてしまった。

「沙龍には言うな」と、念を押されたが、素人の耳では、なぜこの腕前を隠したがるのか、木佐には分からない。

月琴を置いて、九雷が席を立った。

そろそろ東の空が白んでくる時間だ。

九雷はこのまま、寝ずに鎮江楼を出る気らしい。

「お前も、水晶宮に来るか……？ 恐らく、あそこで全ての決着がつく」

九雷の言葉は『来てくれ』という意味だと木佐には分かった。

「行きますよ。王霊君じゃないですが、さすがに貴方の身が心配になってきましたからね」

嫌な予感はたくさんある。

『地獄の執行人』としての東方軍大將は、どう動くのだろうか。

平和主義者の東海龍王は、軍部と衝突したりしないのだろうか。

いま、決戦の地になるはずの水晶宮は、恐らく、色んな人の色んな思惑が渦巻いた牙城になっているはずだ。

北の地で戦力を大幅に削られた極東勢が、時を置かずして東の水晶宮に特攻をかけてくることは明らかだった。彼らに後はない。

「真武君に心配されるようになっては、俺も引退時だな」

九雷は笑って言っていた。

14 王霊君と碧媛

王霊君は負傷した身体に鞭打って戦場へ赴き、北の地をなんとか平定した。

陣頭指揮を取った九雷に賞賛を送るものは居ても、その王霊君の働きを褒め称える者は居ない。

本人もそれは当然だろうと思っていた。

緒戦で負傷した挙句、しばらくは使い物にならない状態でベッドに伏せていたのだから、これでやっと借りが返せた、と思っただくらいだ。

しかし、碧媛はさんざん怒った後で、

「この地と、ここに住む人々を守って下さったことには感謝します」  
そう言った。

怒ったのは、無茶をしたことに対してであって、仕事の結果は素直に認めると  
いうわけだ。

王霊君は、その姿勢に感動した。



一兵卒だった頃は、石を投げられることはあっても、民間人に礼を言われるようなことはなかった。

長い下積みが認められ、尉官になり佐官になったときも、軍人はどこに行っても歓迎はされなかった。

神魔世界における生存競争は、激しい。

人界が槍で戦争をしていた時代に、既に、派手な五行術や最新の科学力を駆使して殺し合いをしてきたのが天界軍である。

『神』に列せられることのない一般の市民にとってみれば、神魔同士の戦いなど、迷惑以外のなにものでもないのだ。

「私の仕事を増やされては、たまったものではないのだが……」

一般兵の三倍はあろうかという王霊君の胸板を、きつく縛るようにして包帯を巻きなおし、碧媛はまたぶつぶつ言い出す。

「も、申し訳ない」

鎮江楼の専属医のようになっていく碧媛は、沙龍以上に、負傷兵たちからは恐れられていた。

全快していないのに酒を飲むような不屈き者が居ようもんなら、容赦なく怒声と鉄拳が飛ぶ。

そこら辺の軍医よりもよっぽど現場慣れしているようで、これには、木佐や九雷も驚いていた。

しかし、王霊君は、自身も何度も怒られていながら、「負傷者に階級はない」と言い切る碧媛を好意的に見ていた。

だから、水晶宮へ行くことが決まると、碧媛との縁もこれまでか、と寂しく思った。

「全く、軍人はちっとも自分の身体を労わろうとしない。これでは終わる仕事も終わらないではないか」

「……どこかに行かれるご予定でも？」

「いや、急ぐ用があるわけでもないんだが、いつまでも仙籍を持つ私がここに居るわけにもいかないだろう」

「そうですか……。できれば、今回の戦争が終わるまで、お付き合い頂きたいのですが、それもいきまますまい」

その意外な言葉に、碧媛が「え？」という顔をする。

王霊君は慌てた。

「あ、いや、兵たちが随分お世話になっているので、寂しがるかと……、あ、いや、違いますな。軍医が不足しているもので、その……」

なぜか赤くなって弁解する。

こんな初心な大将も居るのか、と碧媛は微笑んだ。

「申し訳ない。余計なことを言ったようです」

「いや、医者としてであれ、なんであれ、自分が必要とされることは、素直に嬉

しい」

「……」

王霊君には、帝都に妻も妾も居るのだが、彼にとって仕事と家庭は全くの別物である。

女性を仕事に同伴させたことなどないし、たまに駐在先に妾を呼ぶような将官も居ないことはないが、王霊君自身はそれを苦々しく思っている。

だから、このような現場に女性が居るということが、そもそもなんとなく落ち

着かなかった。

要らぬ心配もしてしまおうし、こちらの余計な仕事も増える恐れがあるからだ。

しかし、いまのところ、碧媛の仕事は増えても、碧媛が居ることによって彼らの仕事が増えたことはない。

碧媛は、道士としての修行は修めた身である。

仙人になるにはまだしばらくの時間が掛かるだろうが、自分の身は守れるだけの力は持っていた。

「そういえば、碧媛殿は『アラタマ』という言葉をご存知か？」

話題に詰まったのか、王霊君が不意にそんなことを聞いた。

「『アラタマ』？ もしそれが私の知っている『荒魂』だとしたら、日本の神の霊魂のことだったと思うが……」

「やはり、ご存知でしたか。極東に居たことがおありと聞いて」

「居た、というより、行ったことがある、というだけだが、多少は知っていると思う」

「霊魂というと、つまり、魂魄のことですか」

どちらも同じ意味だが、大陸では『魂魄』の方がメジャーである。

碧媛は、以前、調べたことを思い出しながら説明した。

「日本の神の靈魂は、『荒魂』と『和魂』に分かれるという。『荒魂』とは、

荒ぶる魂のことで、天変地異を起こし、人心を荒廃させるもの。反対に、『和魂』は、自然の恵みを与えるという、加護の心を指すということだ」

「その両者が、ひとつの魂魄に同時に存在する、と？」

「二面性を現しているらしい。陰陽の考え方と似ているかもしれない。『荒魂』

は陰で、『和魂』は陽とも考えられる」

「フム……」

王霊君は、先の『北の本陣』襲撃時に、敵将建御名方が『アラタマ』と言う言葉が発した、と聞いた。

それは、奇しくも、彼が捕虜にした建御雷も言っていた言葉だった。

なにを意味する言葉なのか王霊君には分からなかったし、報告をした九雷にも心当たりはなさそうだったのだが、『二面性』という説明を聞いて、ひとつの可能性を思いついた。

「彼らは『神』でなく『人』でもないという……。本来の神の霊魂を成す『アラタマ』を持っていないから、それを探している、ということか……？」

「しかし、文字通りなら『荒魂』なしの状態で他国に攻め入ることなどできまい……？」 『荒魂』がないのだとすれば、戦闘意欲もないはずだ」

「ふむ……。では、比喻なのかもしれませんな……」

王霊君は、もうひとつ、重要な話を思い出した。

「景春の話では、建御名方は緑麗様のことを『アラタマを持つ者』と言ったそうです。そして、建御雷神は自分のことを『持たざる者』と言った。緑麗様と自分の違いといえば、男女か、公人私人か……」

「沙龍が？ 『アラタマを持つ者』？ なら、一番考えられるのは、『神獣の保持者』か否か、ということではないのか？」

「……!？」

まさに、目から鱗が落ちたような面持ちで、王霊君はガバツと立ち上がった。

「ど、どうされた……？」

「そうだ、奴らの狙いは『五行行使者』だ！ なぜそんな簡単なことに気付かな

かった！」

「なんだ？ そんな重大事なのか？」

「重大事もなにも！ 敵の狙いは緑麗様ですぞ!? 心配ではないんですか!？」

「ま、待て。少し、落ち着け、王霊君——」

気色ばんだ王霊君を宥めるように、碧媛はその太い腕を押さえた。

途端に、王霊君が固まって、顔と言わず、全身がプシューッと音を立てて赤くなる。

「あ、あの……っ」

面白いな、と碧媛は不謹慎にも思った。妻子持ちでこういう反応をするのは、よっぽど真面目な男だと思える。

「まあ、あれは、小さい頃からサバイバル術だけを仕込まれて育った人間だ。心配するな。それよりも、王霊君」

「は、はっ……?」

「私は貴方の方が心配だ。無茶をしそうでな。私でいいなら、医者として水晶宮までお供しよう」

碧媛は、にっこりと笑って言ったのだが、その一瞬後に奇妙に目を細めた。

医者としての知識か、道士としての勘か、王霊君の背後になにか不吉なものを  
見た気がしたのだ。

(……？　なんだ？　死相に似ているが、少し違う——)

碧媛は、しかし、そういった様子は見せず、王霊君の肩を軽く叩くと「治療は  
終わりだ」と告げた。



東海を臨む水晶宮には、いままで天界領土に散らばっていた兵力が続々と集まってきた。

既に、九雷は到着している。

三人の大將たちはまだ到着していないが、それぞれの先行部隊はもう半数以上が集結しているようだった。

水晶宮の建物に収容しきれず、周囲にテントを張っている各部隊の様子は、沙龍の居る展望台からでも見渡せる。

以前、景春の小部隊に同行したときは気付かなかったが、あのテントは色で所属部隊が分かるようになっていたのだ。

いま、沙龍の目に見えるのは、黒と白のテントだった。南方軍の赤いテントはまだ少ししか見えない。

「壮観だなあ……」

展望台の手すりに体を預け、眼下を眺める沙龍は、いつもの身軽な旅装だった。

巽凜が裾の長すぎる豪華な衣装を出してきて、着替えを勧めたのだが、丁重に断ったのだ。

しかし、絹製の黄色い帯だけは拝借した。

ラッキー・カラーやシンボル・カラーというわけではない。その黄色が遠くからでも目立つのを計算してのことだ。

首には、奏欽から事ある毎に渡されるリボンも巻いているし、いつだったか、北方軍の士官から渡された『鎚石』もつけている。

「この数に喧嘩売ろうってんだから、単なる馬鹿か、起死回生の策があるか、どっちかだよな」

展望台には沙龍以外に誰も居ない。ただの独り言である。

沙龍はいま、自分の中で二つの賭けをしていた。

ひとつは、巽凜がどう動くかということだ。

九玄が自分を信頼して渡してくれたあの鏡石を、まだ会って日も浅い巽凜に託

すことに躊躇がなかったといえは嘘になる。

しかし、沙龍は自分の直感を信じて、その賭けをした。

結果として、その賭けには勝った、と言える。

しかし、もうひとつの賭けは、まだ結果が見えなかった。

「キューウ」

聞き慣れた鳴き声と共に、緑色の物体が頭上に舞い降りてきた。

「早かったな、小龍」

「ウキュ！」

いつものように、小龍は沙龍の差し出した腕の上に着地して、咽を鳴らした。

「……よしよし」

小龍が運んできた書簡に目を通しながら沙龍は一人、頷いた。

これで状況は整ったことになる。

最上階の展望台には、柱はあるが屋根はない。

ここから全てが見渡せる代わりに、周囲三百六十度から見られる場所でもあった。

群青色に輝く東海も、修復されたばかりの五行砲も、水晶宮の玄関先に行き交う東方軍の黒い軍服たちも、ここから全て視認できる。

「…………お？」

東海側を見れば、磯になっている狭い場所で、敖閏と巽凜が釣りをしていた。全ての準備が整って、後は敵を迎え討つばかりなので、他にやることはないといえはないのだが、大した神経だと沙龍は思った。

（誰も、争いなんか望んでない…………か）

いまの龍王たちは皆、その点では一致している。

軍部の連中だって、本音は皆、殺し合いなどせずにのんびりしたいはずだ。

ただ、戦場でしか生きられないようなタイプもやはり居る。闘うことしかできぬ者、命のやり取りの中でしか生を実感できない者——。

本当は、自分もそうなのかもしれない、と思うことが沙龍にはある。

平穏に暮らしたいというのも本音ではあるが、心のどこかでは、いつも、アドレナリンが沸騰するような、あの緊張感を求めている気がするのだ。

「…………キユ？」

小龍が小さな体を固くし、丸い目が虚ろになった。

誰かの意識を捕らえたようだ。

「緑麗、おるのか？」

少ししわがれているものの、どこか花のある男性の声である。

「太上老君……、また、いいタイミングで」

名のある神々は皆、千里眼を持っているのか、単に地獄耳なのか、要所要所で為になるアドバイスをくれたり、余計な首を突っ込んでくる。

沙龍が今回、帝都に居る汎々に頼んで、秦帝直々の勅書を貰ったのは、太上老君にそうせよ、と言われたからであるが、それを受け取った途端の出来事である。

見ていたとしか思えないが、実際には、単にタイミングの問題かもしれない。

「そうか、すんなり出したか……」

太上老君は、そのことに驚いている様子だった。

なぜ、太上老君が「まずは勅書を得よ」と言ったのかといえ、いくら『神獣の保持者』で『四大保障』があるとはいえ、一民間人の沙龍が国家の戦争に介入

するには、それなりの理由がなければならなかった。

その『それなりの理由』に、秦帝は納得をしたのだろう。

「原文はまだ汎々が持っています。小龍が持ってきたのはコピーなので」

「それでもいいわい。なら、あとは好きにやれ」

「イエツサ」

沙龍は見えない太上老君に軽く敬礼した。

「東方軍大将の件は、全てあの少年帝にしてやられたって感じですが」

「あんな若造でも、この我侷な神ばかりの世界を統べる術を叩き込まれて育ったんじゃ。あらゆる手くらい打つとるわい」

「そうですね。我ながら、自分の未熟さを思い知りましたよ」

「フ……、精進せい」

珍しく、沙龍が謙虚な姿勢を見せている。

それは話す相手が最高神だから、というのものもあるが、秦帝も、太上老君も、そして九雷も、やはり一筋縄ではいかない。

それが、沙龍にとっては何ぞかわくわくするほど、嬉しいのである。

いままでは、——少なくとも上海に居た頃は——自分が決裁をする立場だった。

しかし、その重荷を降ろしたいま、沙龍は心地よい自由を感じている。

この状態に慣れていいのだろうか、と思うときもある。しかし、この身軽さは、春の陽だまりの中、花に囲まれて昼寝をするくらいの気持ちよさだと思うのだ。

東方天界の住人になって一年、ようやく、周囲に居るのは人間ではないという事実を、実感し始めてきたのかもしれない。

「万が一、私が斬られるようなことになったら、後のことをお願いします」

「ウム……。そんな事態にはならんと願っておるが……。そのときは黄龍ぶっぱなしてもよいぞ。なに、被害はどうせ玄都までは及ばん」

太上老君の軽口に、沙龍は思わず笑った。

「いいんですか？ 水晶宮なくなっちゃっても」

「建物など、何度でも作りなおせるわい。だが、生まれてしまった者は、もう二度と同じものは作れん」

今度は、決して軽くはない口調だった。

「そうですね……」

「お主も気をつけよ」

「はい、充分気をつけます」

「……キユ？」

小龍の虚ろな瞳が、再び、力を取り戻して元に戻る。

沙龍は空を見上げた。

糸のように細い月が、昼間の空に見える。

（明日、か……）

敵も馬鹿ではない。

五行の力が万能ではないことを知っている。

東方天界の住民にとっては空気に等しい五行の力は、新月の晩、月光の差さな

い夜に無力化する一瞬があるのだ。

月の満ち欠けに関係があるという。

科学者でもある泰山府君にその話を聞いたときは、『女体の神秘と同じ



じや！』と誤魔化されたが、あながち間違っていないのかもしれない。

五行の力は、すなわち、元素の力でもある。

地球上の元素に、月がなんらかの影響を及ぼしているのだろう。

しかし、毎月一回の新月は、それほど問題にはならない。

無力化と言っても、せいぜい一、二分の話だし、状態としては、貯水槽から配給される水が一瞬だけ断水されるようなものである。

水道管に残っている水で充分やり過ごせる時間だ。

しかし、明日は普通の新月ではない。一時間ほどの皆既日食が予測されている。

当然、その間、水晶宮は完全に無防備となるのだ。

(敵は、最初から、この日に総攻撃をかけるって決めてたんだな……)

沙龍の眼下には、それすら読んでいたであろう、九雷の姿がある。

しばらく、その紺色の軍装を目で追っていた。

九雷の歩き方は、わりと緩やかである。将官独特のきびきびした動きや、ス  
ピード感はない。

とてもあの神速剣技をするような人物には見えないのだが、だからこそ威力があるのかもしれない、とも思った。

沙龍の視線に気付いたのか、九雷が足を止め、顔を上げた。

(……)

しばらく、無言の会話をしているように、二人は動かない。

沙龍は敢えて無表情を作っている。

それを見透かすように、九雷は仄かに微笑んでいたが、重なる視線には妙な緊張感があった。

喧嘩をしているわけではない。

久しぶりに会った一昨日の夜は、朝まで寝かせてもらえなかったし、互いに、気まずくなるような言葉を発したわけでもない。

しかし、お互い、言いたいことは理解しているつもりだった。

清林山に居ろと言ったのに、危険を承知でやって来た沙龍を、九雷は当然、本音では歓迎していない。

どこか安全な場所に居て欲しいと思っているはずだ。

しかし、そう思っているながら、自分なら護り切れるといふ自信に任せて、傍に置いておこうともする。

それは、今回に限っては、景春を煽るための手段のひとつだったのかもしれない、と沙龍は思っていた。

美女には動じない景春を、少し変り種なら動じるかもしれないと踏んだからこそ、東極山行きを許可したのでだろう、と。

(酷い話だよね……。部下に自分の女を焚きつけようってんだから)

沙龍が九雷に言いたいのは、その一事である。

しかし、実際には本当に怒っているわけではない。

『俺以外の男に惹かれるはずがない』という九雷の傲慢さが癪に障る、というだけの話だ。

(まあ、事実なんだから、仕方ないんだけどー……)

視線を九雷から逸らして、騒がしい正門方面を見ると、大きな人影がある。いましがた水晶宮に到着した王霊君だった。

北方軍の士官や兵たちが、わらわらとその大男の下へ寄ってくる。

中には、北方軍以外の者たちも居た。

その団体から少し離れた場所に、沙龍のよく知っている顔がある。紺色の堅苦しい軍装たちの中で、白衣の碧媛は目立っていた。

（なんで碧姐々が……？ ああ、王霊君が連れてきたのか……）

鎮江楼での碧媛は、随分、重宝されていたようだから、王霊君が気に入ってそのまま連れてきたのかもしれない。

男には色々な意味で手厳しい碧媛を知っている沙龍は、少々、王霊君の行く末を心配したが、所詮人事である。

明日は文字通り、生きるか死ぬかの決戦になるのだ。

余計なことを詮索している場合ではない。

（同じ人は作れない……か）

太上老君が言った言葉をなんとなく思い出しながら、沙龍は、今度は、王霊君を出迎えに来た景春の姿を目で追っていた。

「……。あの人は、どう動くと思う？ 小龍」

聞いても詮無いのだが、肩口の小龍は沙龍の視線の先を理解して、少し寂しそ

うに鳴いた。

それが、『あの人はいい人だよ？』と聞こえたので、沙龍は頷いた。

「それは、分かってんだけどね……」

糸のように細い月が、いまにも消えそうだった。

釣り糸を垂らした敖閏は、半分以上諦めた顔でさつきから愚痴を零している。

「緑麗チヤンは無謀だよ。どんだけ危険か、ホントに分かってんのかな……も

う

「……」

巽凜は、普通の女の子なら気味悪がって触らないであろう太いミミズを掴みながらも、嘆息するだけだった。

なんと答えていいか分からないし、そもそも、答えていいのかどうかも分からない。

『水晶宮に五行行使者あり』——その情報を流したのは、他ならぬ沙龍自身

だった。

極東勢に自分を狙わせようという魂胆である。

九雷が事前に聞いたなら監禁してまで止めさせただろうが、時既に遅かった。

新月は待ってくれないし、情報は流れてしまった。

だから、後はもう、死守するしかないのだ。

沙龍のその不可解な行動は、表向きは、『天帝を守る英雄的な行為』に見えるかもしれない。

敢えて自分一人が標的になることで、天界軍部を助けよう、という風にも見える。

事実、王霊君などはそう思った。

しかし、それは全くの見当違いである。

「水晶宮のことに關して僕は口出ししないって約束だけどき。なんで『君たち』はそんな無茶なんだろうね、全く——」

「……すみません」

闘う術のない巽凜は、こういうとき、恐縮するしかない。

だから、笑顔でも見せるしかない。

「でも、きっと大丈夫ですから」

ここから、嫌でも目に入る五行砲の砲門は、既に綺麗に磨かれて海側を向いている。

“敵陣営に、五行砲に匹敵する装置がある”

敖丁が九玄に語ったその驚くべき情報は、既に一般の将兵たちにも出回っていた。

しかし、彼らに動揺はなかった。

ここに準備万端の、無敵の五行砲がある限り、極東側もその大量破壊兵器を使えないはずだからである。

同じだけの武力を背後に、後は白兵戦で勝敗を決するだけだ。

異凜が自ら砲塔に登って、沙龍から渡された鏡石をあるべき場所に嵌め込んだのを、景春も確認したし、その後の調整段階でも特に問題は見つかっていない。

敖閏はそれを複雑な思いで見っていたのだが、今朝になって、巽凜と沙龍の無謀とも思える計画を知らされると、有に三十秒くらいは言葉を失った。

沙龍は沙龍で、一人、敵を迎え討つつもりらしいし、巽凜はあくまでも非暴力を貫く気らしい。

「緑麗様が、自分が釣り餌になる、と仰ったんです。お止めしたんですが、自分には切り札があるから、大丈夫だ、と……」

「切り札か……。確かに、黄龍は切り札だろうけど、そう、いつもいつも、簡単に召喚できるようなものでもない。神獣を召喚している間は完全に当人は無防備だし、その隙を突かれて不意打ちでもされれば、いくら緑麗ちゃんとはいえ終わりだ」

「自信——なんででしょうか。広哥々も、よく言っていました。問題は腕や洞察力じゃない。信念だ、と——」

「敖広の言いそうなセリフだ。……そういえば、緑麗ちゃんは敖広と気が合ってたね。なんでだろう。全く合いそうにないのに」

「フフツ……。そうですね。表現の仕方は全然違うんですけど。思考パターンが



とても似てるんじゃないでしょうかね」

「我が身を顧みず、好きなように行動するって所か……。まあ、僕に言わせれば、それは君も同じだよ、巽凛ちゃん」

敖閏が引き上げた釣竿にはなにもかかっていたいなかった。

何度やっても、魚は釣れない。

諦めて釣竿を置いた。

「でもね、君たちは、残された者の後々の憂いってものを、少しは考えるべきだと思うよ。まあ、考えてたら、思うように行動もできないんだろぅけどね」

「ええ……。誰かにも、昔、同じようなことを言われました」

巽凛の脳裏に、あの厳しい瞳をした景春が浮かんだ。

『貴女は、それでいいかもしれない。そうやって、誇りを持って死ぬのが貴女の本望なら、残された者はどうすればいい？』

それは自分にはどうしようもできない、と思ったことも、覚えている。

しかし、景春がそのとぎのことにわだかまりを持っていままでを生きてきたなら、いまこそ、答えを提示しなければならぬだろう。

言葉ではなく、態度で。

自分が犠牲になる以外の方法で――。

最初は、海寄りの森林地帯の一角の爆発から始まった。

西と南の大將がまだ到着していないという段階で、先制攻撃を仕掛けた極東側は、戦略としては正解である。

そこかしこにランクAの亡者が現れ、敵味方入り乱れてのゲリラ戦になってしまったのだ。

九雷は水晶宮の一室から、大將、副官、中隊長クラスまでに直接指示を出していたが、赤く塗りつぶされた勢力図を見て、決して優位には展開できないと覚悟した。

物量はこちららが勝るとはいえ、亡者は五行術のマイスター・クラスでなければ確実に倒せないのです、何度でも起き上がってくる。

一般の将兵の中に、マイスターは数えるほどしか居ない。足止めするのが精一杯だった。

「全力で持ちこたえろ。門前には近付けさせるなよ」

九雷の装着したヘッドセットのレシーバーには、四回線分の受信が同時にできるようになっていいる。

四方軍の大將の分である。

しかし、なぜか、その回線は先ほどから沈黙している。

陽輝と敖丁はまだ到着していないので圈内には居ないのだろうが、景春と王靈君からなにも報告が入らないのはおかしい、と思っていた。

「海岸線が手薄です！ 負傷者多数！」

「そちらには南方軍の第三部隊を合流させろ」

「しかし、それではいずれ突破されます！」

オペレーターが士官が悲鳴に近い声を上げるが、

「切り札はこちらにある。これくらいで動じるな！」

九雷が一喝すると、一瞬、パニックになりかけていた司令室にも静寂が戻ったが、その一瞬後には、また別のオペレーターから戦況不利の報告が入る。

（陽輝はなにをやってるんだ、全く……）

九雷は苛立ちを抑えながら、指示を飛ばす。

こんなゲリラ戦では一番活躍できそうなあの西方軍大将は、召集をかけた時点で水晶宮からは一番遠い場所に居たので、遅れるのも仕方がない。

敖丁は、崑崙の留置所に入っていたので、そのロスがある。

頼みの綱の景春と王霊君に期待をするしかないのだが、王霊君はいいとしても、景春には『監察府』という爆弾がある。

当てにするのは危険と言えた。

「……」

九雷は、一面のモニターに映し出された勢力図を見ていたが、水晶宮を示す青い印に、巽凜の同じ色の瞳を思い出していた。

『自分は非戦闘要員だから、皆さんの足手まといになるといけないので、大人しくしています』

そう言ったとき姿を見せないが、九雷は、なぜかそう言ったときの巽凜の瞳が気になった。

(アレは、確かに龍王家の目だな……)

強い意志の頭れとも言えるあの輝きは、先代龍王の敖光よりも、むしろ先代青龍の敖広を彷彿とさせる。

しかし、九雷にはもつと気になっていることがあった。

昨日からやけに口数の少なくなった沙龍が、いま、水晶宮の展望台でずっと戦況を見つめていることだった。

(沙龍は、なにをするつもりなんだ……?)

時間があれば上手く誘導尋問でもして、なにか隠しているらしいことを聞きだすつもりだったのだが、昨夜は結局時間はなかった。

『大丈夫。私は敵と闘わないし、元帥の傍に居たいだけだから』

沙龍はそう言っていたが、大人しく見物をするために水晶宮に残ったとは思えない。

あの緑青の瞳は、こういうときに限ってその本心を綺麗に隠してしまうのだ。

「閣下！ 林側の一角、北方軍の部隊が崩れました！」

九雷は、そのオペレーターの声に現実を引き戻された。

「王霊君はどうした!? ……いや、待て、景春はどこに居る!？」

全てを見渡せる展望台に一人、聖魔剣と大和守秀国を手にした沙龍が居る。

強い異風にさらされて靡くなび黄色い帯が、沙龍の計算通りに、遠くからでも確認できた。

こうして、全ての戦場から確認できる場所で、標的になっているのだ。

九雷に言ったように、『敵』と闘うつもりはない。しかし『味方の中の敵』と闘うことにはなるだろう、と沙龍は思っていた。

それは、景春かもしれない。

違っていて欲しいとは思ったが、九雷のいままでの態度や、公務員から密かにあつた連絡で、避けられない決着だとも思った。

その話を異凜にしたとき、

『景春大将が裏切り行為をするはずありません』

と、きっぱり言っていた。

「しかし、彼が『監察府』のメンバーで、元宰相とつるんでるのなら、狙いは間

違いなく私だ。元々、あの宰相は私と元帥に恨みを持って、敵に『五行行使者』を売れば、元帥は簡単に失脚させられる」

そう言って、沙龍は自分が囮になることを提案した。

（敵が誰であろうと、私を殺そうとする奴は全員斬る——）  
その覚悟だけはしていた。

一度、九雷相手に折ってしまったその覚悟を、二度、折るつもりなどない。

「……来たか」

視線を横に走らせた瞬間、影がフツと横切り、巨大な剣が陽光を遮るように目前に迫っていた。

「……ッ!？」

沙龍は、目を見開いた。

まさか、『彼』だとは思わなかった。

景春ではない。

景春は、こんな巨軀はしていない。

（王霊君……ッ!？）



逆光でその表情はよく見えなかったが、王霊君が斬りかかる大剣の質量は、自分の聖魔剣の鞘では受けきれない、と思った。

ザキインツ！

と、耳元で聞こえた大きな金属音に、目を瞑った。

しかし、自分が咄嗟に身体を護るようにして垂直に掲げた聖魔剣には、なんの衝撃もこなかった。

「……？」

目を開けると黒い軍服が見え、その一瞬後には、王霊君はその巨大な剣ごと吹っ飛ばされていた。

「……っ!？」

こんなとき、なす術もないというのは本当だ。

ただ、景春が王霊君を吹っ飛ばしたのだということだけはかろうじて分かった。

「下がってる、沙龍——！」

「景春さん……っ!？」

これは、どういうことだろう。

予想していた配役が全く逆で、沙龍は混乱した。

間違っても味方を裏切りそうにない実直な王霊君が、目標として崇めていた『緑麗』を斬りつけ、沙龍とは常に喧嘩腰であつた景春が、その沙龍を護つたのである。

柱に激突した王霊君は、あまりダメージはなかつたのか、ユラリと立ち上がった。

そして、再度、巨大な剣をふりかざした。

「邪魔をするな、東方軍大将！」

大男の王霊君から、想像のつかないような、細い男の声が聞こえた。

「……え？」

沙龍は、王霊君と何度も話したことがあるわけではないが、それが本来の王霊君の声でないことだけは分かる。

「やはり、取り憑かれていたか——！」

景春が吐き捨てる、王霊君は忌々しげに詰め寄ってくる。

「約束が違うぞ。ソイツさえ手に入れば、引き上げてやろうというのに」

「誰となんの約束をしたかは知らんが、俺の本当の仕事はこいつを護ることだ！」

沙龍は、呆然としながら、その二人の大將の闘いを見つめた。

(ど……、どういうこと……!?)

水晶宮は、東側の海をバックに、三方からの攻撃にさらされていた。

亡者たちは次々と現れてくる。それらを操っているのは中隊長以上の神々であり、彼らさえ屠れば操り人形たちは消えるのだが、乱戦の中でそれが出来る者は少ない。

「ひゃー、すげえ数だなー」

空から一望できるその戦場に、虎型の白帝君が人事のような感想を漏らした。その背に乗っているのは赤帝君である。

「北側が薄いな……、なにかあったのか……?」

「しかしよー、阿哥。心配し過ぎじゃねえ？　いくら阿姐が昔と違うからって、もつと信用してやれよ。旦那だつてついてんだし」

「緑麗様の腕の問題ではない。今回は事情が入り組んでいるのだ。それに——」  
なにか胸騒ぎがする、というのは口にはしなかった。

水晶宮の北側、劣勢な北方軍に加勢すべく、雑木林の付近で亡者を相手にしていた木佐は、

「ん？　白帝君か——」

空を横切った軌跡を見て呟いた。

しかし、余所見をしている暇はない。

既に、日食が起こり始めている。

五行が全く使えなくなる前に、少しでも多くの亡者を塵にしておかなくてはならない。

「うわー……。とても勝てそうにない気がしてきたな。途中でバックれるって

の、ありだと思うか？」

なぜか、公務員が隣で改造銃の装填をしている。

「全く……、君はいつ消えていつ現れたんだ。仕事じゃないんなら、帰ってもいいと思うが？」

帰れる場所があるなら、と木佐は思うのだが、いまはそんな嫌味を言ってる場合でもない。

「あ、そ……。じゃ、そうさせてもらおっかな」

退路を確認するように公務員が辺りを見回すが、黒々とした獣のような亡者たちが三百六十度、道を塞いでおり、とても逃げられそうにない。

しかし、やはり海側はその数も少なかった。

と言っても、海に逃げるわけにもいかない。

例え船があつたとしても、高速で泳げたとしても、この東海の先には東極山しかない。

「……っ？ な、なにやってんだ？ あのお姫様は——!？」

公務員が浜辺に視線を向けると、そこには、無防備な異凜の姿があつた。

こちらにも、鮮やかな淡黄の着物を着ているので、遠くからでもはっきりと目立つ。

浅瀬に半分脚を浸して、巽凜は中天を見上げていた。

真昼の月は、ほとんど見えなくなっている。

「光哥々、広哥々、力を貸して下さい。かつて貴方たちが護ったこの海を、この世界を、今度は私が護ります——」

なにも持たない両手を空に広げて、巽凜は目を閉じた。

すると、海の生氣そのものが、熱風となって巽凜の体を浸し始めた。

景春は、自身の大刀で王霊君の斬撃をまともに受けたが、力負けしそうになつて、片膝をついた。

(なんて力だ——！)

この巨軀に漲る物理力は半端じゃない。

なんとかその力を左に逃がして凌いだ。

しかし、すぐにまた、猛攻が来る。

沙龍は座り込んだまま、その二人の闘いを見つめていた。

「どうということ……!?!」

いま、王霊君の意識と身体を支配しているのが、建御雷という敵将であること  
を沙龍は知らない。

緒戦で王霊君に傷を負わせ、捕虜になっていた極東の神である。

そのタケミカヅチのことを、『様々な肉体を渡り歩くことのできる霊魂』——

と、月讀は九玄に説明した。

しかし、その情報が軍部に届く前に、建御雷は北の本陣で自害してしまったので、取り沙汰されなかったのだろう。

だが、経津主は『神に自刃は許されない』と言っていたはずだ。

なら、やはり『自害』はおかしい、と誰も気付かなかったのだろうか。いや、景春は気付いたのだ。

遺体の残っていないなかった建御雷が、まだ完全には死んでいないことに。

「なんで——」

「説明してる暇はない！」

「景春さんっ！」

「下がってろと言ったはずだぞ！」

景春が怒鳴る。

「……っ！」

加勢しようとした沙龍は、思わず立ち止まってしまった。

何度となく言われ、その度に無視してきた言葉である。



今回も、聞く義理はない。

ないのだが――。

沙龍は、聖魔劍の柄をグツと握り締めて、それを背中に収めた。

しかし、

「何度も言わせんな……。私を護っていいのは、この世でただ一人しか居ないんだよ……！」

どこまでも、頑なな意地である。

右手にした大和守秀国を抜き去ると、沙龍は巨漢の王霊君に向かって行った。

水晶宮の西南方面が、俄かに活気を見せていた。

「はいはい、お待ちどろ！ 敖丁大将、到着しましたよ〜」

インカムから司令部の周波数に連絡を入れた敖丁は、その口調とは裏腹に、一瞬でランクAたちを焼き払っていた。

奏欽に勝るとも劣らないその『火行』の術は、周囲数メートルを巻き込んで、

辺りの温度を跳ね上げる。

勿論、味方が居ないことは確認したが、居たとしても敖丁はそれほど気にしなかっただろう。

まだ五行の力が使えるということは、見えない月は中天に達していない、ということだ。

『遅いぞ、減俸は覚悟しておけ』

レシーバーから聞こえる九雷の口調には安堵も入っていたが、敖丁はいつものように嫌味半分に返した。

「業務上の移動距離は他の大将たちの三倍はあると思うんですけどね。とりあえず、ざっと見た所、北と東が動揺してるようですが？」

「ああ。『想定内』が起きたらしい。南方軍の部隊を分けて、援護に当たってくれ」

「了解。……南方軍全軍に大将からのお願い。第一から第五までは、西回りで北方軍を援護！ 残りは、暫時、周辺索敵と東方軍の援護を！ 南方面は放って置いてもいいよ。あらかた、赤帝君が焼き払ってくれたようだ」

水晶宮の南側に立ち昇る業火を見ながら自軍に指示を出し、自分はどの部隊について行こうか、と考えた。

「ま、あそこか、やっぱ」

敖丁の見上げる先は、柱が二、三本折れた水晶宮の展望台である。

驚異的な視力で、あそこでなにが起こっているのか、敖丁には大体分かったのだ。

水晶宮の展望台では、一番地味ながら、迫力のある戦闘が行われている。ここには、爆炎も吹雪もない。ただの、力のぶつかり合いがあるだけだ。大理石の床にはところどころ亀裂が入っているし、柱も数本折れていた。

「……どけよッ！ でかいの！」

沙龍が、体感的には自分の十倍くらいある王霊君の一撃を受け止めることができるのは、集中力と精神力の賜物というしかない。

異常な光を宿した王霊君の目は、もはや、野獣の如く獲物を狩ろうとしている

た。

「沙龍！俺は下がれと言ったんだ！参戦しろなんて言っていないぞ！」

景春が喚きながらしぶしぶ助太刀をするのだが、協力して闘っているというより、お互い好き勝手にやっているといった感じだ。

「たまには俺の言うことを聞け！」

「……うるさい！」

沙龍は怒りにも似た感情で、一喝した。が、それは景春に対して言ったわけではない。自分の頭の中に言ったのだ。

「……っ!？」

沙龍の一振りが、まだ健在の柱を数本、斜めに斬った。

景春も王霊君もその行動の意味が分からなかったが、二人は同時に気付いた。

柱ごと、その瓦礫全てを王霊君の頭上に落とすのだ。

これでは、さすがに無傷というわけにもいかないだろう。

「……」

「……」

いままでに一番大きな音がした後、すぐに静寂となった。

景春は、しかめ面のまま口を開こうとしないので、沙龍が聞いた。

「『本当の仕事』ってなんだ。秦帝になにか言われたのか」

「違う」

「……」

「いや、陛下に『緑麗を極東側に断じて渡すな』と言われたのは本当だ。しかし、違う」

「……」

同じようにしかめ面をしたまま、沙龍は動かない。

動けないのかもしれない。

そのとき、瓦礫の山がわずかに動いて、沙龍も景春も再び、身構えた。

「……将神緑麗。無敗の将か。さすがに強いな」

王霊君の口を借りたタケミカツチが不敵に笑いながら、その瓦礫を押しつけて姿を現す。

案の定、多少の擦り傷くらいしか負っていない。

「無敗じゃないし、いまの私は将神じゃない」

もう何度このセリフを言っただろう。

いい加減、堪忍袋の緒を切ってもいい頃だ。

「誰だか知らんが、王霊君に取り憑いてまでして、なにがしたい。なぜ、いつもいつも、放っておいてくれないんだ。金品も権力も要らないって言うてんのに、ちよっかい出してくる馬鹿が居る。こっちはメロメロの恋人と平穩に過ごしたいだけなのに、毎度毎度、喧嘩をふっかけてくる奴が居る。……いい加減、うざいんだよっ！」

それは、王霊君に言っているのでも、タケミカヅチに言っているのでもない。いままでの天界での出来事、いや、いままでの沙龍の人生における憤懣そのものなのだろう。そして、最後の一言は景春に向けられているはずだ。

「『アラタマ』さえ手に入ればいいのだ。そうすれば——」

「荒いタマならもう持つてるだろう。私はそんなもん、持ってないぞ」

「沙龍……」

景春が頭を抱えたが、王霊君は動じなかった。

「『荒魂』とは、本来、我々が持っていたはずの霊魂の片割れ。長年の世代交代と共に、失われていったものだ」

「自分たちで失くした物を、なぜ、異国に求める」

「それは、甲斐家に聞け！」

「……!?!」

いきなり斬りかかってきた王霊君の大刀は、今度こそ、景春によって完全に防がれた。

「邪魔をするな、東方軍大将！ お前とて、天界軍に義理はないだろう！」

「義理はどこにもないがな……」

景春の険しい瞳。

（『甲斐家』ってどういうこと……!?!）

沙龍はそれを聞きたかったが、再び始まった景春と王霊君の猛攻に、無意識に一步下がった。

そして、改めて辺りを見渡すと、視界が暗くなっていることによろやく気付いた。

(やばい……！ 日食がもうだいぶ進んでる!?)

そのとき、巨大な剣を天に突き刺した王霊君が、暗雲を喚んだ。途端に空が黒一色に埋め尽くされた。

「な、なに——っ!？」

「我が名は建御雷。日の本にありき、雷神也！」  
天を走る雷鳴。

一条の閃光が、王霊君の掲げた剣に走って落ちた。

いや、宿ったのだ。雷の力が。

「元帥と同じ力……？」

力の優劣は分からないが、これは明らかに九雷と同質の力である。

東方天界においては『雷法』と呼ばれる、雷鳴を自在に操る力である。もはや物理力だけで排除できるレベルではない。

「沙龍、三度目だぞ。今度は聞いてもらう。下がってる」  
景春が窪んだ瞳の奥から、静かに言った。

「……」



沙龍は後退して、初めて景春に戦場を譲るといふ行動をした。  
譲る——否、自分の命を預けたのだ。

純粹に劍の腕では『四方軍一』という評判通り、景春に分があるだろう。

しかし、良くも悪くも景春の劍技は、一撃必殺の瞬間技である。持久戦になれば、景春が不利なのは明らかだった。

しかも、景春には『王靈君を殺さずに倒さなくてはならない』という制約がある。

沙龍は、激しく撃ち合う二人を眺めながら、王靈君を正気に戻す方法はないものかと考えた。

といっても、具体的な方法が思いつくわけでもない。

(どうすりゃいいんだ……、このままじゃ……)

王靈君の身体を乗っ取ったタケミカヅチは、二人分の力を自在に使えるようだ。

迸る電撃を加えた王靈君の劍は、破壊力と殺傷力を格段に増して、景春を苦し

めている。

柱に激突した景春が、まだ眼光が死んでいないことにホツとしながらも、沙龍は『護られること』はなんて辛いんだろう、と思った。

まだ自分が闘っていた方が楽だ。

(ああ、そうか……)

ふと、巽凜の微笑みを思い出した。

なぜかは分からない。

ただ、こんな闘いの場の、一番正反対にあるのが、あの微笑みなのだろう、と  
いうのは分かる。

きつと、巽凜も辛いのだ。

だから、彼女はあんなに華やかに朗らかに笑うのだろう――。

「……っ」

景春が吹き飛ばされる度に沙龍は目を瞑りたくなつた。

既に、擦り切れた軍服のあちこちから血が滲んでいる。

あの電撃付きの剣を食らって、身体のダメージがどれほどかは分からないが、

一撃の余波で大理石の床が抉れるくらいだから、相当だ。

しかし、沙龍の心配を余所に、景春は笑っていた。

「フ……」

久しぶり手こずる相手に出逢って、嬉しいのかもしれない。

「そんなもんか。所詮、肉体を借りなきやなにもできない半端な靈魂だ。俺の敵じゃない」

「……」

「罪の意識は持たんど、王靈君。お前も一軍の将として『そいつ』を取り込んだ責がある」

ユラリと立ち上がった景春の体が、微かに発光している。明るい緑色を帯びた、『木行』のマイスターのみが持てる『氣』である。

太陽の光が閉ざされた皆既日食の中、それは王靈君にとって、いや、タケミカヅチにとっては、有り得ないものだ。

「な、なぜだ——？ なぜ、五行が使える——？」

フン、と口の端を上げる景春は、ここからが本当の勝負だと思っているはず

だ。

五行の力というのは、マイスターたちにとっては運動能力すらも高めるエネルギーとなる。

普通の非力な人間——しかもかなり華奢な女性——である沙龍が、握力百二十を誇るのも、黄龍の『土行』のせいである。

「なぜだ!? この皆既日食においては、五行は無効化されるはず……!」  
タケミカツチは、まだそのカラクリに気付いていない。

景春はわざわざ説明する気はなかったが、その答えは、意外にも別の人物からもたらされた。

「バカだね。なんのために僕たちが歩いて、天界領土を四分の一周したと思つてたのさ」

「……!?!」

綺麗な軍装の敖丁が、展望台の端に姿を見せていた。

「もしかして、気付いてなかったの? 王霊君。だから君は愚鈍だって言うんだ

よ」

嫌味なほどに紅いマントをヒラリと脱ぎ捨てる。細い剣を手にしていた。

「景春は水晶宮から鎮江楼へ、君は……、ああ、マイスターの副将に任せただっけ？ 北から西へ。そして、あの酔いどれイン●男は西から南へ、僕は南から水晶宮へ。なんのためにわざわざ徒歩の行軍をしたのか、もう一回、無い頭で考えてみるといいよ」

「……」

タケミカツチはそれを理解できようはずはない。

それは、この皆既日食において五行が無効化されるのを回避するための行動だ。

通常、五行世界において、東は木行、北は水行、西は金行、南は火行を司っている。

それぞれの四方軍大将たちも、必要最低限、任地の属性行は極めなくてはならない。

五行の気脈を正し、整然とした秩序を保つためである。

尤も、そういった仕事は本来、四方将神のものなのだが、軍部でも当然のよう

に求められる。

「えっと……、頭の悪い私にも分かるように、説明してくれ。そこのインテリお坊ちやま」

タケミカツチと同じくらい事態をよく分かっていない沙龍が、口を挟んだ。

敖丁は、「フン」と鼻をならしてから、傲然と沙龍を見下ろす。

「新月の日に、五行が無効化されるのは、あくまでも『普通の場合』さ。普通に、東に木行が流れ、西に金行が流れ……っていう場合だね」

「ああ、なるほど……。だから『普通』じゃなくすために、わざとその位置を左四十五度に回転して、一度、ずらしたってことか……」

「そういうこと。一時的な騙しのテクニクさ」

「って、お前が偉そうに言うなよ。それは元帥の指示だったんだろーが……」  
と、沙龍がボソツと言った所に、

「だーれが……、酔いどれイン●男だっ！ 訂正しろ！ 俺は八連荘でもオール・オツケーの現役バリバリだ、このカマ野郎がっ！」

どこからどうやって、ここまでその状態で到達できたのか、バイクの前輪で敖

丁を踏み潰したのは陽輝だった。

しかし、よく見れば、自慢のそのハーレーはところどころ塗装が剥げているし、陽輝自身も満身創痍といういでたちである。

「ちよつと……。大遅刻しておいて、なにその態度。五行砲の砲門前に吊るしてやってもいいんだよ？」

ノーダメージで立ち上がった敖丁も大したものだが、内輪もめの振りをして、しっかりと王霊君を囲む位置につけた陽輝も状況を理解しているようだった。

「……どっちにしろ、お前らは二人とも遅刻だ」

ポロボロの状態の景春は、腰を落として身構えたままである。

その牽制の前に、王霊君は動けない。

「さつさと終わらせるぞ。協力する気がないなら、下がってろ」

「なんで景春が仕切ってるのさ。こんな総身に知恵が回ってないような大男、僕一人で十分なんだけど。そもそも、敵が弱くなる日に仕掛けるっての、戦法としては正しいけど、あさはかだせこいよね。なにも手を打ってないとも思ってたんなら、そのバカさ加減を賞賛したいくらいだよ。大体さー……」



と、延々続くように思われた敖丁の毒舌は、陽輝の「あ、そうだ」という、間抜けな言葉にすっぱりと切られてしまった。

「沙龍、お前さー、ちよつと聞きたいことが……」

その陽輝の日常的な態度に、沙龍は呆れた。

「いや、少しは働きなさいよ……、あんたは……」

「こちら、赤帝朱雀星君」

赤帝君は、水晶宮の正門に続く石畳の上に倒れていた天界軍の士官から、インカムを拝借して司令部に呼びかけた。

「水晶宮の周囲一帯は、皆既日食の開始と共に『デッドゾーン』に入った。これより最低一時間は全ての五行が使えない。これ以上の戦闘は消耗戦になると思われるが、軍部になにか奇策はあるのか？」

「赤帝か——」

その声が、予想通り落ち着いていたので、赤帝君は内心憤慨した。

慌てた様子も見せない九雷が気に食わない。

「残念ながら『奇策』はないが……」

「九雷元帥、シークレットラインで頼む」

そう言ったのは、これから話すことが天界軍部にはオープンにされていない事項だからだ。目指す展望台に辿り着くのがどちらが先かは分からないが、とりあえず、それまでは言いたいことを全部言ってやる——と思った。

「貴方は四方将神である前に、天界軍元帥であることを選ぶのか！」

「それはいま論じるべき問題じゃないな」

「……!? いま、緑麗様が危機に面しているこのときに！」

「それを俺に問いたいのなら、軍部を取るのか、沙龍を取るのか、ってことだろう？」

九雷も、その声の調子から移動中であるのが分かる。

(あ、れ……?)

三人の大將たちが、タケミカツチを劣勢に追い込むのを見ながら、沙龍は自分の視界が一瞬グラツとしたのを感じた。

いやな感じがする——と思ったときにはもう遅く、その視点はかなり低くなつた。

「なんでよ……」

無意識に首に手を当て、そこに巻かれてあるリボンを確認したが、いまは「喋れるか喋れないか」を気にしている場合ではない。

『ペットボトルのキャップくらいしか持ち上げられない』と木佐に言わしめたこの小さな龍の姿になってしまつては、敵と遭遇すればひとたまりもない。

（早すぎる！ あと三時間は大丈夫なはずなのに!?!）

愕然とした。

沙龍の自信の源は、二十年間修業してきた、百四十五センチの体そのものにある。

この小さな龍の姿では、自信もへったくれもない。

（や、ヤヴァイ……ッ。マジでヤヴァイ!）

死闘を繰り広げている四人は気付いていないようなので、そそくさと瓦礫の影にでも逃げ込もうと思ったのだが、この小さな黄色はかなり目立つ。

完全に隠れてしまった太陽のせい、水晶宮一帯は夜のような暗さだが、『土行』の塊のようなミニ黄龍は闇夜の蛍のように鈍く光っていた。

「見つけましたよ、龍神様」

「……っ!？」

沙龍が見上げた先に、東極山で会った神が居た。

だらりと下げたその手には、笛がある。

「二度あることは、三度あるって本当ですね」

全体的に白い装束を纏った経津主の中性的な顔が、微笑みながら沙龍を見下ろしていた。

(やられる!)

聖魔剣の柄が瓦礫の上に転がっているのを確認したが、この姿で使えるはずもない。

ないのだが――。

他になにも思い浮かばないので、経津主が沙龍に向かって手を伸ばそうとした瞬間、脱兎のように体を翻し、聖魔剣に向かってダイブする感覚で飛びついた。

ほとんど期待していなかったのに、その柄は、沙龍の小さな手に納まった。

「やっぱりか。持ち主のサイズに合わせてくれるなんて、いい剣じゃないか！」  
起動した聖魔剣の刃はいつもの百分の一スケールだが、威力は同じはずだ、と沙龍は思った。

しかし、経津主の方は笑いさえ堪えている。

「一寸法師が針を武器にしようと、勝ち目はありませんよ」

「しかし、物語では一寸法師が勝つんだろ？」

「そう……。物語では、ね」

経津主の足は、わずかに宙に浮いている。

このマジックの正体はなんだ、と沙龍は思った。が、直感的にこれは五行術のような内側からの力ではなく、例えば飛龍の風火輪のような、外側の力ではないか、と思えた。

神は万能ではない。条件さえ揃えば十分勝機はある、と沙龍は思っている。

日本で屠ったスサノオの例もある。

彼らは、なんの根拠も理由もなく、人間より数倍頑丈な体を持っているわけではない。

五行術のような『特殊能力』だって、封じる術は幾つかあるはずだ。

だったら、それをひとつひとつ、潰していけばいい。

しかし、いま、それを十分考える時間はないし、普段の百四十五センチの体もなかった。

「ご心配なく。すぐに殺しはしませんよ。貴女を殺してしまつては元も子もありませんからね」

殺気を漲らせている沙龍に、経津主は穏やかに言った。

「嘘つけよ。五行砲撃たれたくないんだろ？ だったら、私を殺すしかないぞ」

「それもありますか……。アラタマが手に入らなければ、意味がありませんから」

「くだいようだが、私はそんなもの持っていないぞ」

「いえ……。何世代を経ようとも、貴女だけは『それ』を失わない。何度生まれ

変わっても、貴女だけはずっと『それ』を持ち続けている。羨ましい……いえ、妬ましいくらいの強さと共に、貴女だけは『闘争心』を忘れない——。なぜです？ 神獣をその身に抱えていることが、答えのひとつなのでしよう？」

「闘争心？ お前たちが言ってる『アラタマ』ってのは闘争心のことか？ そんなの、誰だって持つてるはずだろう」

「そうであれば、我々はこんな無益な闘いなど、望みませんよ！」

話は終わりだと言わんばかりに、経津主が手の中の笛を、鋭い刀剣に変える。

反りのない両刃の剣で、刀身自体はそれほど長くはないが、切れ味は相当よさそうだ。

こんな一寸法師の針で、あれに対抗できるだろうか。

どう見たって、絶望的で、絶体絶命だ。

沙龍は、迫り来る白刃を前に息を呑んだ。

ガキン……!!

と、沙龍の眼前を十字に遮ったものがあつた。

いまの沙龍にとっては巨大に見えるが、それは赤帝君の愛刀『紅蓮』と、九雷が使っている長剣だ。

その二人が経津主の一撃を防いでくれたのは分かるが、どうも彼ら自身も言い争っているらしい。

「赤帝。それを俺に問いたいのなら、軍部を取るのか、沙龍を取るのか、だ。そして、俺の答えはいつも決まってる」

「……っ!？」

「ならば、この事態をどう説明する！」

「……っ!？」

沙龍は、左右を交互に見上げながら、なぜいきなり現れた九雷と赤帝君が喧嘩



しているのか分からず、オロオロした。

「九雷元帥……、以前、私が言ったことを覚えておいでか？」

既に赤帝君の瞳は、燃えるほど紅く染まっている。

「さあ……？ なんの話だったか？」

煽るようにすつとぼける九雷は、いつもの嘲笑の笑みを浮かべていた。

「なぜ、緑麗様がこんな激戦区の真っ只中に居て、敵に襲われている!？」

「いや、あの、ちよつと待って、阿哥……？」

「俺が沙龍を戦場に連れ出しているわけじゃない」

「あの、ちよつと、元帥……」

「そうさせないようにするのが貴方の務めだろう、と言ってるのだ！」

沙龍がオロオロする中、経津主は阻まれた剣を引くに引けない。

展望台の中央では、暴れる王霊君の体を取り押さえようとしている三人の大將

も居るが、それはこちらではあまり関係がない。

いつから居たのか、沙龍の背後では、木佐と白帝君が顔を見合わせていた。

「おー。あれが、阿姐のミニミニ黄龍な姿かー」

「……って呑気に言ってる場合でもないんじゃないのか」

木佐の言う通りである。

しかし、そう言っておきながら、木佐自身も仲間割れのような喧嘩を止めるつもりはない。悠然と観戦しているだけだ。

「四方将神までもがお揃いか……。ここは引きたいところだが、そうもいくまい……」

経津主は後方の派手な鬨いをチラツと見てから両刃の剣を笛に戻し、それを横にして吹き始めた。

その音色に呼応するように、瓦礫の中から亡者が湧いてでてくる。

しかも、この禍々しさは東極山で見たランクSと同じだった。

「ちよつとー……。マズインじゃないの……。ランクSがぞろぞろ……」

沙龍が呟くも、頭上の喧嘩は止まらない。

「今後、緑麗様を危険な目に合わせるようなら、私も黙ってはいないと言ったはずだが？」

「ほう？　なら、どう黙っていないと言っただ？」

「その余裕の物言いを本当に黙らせて欲しいのか？」

「お前にそれが出来るのならやってみろ、赤帝」

赤帝君の全身から、燻った炎が噴き出す。

さすがにこれはまずいと思った沙龍は、ヒョオツと垂直上昇して二人の頭上高く舞い上がると、

「遊んでる場合か！ 状況を見ろ——っ！」

疾風怒濤の短足キックを二発決めた。

「りよ、緑麗様！ すみません！」

途端に恐縮する赤帝君。

「元帥も！ なにしに來たのよ、貴方たちは！」

沙龍が怒鳴るも、九雷の方は半分逆ギレ気味だった。

「勿論、お前を護るためだ。なぜこんな無謀なことをしたのかは、後でじっくり聞かせてもらうぞ、沙龍」

「あゝ、それは、まあ、お互い様ってことで……」

沙龍は、ようやく戦況を冷静に観察できる余裕を取り戻した。

いま、この展望台には四方将神と、四方軍大将が揃っている。

皆既日食によって『五行』が封じられることもない。

ランクSの十や二十くらい、なんとかなるはず――。

しかし、

「なんだありや……!?」

白帝君の声に海側を窺うと、蜃気楼のような黒っぽい靄がかなり広範囲に渡ってかかっている。

それが、おびただしい数の亡者であると分かるのに、時間は掛からなかった。

まるで、南米アマゾンに出現する巨大な蚊柱のような大軍である。

「……八百万って、マジ？」

沙龍が呆然と呟いた。

九雷も、さすがに赤帝君と遊んでいる場合ではないと思ったのか、一旦、長剣を引いた。

目の前には、刀剣の神、経津主。

その経津主が呼び寄せたランクSの亡者たち。

展望台の中央では、タケミカヅチに取り憑かれた王霊君。

水晶宮の周囲には、劣勢の天界軍。

そこに、東海から押し寄せる亡者の大軍とくれば、かなり最悪な状態である。

九雷が、正面の経津主に対してなにか言う前に、

「東極山で逃がしてしまつた責があります。彼の相手は僕がしましょう」

木佐が既に七星剣の鞘を抜き放つて前に出た。

その行動に、他の三人も頷いて同意する。

赤帝君と白帝君は、各々の武器と闘気を携え、瓦礫から這い出てきたランクS

に向かつていった。

司令室の椅子に座る西海龍王敖閏は、九雷に一時的にこの場の指揮を任されていたが、本来、龍王に軍事介入する権限はない。『防衛』の範囲であくまでもアドバイスをしている、ということだったが、実質は九雷と同じことをしていた。

『皆既日食中も、五行は使えるように策は弄しましたが、実は、何度計算しても

最後の十分くらいは完全に無効化されてしまいます』

九雷は敖閏にだけ打ち明ける形で、そう告げた。

その最後の十分を物量で押すか、五行砲を使うか、その判断は当然、九雷がしなければならぬ。

敖閏は、ぎりぎりまで待つつもりだった。

「うーん……。どう見ても、不利だね。さて、どうしよう」

司令室の前面に設置されている大きなスクリーンには、水晶宮の周囲を模した地図が映し出され、敵勢力を示す赤で染まっている。

更に、追い討ちをかけるように海側に現れた亡者の大軍には、さすがの司令室のスタッフたちも皆、動揺した。

全員がすぎるような目で敖閏を見るのだが、敖閏はその視線を完全に無視して、手元の小さなモニターを見つめている。

敖閏が見守るそのモニターの中には、巽凜の黄色い衣が映っていた。

ズシン、という重たい音と共に、王霊君の重量のある体がやっと大理石に臥せった。

「三人がかりでやつとこれか……。霊魂つてのは厄介だね」

敖丁が嘆息する。

わずかだが、まだ王霊君の体は動いていた。

「……この、忠義心の塊のような奴の体を借りたのは失敗だったか……」

そんな呻くような言葉が王霊君の体から聞こえる。

「だったら、さっさとその体から出て行きやがれ」

陽輝がガシツと熊のような巨体を蹴飛ばしたが、

「いや、このまま、王霊君ごと葬るのが一番簡単だよ」

敖丁が悪魔のようなことを言っている。

「おいおい、どっかの総司令官より性質わりいな……。ま、おめーがどうしてもやるってんなら、反対しねえが。軍法会議は覚悟しとけよ」

「いや、勿論、陽輝がやったということにするけど」

「んな阿呆な」

足元で呻いている王霊君を無視して、敖丁と陽輝が毒づき合っている。

そんな二人に、景春が肋骨を押さえながらよろよろと近付いてきた。

「遅刻二人はさすがに元気がいいな。どいてろ、まだタケミカツチは死んでない

——」

「つて、どーすんだよ？ 霊魂引き剥がす方法なんて、俺は知らないぜ？」

「だから、このまま殺っちゃえばいいんだって」

「待て——」

景春がしゃがんで王霊君を覗き込んだとき、思いも寄らぬ素早い動きで王霊君の太い腕が景春の足を掴んだ。

「……っ!？」

「そうだ……。最初からこの男にすればよかったのだ——。東方天界に仇なす者！」

王霊君の白い目が剥かれて、噛み付くように景春を射抜く。

景春が一挙手する暇もなかった。

陽輝と敖丁はその一瞬になにが起こったのか、すぐに理解した。



今度は、タケミカツチが景春に取り憑いたのだ。

「王霊君の次は景春かよ……、勘弁してくれ……」

「だから、さっさと殺っちやえばよかつたんだよ。全く」

木佐は抜き放った七星剣をやや下段に構えている。

鞘はいつも抜くとすぐ横に放り投げるので、喧嘩相手には大抵同じことを言われる。

『小次郎、敗れたり——』

しかし、木佐が鞘を放り投げるのは、勝つための所作だ。

経津主にはそれが分かったので、そのことに対してはなにも言わなかった。

二人はお互い、相手の出方を計って、数秒間、身じろぎひとつしない。

「死にに來たと言うわりには、無駄に足掻くんだな」

木佐が挑発しても、経津主は変わらぬ表情で、静かに言った。

「あなたがたはご存知なのでしょう。天地開闢かいびやくのときには存在していなかった神獣が本当は何者で、この地になにをもたらす者なのかということ——」

「……？」

「文字通り、単独で最強の力を持つ神獣とその保持者は、果たしてこの世界の守護者か破壊者か。奪った命を数えれば明らかなのではありませんか？」

「……なにが言いたい？」

「あなたがた四方将神たちは、その神獣の力を調整し、ときに滅ぼす役目を負っている。とすれば、やはり神獣はこの世に災いを招く者。北の龍王はそう仰ってましたよ」

「北海龍王はそそのかされていただけだ。『それ』を言ったのは別の人物だろう」

「さあ、それは我々には関係のないこと……」

経津主がのらりくらりと言うが、その全身にはかつてないほどの鋭い殺気が漲っている。

東極山で相手をしたときには、なかった覇気だ。

「それで？ だからなんだと言うんだ？ 黄龍が陰であれ陽であれ、君たちはそれを欲しがっている。そして、僕たちはそれを阻止する。それだけだろう」

「四方将神たちは存在理由が単純でいいですね。ですが、我々が欲しているのは

『アラタマ』そのもの。黄龍ではありません。尤も、黄龍がそれを奪ったと言え  
ば、同義語にもなりますがね」

「“奪った”……？」

「大陸から甲斐家に伝わった神獣の保持者の血は、最初は歓迎されたようです  
よ。強大な力を懸念する声もありましたが、保持者がコントロールできる限り、  
あの神獣は恵みを齎す存在でもありましたから」

「……」

「しかし、神獣の招く、恵み以上の厄災を恐れた我々の祖先は、甲斐家を敵とみ  
なし、長年対立をしてきました。つまり——、お互いの生存競争です」

経津主の左足がわずかに動いた。

木佐はそれに気付いたが、視線を少し動かしたただけだった。

「神獣はその報復として、土着の神々の持つ『荒魂』を吸収していった——。結  
果、戦闘意欲すら奪われた我々は、神獣との闘いを放棄し、この半端な霊魂だけ  
が残った——。そういうことです。どちらが悪いというものではないのですよ」

「失った『荒魂』は……、黄龍の保持者を、つまり、馨を殺すことで手に入るの

か？」

「それは、どうでしょう……。確信があるわけではないですが、少なくとも『アテラス』はそう言って、兵を鼓舞させたのは確かです」

木佐は、やはり、と思った。

建御名方にしろ、この経津主にしろ、とつくに望みは捨てているのだ。

その上で、闘って死ぬ。

名もなき兵の手に掛かって永遠に冥府を彷徨う亡者に成り果てるか、仇敵とも言える『甲斐家』の手に掛かって完全な死を迎えるかは、どうでもいいのかもしれない。

「闘争心がないのに、なぜ、闘える……？」

木佐の問いに、経津主は静かに笑って答えた。

「なら、貴方は、闘争心がなければ闘えないのですか？ 北の四方将神」

「……なるほど」

理由さえあれば、動くことはできる。いや、理由などなくとも、自分の信念を護ることはできる。そういうことだろう。

と、同時に両者は動いた。

静から動へ。

先に仕掛けた経津主は、ほぼ直線的な動きで木佐に斬りかかった。

鋭利な両刃が木佐の七星剣に弾かれる。

その攻防は、たった三合目で決着が付いた。

時間にして、数秒の合間。

木佐の振るう七星剣は、北斗の力を濃縮還元したものである。

北斗（注1）の力——具体的には、『紫微星』<sup>しびせい</sup>とも『死兆星』とも言われる北

極星を中心にした星座郡全てを指し、それらは『死』を司る。

確実に『死』をもたらず、凍てついた七星剣の刃が、木佐自身の『水行』によつて圧倒的な力を発揮した。

刀剣の神とされる経津主も、東方天界では木佐の敵ではない。

経津主が膝をつき、倒れた。

陽輝が撃ったマグナムは、景春の身体を包む微かな光に弾かれた。

最大出力で放たれた景春の木行の気が、タケミカツチの喚んだ雷鳴の光を上乗せして、分厚い装甲のようになっていたのだ。

「チツ……、案外タフだな！」

スミス&ウェッソンM29は諦めて、懐に仕舞う。

そして、アーマライトに持ち替えた。こちらの方が威力は上だ。五行の壁を破壊できる弾丸も装填してある。

ただ、そのせいで命まで奪う恐れがある。

景春自身を死なせてしまうのは陽輝の本意ではない。

その躊躇が、手元を狂わせる。

更に、視界に邪魔な敖丁が度々入るせいで、結局、アーマライトは撃てなかった。

敖丁は、陽輝の援護など当てにはしていない。

対峙した景春の圧倒的な力を横に受け流し、なんとか動きを止めようとしている。

しかし、雷鳴の力をまともに喰らって、華奢な剣が真つ二つに折れると、さすがに敖丁は後退した。

「あの雷法さえ封じれば勝機はあるのに！」

「相変わらず、口だけは達者だな……」

そこに、ゆらりと立ち上がったのは王霊君だった。

まだ意識は朦朧としているのだろうが、その大きな体には漲る気迫がある。

敖丁は、フンと鼻を鳴らしながらも、「寝てていいよ」と言ったが、その直後に「役立たずは」という言葉が付け足された。

その反発心からか、王霊君の厳しい顔が、更に、音を立てるように修羅となった。

「わざと怪我でもしないと、医務室に行く口実がないからな」

「なにそれ」

「分からなくていい」

王霊君の巨体がゆらめきながら、展望台にそびえた。

「どけ、敖丁、陽輝。タケミカツチを封印してやる——」



王霊君が取り出したのは、碧媛から渡された霊符である。

同じものが、王霊君の手の中に六枚あった。

陸圧道人自らが『呪』を施した、仙術の中でも最高レベルの出力を誇る霊符で、これで周囲を囲まれてしまえば、五行の力の効かない極東の神々とはいえ、ひとたまりもないだろう。

「景春の体力が保たないかもしれないが……」  
迷ってはられない。

「恨み言は冥府で聞く！ 急急如律令！」

王霊君の喝と共に、六枚の霊符が踊るように円を描き、景春の上体を取り囲んだ。

「……っ!？」

すると、景春の体は、数条の闇に縛られたかのように見えた。

動きを止めたまま、大刀を取り落とす。

陽輝も、敖丁もそれを見守っていた。

いや、見守っていたのは、その二人だけではない。

九雷と、その肩の上に乗った沙龍も、祈るような想いで、景春の体から一条の鈍い光が放出されるのを見つめていた。

「やったか……！」

王霊君が唸った。

その光の軌跡こそが、タケミカヅチの靈魂である。

対魂魄用の弾丸を装填し直した陽輝が、どこに行けばよいのか分からぬまま弱々しく彷徨う光を砕いた。

王霊君はそれを見届けると、また、巨体を沈ませた。

激しい戦闘を経ているのだ。

王霊君は霊符の力を解放したことで、自身の全ての力を使い果たしただろうし、景春も疲弊した体を床に横たえたまま、動かない。

これで、終わった——と、その場に居る者たちは思った。

しかし、しばらく口を結んでいた九雷は、不意に小さな龍の体を自分の肩から降ろし、陽輝の腕の中に預けた。

「おい——」

「頼む」

二人の会話はそれだけである。

沙龍はなにも言わない。ただ、九雷の行動を見つめている。

ゆっくりとした歩調で景春の体を見下ろす場所までやって来た九雷は、やはりしばらく、そのまま見つめているだけだった。

「……」

沙龍はこの緊張感を嫌って、陽輝の腕の中から角ばった顔を見上げ、まるで関係のない話をした。

「そういや、さつき、なにか聞きかけたね？」

「ああ……、お前に聞こうと思ってたことな」

しかし、陽輝の話はこの嫌な緊張感を決定的にするものでしかなかった。

「お前さ、景春のこと、どう思ってたんだ？　というか、俺には最初っから妙な三角関係に見えてるんだが、間違ってるか？」

いまは、大豆ほどの大きさしかない沙龍の目が見開かれる。

それは驚きというよりも、陽輝への叱責だ。

そんなに簡単に言うんじゃない、という怒りだろう。  
しかし、

「……。いや、間違っていないんじゃないかな……」

言ってみて、そうなんだろう、と沙龍は改めて思った。

最初から、景春は自分に対しては本音で接していた気がする。

それが、ときに沙龍の女心を刺激したのは事実だ。

(そうだよ……。だから、私はこんな無謀な計画を立てたんじゃないか)

九雷が剣を抜く。

景春が、最後の気力で体を起こしたからだ。

しかし、震える腕の力だけでは立ち上がるまでには及ばなかった。

「なんで……」

敖丁がそう言ったが、彼自身も、この事態の示すところを理解している。

「立て、景春。お前のすべきことは終わってないだろう」

「……俺の、すべきこと……?」

景春は、いま、限界の体力と精神力を超えた所に居る。

「そうだ……。俺は全ての禍根を断つ……。！」

だから、景春がこの極限状態で取る行動こそが、彼の根幹を成すものである。それをわざわざ吐き出させることは必要なのか。

沙龍は、九雷のこの行動を、半分呆れた目で見ていたが、もう自分の力では止められないということだけは理解していた。

「天地を私化した盤帝の血……。俺はそれを断つことだけを糧に生きてきた……。使命じゃない。正義でもない。今上陛下の治世を守るためでもない。俺の、意地だ！」

その意地だけが景春を支配している。

立ち上がった景春の目には、九雷しか見えていない。

三人の大將と小さな龍が見守る中、九雷と景春が互いに、最高出力の『氣』を放っている。

東海龍王の鎮座する水晶宮――。

ここは、『木行』を最大に生かせることのできる場所でもある。

その場所で、東方青龍と東方軍大將、二人の『木行マイスター』が、同質・同

等の力をぶつけ合っているのだ。

圧倒的なその『氣』の奔流に、呑まれそうになる。

九雷は、一回、姿勢を正して、長剣を両手に持ち替えた。

相手は、ボロボロの体とはいえ四方軍一の剣技を持つ景春である。

若い頃に、一度だけ景春の初太刀を外したことがある九雷だが、その後、景春が鬼のような修練を積んだであろうことは想像に難くない。

「景春——。俺は、お前が望むなら、地位も名誉も富も、俺の持っているものは全てお前にやってもいい。俺はそれくらい、お前を買っている」

九雷が先に言葉を発した。

その口調が、あまりにも普通だったので、景春は一瞬、その響きに呑まれそうになる。

「しかし、沙龍だけは駄目だ」

「……っ？」

景春が、瞠目した。

「よくもまあ、ああいうセリフがしらつと言えるもんだぜ……」

陽輝が茶化すように言ったが、沙龍は驚愕したまま固まっている。感動したわけではない。

九雷の意図が分かったからだ。

本来なら、縮地法（注2）を使うはずの九雷が、その片鱗も見せなかったからである。

（なにをする気！ まさか——!?!）

そのとき、沙龍の見開いた目には、九雷が一瞬目を伏せたのが映った。

「……笑止！」

溜めていた『氣』を一気に放出するように、景春が動いた。

その瞬間、沙龍は陽輝の腕から飛び降りていた。

「お、おい、沙龍……っ!?!」

が、陽輝の制止も、沙龍の行動も遅かった。

小さな龍の姿では景春の初太刀を止められるはずがないし、元の姿だったとしても無理だっただろう。

一条の血が、文字通り跳んだ。

「嘘……」

すとい、と力が抜けたように沙龍がその場に座り込んだとき、跳んだ血が落ちてきた。

その血飛沫の最後の一滴が地に落ちるまでの間に、沙龍の時間は凍り付いた。

(注1) 北斗……実際には『北斗七星』を指す言葉。中国道教では『北斗九星』ともされる。

(注2) 縮地法……仙術の一種で、高速移動ができる。九雷の神速剣技はこれに頼っている部分が多い。



沙龍だけではない。

なにが起こったのか、瞬時に理解したその場の全員が、九雷の胸部を深々と斬った景春を啞然と見つめた。

九雷は、なにも無防備だったわけではない。

景春の初太刀を受けるべく身構えていたし、実際に、動いたはずだった。

それでも、景春の技が勝ったのだろう。

展望台に蠢いていたランクSたちは、経津主が木佐の七星剣の前に塵となったのと同時に、消えた。

木佐も、赤帝君も、白帝君も、いまや、同じ緊迫感の中に居る。

既に、海側から押し寄せる黒々とした亡者の大軍が、海岸線に到達しかけてい

た。

それは沙龍たちの居る展望台からも確認できる。

しかし、黒一色に塗りつぶされたその景色の中に、すっぽりと円を描くように砂の色を見せている場所があった。

巽凜の居る半径数メートルだけ、亡者たちが近付かない。いや、近付けないのだ。

そこだけ、強い突風が巻き起こり、巽凜を護るよう防壁を作っていた。

後ろに倒れるように崩れ落ちた九雷の体には、なんの抵抗力も感じられなかった。

既に意識はないのだ、と分かる。

「嘘……」

沙龍が放心して再度呟く中、最初に動いたのは陽輝である。

景春がとどめを刺すべく、九雷に二撃目の太刀を浴びせようとしたのを、マグ

ナム弾を撃ち込んだ。

狙いは、景春の両腕である。

それさえ封じれば、景春の戦闘力は半減する。

実際、その二発で終わった。

被弾した景春はその反動で大刀を零し、動きを止めた。

「……」

小さな龍の姿の沙龍は全てが停止している。

思考も、時間も、血飛沫の中の風景も、なにもかもが、止まっていた。

悲鳴のひとつもなかった。

ただ、瞬間冷凍のように、なにかが激昂するのを抑えるように、下へ下へ、温度が急激に下がっていただけである。

実際に周囲の気温が下がっていった。

「やへ……!!」

白帝君がその前兆を察して駆け寄ろうとしたが、沙龍の周囲だけ急速に氷点下の世界と変わった場には容易に近付けなかった。

皆既日食の暗さも相俟って、その空間は鈍く暗い色を放っている。まるでカードが切り替わるように、木行に支配されていた場が、土行に支配されたのである。

しかも、この氷点下がなにを意味するのか、四方将神が知らないはずはない。最強モードである、『陰中の陰』たる黄龍の召喚である。

それは、緑麗にはできても、沙龍にはできないはずの超必殺技だった。

「阿姐、やめろ——！」

叫んでも、放心状態から怒りにすり変わった沙龍には聞こえない。

沙龍は、もはや殺意しかない瞳で、景春を見ていた。

「やべー！ 玄ちゃん、阿姐を止めてくれ！ このまま黄龍召喚しちまったら、全てを破壊しつくまで終わらねえ！」

「なにが起きるっていうんだ!？」

怒鳴りながら、木佐も分かっていた。それは、四方将神としての本能である。

神獣は、全ての五行を備え、全ての陰陽を有する存在である。

そして、陰陽には四つの種類がある。

陽中の陽、陽中の陰、陰中の陽、陰中の陰、である。中でも、『陰中の陰』は、殺戮と破壊しか生まない。

木佐が過去に二度見た黄龍の印象がまるで違うのも、そのせいである。

「『陰中の陰』は北に通ずる……。なるほど、僕の力でしか止められないってことか」

幾分、冷静な木佐だが、それでも沙龍の凶暴な殺意に押されていた。

凍てつく外気は木佐にとってはなんの障害にもならないが、まずは沙龍のこの怒気を鎮めなければなるまい。

「馨！ やめろ！ 九雷元帥を助けるのが先だろう！」

「……」

「聞こえてるんだろ!? なにをトチ狂ってんだ！」

絶対零度の闘気を食らって、木佐が腰を低く落とした。

沙龍の小さな体にはまだ近付けない。

「うるさい……っ」

零下の気温はまだ下がり続けて、止まる気配がない。

これが撰氏マイナス二百七十三・一五度まで下がってしまえば、もう、終わりだ。

その絶対零度の中で召喚される黄龍は、目に見えるもの全てを破壊するまで止まることはない。

緑麗とて、一度しか発動したことのない大技である。

沙龍の視線の先に居る景春は、断罪を待つ罪人そのものだった。

しかし、後悔はない、とその瞳は言い切っていた。

陽輝は、この冷え切って絶望的な風景の中、吐き捨てた。

「甘えよ、景春……。おめえの腹なんざ、分かってんだよ……。復讐遂げた末に、惚れた女の手で死のうなんて、そんな都合のいいことにはさせねえ！」

M 29の狙いは、ずっと景春につけてある。

これ以上、不穏な動きを見せれば、間違いなく、今度は心臓を撃ち抜くつもりだった。

「だから、さつき、景春ごと殺っちゃえばよかったのに……」

既に昏倒している王霊君の背中を踏んづけた敖丁は、この事態の中、特に動じ

てはいない。

黄龍のことは四方将神に任せるしかないし、自分のすべきことは、既に終えて  
いる。

(まあ、後は巽凜次第なんだけど……)

それは、敖丁の賭けである。

「馨！ 僕の言うことを聞け！ いままで、僕が、間違ったことを言ったことが  
あつたか!？」

木佐がやっと小さな黄龍の体に手を掛けたとき、その体がビクツと動いた。

そして、恐る恐ると言った具合に、振り向いた。

沙龍は怒っているのではない。

泣いているのだ。

それを見て木佐はホツとしたが、同時に、驚きも隠せなかった。

「キ、キサさん……、どうしよう……」

こんな子供のような沙龍の顔を、木佐は見たことがなかった。

「私、どうしよう……」

そのとき、展望台全体が僅かにガクツと揺れた。

沙龍の周囲が摂氏マイナス二百七十三・一五度に限りなく近付いたせいか、水晶宮の砲門が動いたせいかは分からない。

恐らく、後者だろう。

そう思った敖丁は、微笑んだ。

「来る——」

もし、『五行砲』が起動されたとしたら、皆既日食の終わる十分前に発射されるように、細工をしておいたのである。

しかし、起動するかどうかは分からなかった。

起動できるのは『五行行使者』だし、巽凜がそれを許可するかどうかは『賭け』だった。

普通に考えれば、それが敵であれ味方であれ、血が流れることを望まない巽凜が五行砲を撃つわけはない。

しかし、敖丁が細工をした五行砲は、いま、攻撃には使えない仕様になっている。



巽凜がそれを理解できるくらいのヒントは残してきた。

「砲門が……っ!?」

木佐が言うまにも、海側を向いていた五行砲の砲門が重たい動作ながらも、回頭した。

地平から見て九十度の真上、つまり、天空に向けて、である。

「なっ……? どういう……!?」

海岸線を見ると、皆既日食の暗闇の中を、まぶしいほどの太い光の束がまっすぐ東からやってくる。

水晶宮のさらに東——、そこにあるのは東極山である。

光の束の正体は、浜辺に立つ巽凜が呼び寄せた、『東海の至宝』が発する、全ての『巽風』である。

『陽中の陽』そのものであり、結界の役目も果たす、春の風——。

それが、大きなうねりを持った束となり、五行砲の根元に設置された鏡石に全て集束され、そのまま花火のように真上に打ち上げられた。

「……」

皆、その様子を口を開けたまま見ているだけだった。

仕方なく巽凜を守っていた公務員も。

亡者と闘っていた天界軍の兵士たちも。

司令室に座っていた敖閏も。

展望台に居る陽輝、敖丁、王靈君も。

そして、四方将神たちも――。

暗闇のはずの天空に打ち上げられた光は、辺り一帯の景色を昼間の明るさに塗り替えた。

本来の風の勢いだけを失った『巽風』は、輝く結晶の雨となって、水晶宮の周囲に降り注いだのである。

その光の雨の中、亡者たちが消失していく。

更に、沙龍を中心に巻き起こっていた氷点下の気温の渦も、『陰中の陰』も、

全てが、光の中に溶けるように消えていった。

「巽風か……」

景春が、周囲を仰ぐ。

水晶宮の辺り一帯が、全て、春の陽だまりの中に包まれたようだった。

東極山――。

石壁塀ノ助は、口を開けたまま空を見つめていた。

神殿の天辺に取り付けられた『東海の至宝』が強烈な光を放って、辺り一帯がまるで光輝く楽園に変わったからである。

「はあー、なんか、夢のようですたい……。姫様、元気でいらっしやるかのう……」

「巽凜ちゃんの切り札はこれか……」

敖閏は椅子に体を沈め、額を押さえた。

なにか秘策のひとつでもあるんだろうと思っただけはいたが、概要までは聞かされていなかったのだ。

まさか、五行砲にこんな使い方があるとは知らなかったが、技術的なバックアップがなければ無理だっただろう。

これを手助けしたのはもしかしたら、敖丁かもしれない、と敖閏は一瞬思った。

五行エネルギーを摩り替えて、五行砲を『巽風』の偏向と強化に使ったのだ。敖丁でなければ、できるまい。

「東海方面、オール・グリーン！」

「同じく、南方面、オール・グリーンです！」

そんな弾んだ報告が飛び交う部屋で敖閏は微笑んだが、司令室の一角だけは未だに緊張感の只中にあっただ。

展望台と連絡を取っていたオペレーターが、救護班の出動要請をしているようだった。

九雷の倒れた場所には赤帝君が片膝ついてた。

それを見て、沙龍もよろよると、そこに向かう。

いま、なにが起こったのか、頭では理解している。

巽凜が呼び寄せた『巽風』により、亡者は全て消え、敵の居なくなった戦場で、後は、負傷者たちを助けるだけだ。

が、それには、生きていれば——という条件がある。

かろうじて生きていたとしても、助かりようがなければ放置されるだけだ。

「九雷……?」

まるで寝ている人を起こすように、小さな沙龍の手が九雷の身体を揺さぶった。

しかし、九雷はピクリとも動かない。

呼んでみても、なんの反応もない。

九雷の身体から尚も嘔き出す血を呆然と眺めることしかできなかつた。背後では、木佐が無線で司令室に話しかけている。

「ですから、医者を！ 九雷元帥が死にそうなんです！」

「“死にそう”……？」

沙龍の虚ろな呟きには、絶望感しかない。

濃紺の制服なので分かりにくいのが、パツクリと斬り裂かれた場所は血で染まっている。

この状態で『生きている』と判断する者がどれほど居るのだろう。

「大丈夫ですよ、緑麗様」

落ち着いた声でそう言ったのは、赤帝君だった。

開いた傷口に手を置き、未だに表情は険しいままだが、赤帝君は一度、自分への確認の意味で頷いた。

「私の力と、緑麗様の力さえあれば、助けられます。大丈夫ですよ」

「……？ 私は、なにも、できない……」

できるのは破壊だけだ、と沙龍は悄然とした頭で思う。

瀕死の人を救ったことなどない。

いや、あったかもしれない。一度や二度くらいは、いままでの人生、気まぐれに誰かを救ったこともあったかもしれない。

しかし、本当に助けたい人を、助ける力など、ない。

「……？」

沙龍の首に掛けてあった物が、微かに発光していた。

虹色の小さなその石は、意思を持っているかのように、明滅を繰り返していた。

「貴女の持てる『土行』を、全てこの一点に——。一時、私が預かります」

赤帝君が沙龍の手を、自分の手のひらに重ねて、目を閉じる。

沙龍は、体中の全ての血を抜かれたような気分になったが、特に抵抗もしなかったし、積極的に集中することもなかった。

ただ、なにもできない子供のように、終始泣いていただけである。

いつしか、百四十五センチの体に戻っていたのも、赤帝君の施す技に関係があるのだが、もうそれすらどうでもよかった。

「後は傷を塞げば大丈夫ですよ、緑麗様——」

赤帝君のそんな言葉が遠くに聞こえる。

『本当に?』という目ですがる沙龍は、まだ赤帝君の言葉を信じていないようだった。

やっと、その言葉が実感できたのは、九雷の閉じた瞳がわずかに動いたときである。

「……っ」

沙龍は、そのまま、九雷の体に抱きすがって泣き崩れていた。

陽輝に拘束されていた景春が、覚えているのはそこまでである。

彼もまた、あちこちの怪我の痛みと極度の緊張感から解放され、気を失った。

碧媛は、大忙しだった。

運びこまれる怪我人の数と、軍医の数があまりにも差があり過ぎて、二十四時間にはトイレにも行けない、という状態だった。



両腕を撃たれた東方軍大将の治療を要請されたときは、一悶着あった。

他にも瀕死の兵がたくさん居たので、大将だからと言って特別扱いはしない、と碧媛は撥ね付けたのだが、そのとき、要請をしてきた男が相当えげつない脅しをした。

ただ、その男の言い分には正論もあった。

「だったら、いま、生き残りの敵が襲ってきたらどうする!? 軍を率いれる奴を優先させないと、結果として全滅するだろうが!」

碧媛は、それももつともだと思ったので、仕方なく意識不明のその大将を診た。

いま、その治療が終わって、廊下に出てきた碧媛は白衣の上に、更に白い腕章をつけている。

あくまでも臨時の軍医、という意味だ。

「助かるか？」

その碧媛に、声を掛けたのは陽輝である。

さつきは瀕死の兵に銃を向けて、「じゃあこいつが死ねば、あんたの担当はな

くなるな？」とまで言った男が、殊勝な態度を見せている。

碧媛は、治療が終わったらこの男に怒鳴り散らすつもりだったのだが、出鼻を挫かれた。

しかし、陽輝がくわえていた煙草は取り上げた。

「ここで煙草を吸うな！ 全く、これだから軍人つてのは……」  
忌々しそうに呟いてから、陽輝の最初の質問に答えた。

「助かるか、じゃなくて、助けるんだ。それが私の仕事だからな」

「……」

「刀傷も酷いが、一番酷かったのは、銃創だ」

碧媛は、じろり、と陽輝を睨んで言った。

「あれを撃ったヤツは相当性格が悪いな。わざと貫通しないように撃ってる」

「……俺だ」

「やはりか。どういう事情で味方を撃つような事態になったのかは私の関知することじゃないが……。もうひとつ言っておこう」

「あん……？」

「いい腕だ。どこにも後遺症が残らないように撃ってるな。しばらくは動けんだろうが、一ヶ月もすれば元通りになるだろう」

「そうかい。ありがとよ、先生」

陽輝がホッと安堵の息をついたので、碧媛もやっと微笑んだ。

「まあ、それでも医者立場から言わせてもらえば、軍人なんて私の仕事を無駄に増やす阿呆に変わりはない」

陽輝は苦笑した。

こうもはっきり言つてのける医者は、なかなか居ないものである。

「ああ、そういうや、アンタ、沙龍の義姉だったな」

「そうだが？」

「アイツなー、九雷を斬られて、黄龍を暴走させようとしやがった。前にもそういうことあったか？」

「何度もあったさ。その度に死人を出して、いつも鬱陶しいくらい落ち込んでたな」

「そうか」

「でも、男のせいで我を忘れて理性をなくすってことはなかったな……」  
ニヤリと笑って言ったのける碧媛に、陽輝もつられて笑った。

「お年頃なんだろう」

碧媛が『煙草を吸わないなら』という条件つきで許可してくれたので、陽輝はしばらく景春の傍に居た。

自分が撃った傷だから、ではない。

陽輝は知っていたのだ。

景春が、九雷の出自を知っているであろうということ。

「俺は、確かに盤帝は恨んでた。しかし、元帥を殺したかったわけじゃないんだ

——」  
目覚めた景春は、懺悔のように語った。

しかし、そう言っても、自分のしたことはしっかり覚えているし、あのときは激情に身を任せて本当に九雷を殺そうとしたことは確かだった。

「それは分かってる。九雷に嵌められたんだよ、おめーは」  
景春の過去を巧妙に利用して、九雷は景春を煽ったのだ。

それは、いま、腕を吊った景春にも分かる。

「だとしても、あのとき……」

景春が、初太刀を繰り出そうとした瞬間、九雷はなにかを悟ったような顔を  
した。

このまま景春に殺されてもいいと思っただのかもしれない。

「元帥は俺を斬るつもりは最初からなかった。それは確かだ」

「……」

「そして、最後まで俺を信じてくれたんだ。その信頼に応えないわけにはいかな  
い——」

陽輝は、だめだこりや、という顔をする。

景春に『そう』思わせることが九雷の目的だったのだ、と言ったところで、景  
春の思いは覆らないのだ。

「まあ、いいさ……。展望台でのことは俺たちしか知らない。四方将神の連中は

どうせ我関せずだろうから、おめーももう気にすんな」

「お前にも迷惑掛けたな……。すまん」

「気にすんな。俺もマグナム二発撃ち込んだから、これで貸し借りなしだ」

陽輝は、景春にあまり無理をさせないようにと席を立ったが、景春が引き止めた。

沙龍は無事かどうか、聞いてきたのだ。

「ああ、ピンピンしてるぜ」

陽輝はあれ以来沙龍には会っていないが、そう言ってやった。

「そうか……。なら、いい」

「なあ、景春……。あいつはやめとけ」

お節介かと思っただが、寂しそうに笑う景春に、陽輝は言わずにはいられなかった。

「やめるもなにも、なにも始まってないけどな」

「嘘つけ」

「……」

「なにも好き好んであんな貧相な乳の女を選ぶこともないだろ」  
その憎まれ口が自分を励ますためだというのは分かるが、それにしても酷い言  
い様に、景春は久しぶりに声を出して笑った。

景春よりも瀕死で、優先順位があるのなら一番のはずの九雷には、司令部直属の軍医が二十四時間体制で張り付いていた。

命に別状はないとその軍医は何度も言ってくれたが、沙龍は九雷の傍から離れようとしなない。

病室から摘み出されそうになったが、これも、陽輝以上に洒落にならない脅しをかけて、居座ったのである。

かろうじて、赤帝君や木佐が取り成してくれたおかげでなんとかあったが、「我僂VIP」というレッテルを貼られたのは確実だろう。

巽凜は水晶宮の主として一番忙しい思いをしているようだったが、その慌しさも、数日で終息した。

それぞれの大将が自分たちの判断で部隊を解散させたので、いま、水晶宮に残っているのは動けない怪我人や、将官クラスの者だけである。



元々の水晶宮のスタッフである、東海龍王家に属する龍族たちは、怪我人の世話を手伝いつつ、普段の業務に戻っていた。

九雷が白い光を見たとき、その中にぼやけた緑色のものが見えた。  
沙龍か、と思った。

あの緑青の瞳が、自分を呼んでいるのだ、と。

「気が付きました？」

木佐の声がして、九雷は自分が見ていた緑は、彼の黒衣に着けられた翡翠の飾りであると分かった。

「真武君か」

「死に掛けた気分は、どうです？」

「なぜかな、悪くはないな」

九雷は、全ての視界がクリアになって、自分の身体がどういう状態なのか分かると、全てを思い出した。

胸にきつく巻かれた包帯の感触がする。

「終わったのか……」

「天界軍の事後処理については東以外の四方軍の大將たちがやってくれました。いまは水晶宮もだいぶ落ち着いてます」

「景春は無事なのか……？」

「ええ。貴方よりは軽症でしたから」

「そうか……」

景春の太刀筋を見切れる自信はあったが、なぜか、あのととき、縮地法を使う気にはなれなかった。

その理由を九雷は探している。

「相当深い傷だったもので、まだ安静にして、動かさないようにとのことで……」

と、木佐が言ってる傍から、九雷は急にガバツと起き上がろうとした。

「ちよつと！ 聞いているんですか、いま——」

慌てて、その両肩を抑えたが、九雷の力は強かった。

「沙龍はどこだ!？」

「……」

「真武君、答えろ！ 沙龍はどこに居る——!?!」

「……」

「……?」

木佐の表情から、無事だということは直感で分かったが、呆れたような顔をしているのはなぜだろう、と九雷は思った。

「そこで寝てるじゃないですか……」

九雷が少し無理をして体を起こし、木佐が指差した方を見ると、枕の端を借りて、よだれをたらして眠っている沙龍が居る。

胸の締め付けがきつくて、覚醒してからいままで、視線を動かせなかったのだ。

「貴方から離れないんですよ」

「……」

九雷は沙龍の淡い色の髪を撫でながら、目を細める。

木佐は、呆れた顔のまま、苦笑した。

「なにがあつたんだ？　俺が景春に斬られた後――」

「まあ、お決まりのパターンですね」

「……？」

「不本意かもしれませんが、貴方を救った一番の功績は赤帝君にあるでしょうね」

「赤帝が……？　まさか、俺のために再生能力を使ったのか……？」

「貴方のため、というよりは、馨のためなんでしょうけど」

「ああ……」

と、それだけで納得した。

「馨は貴方が死んだと思つて放心していた。それを正氣に戻したのも赤帝君です。そして、馨は黄龍の力を使つて貴方の身体の時間を止めたんです」

「なるほど、そういうことか……」

「それと、これもかなりの効果があつたと思います」

木佐は枕元に置いてあるその石を取つて見せた。

以前、沙龍が北方軍の士官から預かつていた『鎡石』である。

「貴方を斬った景春大将は、直後に陽輝大将が拘束して、蜂の巣にしてみました。……といっても、五体満足で無事ですが」

「容赦ないな」

九雷が微苦笑を見せる。

完全にリラックスしているようだ。

それを見て、

「九雷元帥、聞きたいことがあるんですが」

木佐が単刀直入に言った。

「なんだ？」

「あのととき、わざと斬られたんじゃないんですか？」

九雷の目が覚めたら一番に聞こうと思っていたことである。

それが聞きたくて、つきつきりで看病する沙龍を手伝っていたようなものだ。

「……なぜそう思う？」

「貴方にしては随分危険な賭けですが、『東方軍大将』を完全に手中にするための大博打——と言いましょうか」

「俺は随分計算高い男と思われてるようだな」

「まあ、それだけの実績がありますから」

木佐が真面目な顔で言うと、嫌味にしか聞こえない。

「……そういう計算がなかったとは言わないが、ただ、俺は……、景春が最後に選ぶものがなんなのか、見てみたかったんだ」

「『選ぶ』……？」

「あいつは色んな因業を抱えていたが、それでも己の正義を貫く男だと思った。

だから、監察府を捨てるのは最初から分かっていたが……、恐らく、監察に身を置いていたのも、『斉』を滅ぼしたものがなんなのか、原因を突き止めるためだったんだろう。そして、自分の仕えた国を滅ぼしたのが盤帝その人だと分かる、今度は燻っていた思いを自覚してしまった」

「巽凛公主と再会したことで、その思いがより明確になった、と？」

「それもあるだろうな」

二人は、そこで、同じものに視線を移した。

ただでさえ年相応に見えない沙龍は、眠っているときはますます幼く見える。

「監察の縛りだけなら、景春は迷わなかっただろう。過去の怨恨など流して、『東方軍大将』の職務を全うしてくれたはずだ——」

「しかし、彼にとつての、『イレギュラー』があつたわけですね」

「……」

九雷は軽く頷いただけだった。

「でも、今回のことで、景春大将は決して貴方を裏切れなくなつた——、ということですか。やっぱり、僕は軍人じゃなくてよかつた。こんな上官は絶対ゴメンですね」

「……お前も、だいぶ容赦がなくなってきたな」

苦笑する九雷は、やっと体の感覚が戻ってきたのを感じた。

開け放つた窓からは、微かに潮風が流れてくる。

「巽凜殿はどうしてるんだ？」

「釣りしてますね」

「釣り……？」

「曰く、それをするために水晶宮に戻ってきたとかで」





一本釣りの最後の格闘に勝利をした巽凜が、その釣り上げた魚を前に満面の笑みを浮かべていると、背後に声が掛かった。

「お見事——」

振り返ると、包帯で腕を吊った景春が自分を見ていた。

「まだ寝てなくて大丈夫なんですか？」

「見つかるよ、怖い女医さんに怒られるんだけどな」

景春が悪戯っ子のような顔を見せるので、巽凜は微笑んだ。

再会した当初、かつて家臣だったという態度が抜け切らなかつた景春も、だいぶ本来の態度で巽凜に接することができるようになっていた。

それは、良いことなのだと巽凜は思う。

「やっと、終わりましたね」

「そうだな……」

潮騒に身を任せて、穏やかな東海を見つめる景春が、誰かと重なった。

それは、『木行』をその身に纏った兄たちかもしれない。

景春は、自分には仕事の話はほとんどしないし、声を荒げるようなこともない。

しかし、どこか、近くに感じるものがある。

それは過去を共有しているという事実ではなく、同じ東を護る者という連帯感でもなく、いま、ここに流れている穏やかな潮風と一緒に受けている、というだけのこともかもしれない。

「巽凜殿……、男に心底惚れたことってあるか？」

景春がそんなことを聞いてきた。

「……なくはないですね」

「考えてみれば、俺はいままで結構いい加減に女と付き合ってきて、本気で惚れた女が居なかつたのかもしれない」

その原因を作ったのは、巽凜だった。

巽凜に振られたことで、景春は女性不信というよりも、そもそも恋愛に対して

懐疑的になったのである。

「……あら。港港に女が居るって感じですね？」

「そんないいもんでもないけどな」

巽凜は、景春の当時の想いなど知らなかったし、彼を変えてしまったという自覚もない。

ただ、いまの景春が、誰を想っているのかは理解していた。

「でも、死にそうになったとき、掠れた意識の中で見たんだ。まるで——、御伽噺のように、魔法が解けて、元の姿に戻った一人の女が、真珠のような涙を零すって風景をな」

「……」

「多分……、誰もあんな涙を流させることはできないだろう。この世でたった一人の男を除いて」

巽凜は、微かに憂いの瞳を見せた。

景春が自分で苦しい恋を終わらせたのが分かったからだ。

「辛いですね」

「……そうだな」

叶わぬ恋慕の情に縛られて自害同然に死んだ兄にも、この強さがあれば、もつと違う結末があつたかもしれない、と思う。

そして、同じく、叶わぬ想い故に、もう一人の兄から逃げた自分にも――。  
しかし、巽凜は後悔はしていなかつた。

「でも、同僚に言われたよ。女は本気で惚れるもんじゃないそうだ」

「……?」

「本気で惚れさせるもんだとさ」

「いいですねえ、その男意気」

巽凜がクスクスと笑つた。

こうして自分が穏やかな風の中で笑うことができるのだから、きっと景春の熱情もいつかは過ぎ去るだろうと巽凜は思うのだ。

「じゃ、大物でも狙ってみます?」

巽凜が自分の竿を景春に渡した。

景春は、ギプスをしていない方の手でそれを受け取る。



「なにが釣れる……?」

「そりゃ、勿論。今日の夕飯が」

戦勝祝いムードの水晶宮では、連日、そこかしこで酒盛りが行われていて、当然、陽輝はその全てに参加していた。

「……で？ 君はいつ大事な大事な身重の奥さんに会いに行くわけ？」  
敖丁に冷ややかにそう言われても、陽輝は軽く流した。

四方軍大将という肩書きを離れば、この二人は物凄く仲の悪い親戚という関係になるのだ。

「今度三ヶ月以上連絡ない場合は即離婚だそーじゃない？ まあ、僕としてはそうなってくれた方がいいんだけど」

「だったら、引き止めるよ、このツンデレが」

「引き止めるのもご免だね。その顔見ると不愉快だから、早く出て行けって言ってるんだよ」

「全く、うるせーなー……」

病室では、珍しい見舞い客に、九雷が面食らっていた。

自分はまだベッドから起きられない包帯だらけの状態で、こういう姿を一番見られたくない男でもあるのだが、赤帝君の方は気にしていない様子だった。

「一応礼を言っておく」

「別に貴方のためにしたことじゃない」

という、予想できすぎる会話に始まって、しばらく沈黙が流れる。

九雷の膝の上で寝ていた小龍は、その微妙な緊張感に目を覚ましたのか、どこかへ飛んで行ってしまった。

「軍部のことに口出しする気はないが……、東方軍大将は据え置くのか？」

赤帝君が窓の外を見たまま言った。

九雷からは見えないが、磯の方に景春の姿があるようだ。

「解任する理由はどこにもない」

「……しかし、彼の一連の行動を鑑みるに、監察府の在り様を見直す必要もありそうだな」

確かに、それについては九雷も考えていた。

経験を積んだ王霊君でさえ、軍部の中に監察府のメンバーが居たと知っただけで動揺していた。

そういった疑心暗鬼が生まれてもしょうがない部署とはいえ、果たして、それ以上の利があるのかどうか。

ただ、秦帝が引きずり出そうとしているあの老人が、尻尾を出さない以上、九雷も静観するしかない。

「そう言えば、異凜殿にはもう会ったか？ お前に会いたがっていたぞ」

「いや……。後で挨拶しておこう」

「もしかしたら、ポテンシャルは敖広よりも上かもしれない。彼女が武門に興味を持ってないことは、幸いだと言えるだろうな」

「そうだな。その点においてだけ、貴方を支持するよ……」

赤帝君が目尻を下げる。



戦場に咲く花は、ときとして、なにものにも変えがたいほど美しい。

ただ、ひとたびその花を愛でようとすれば、とんでもなく大変な想いをしなければならぬというだけのことだ。

水晶宮の勝手口に当たる場所に急遽作られたらしい生簀の前で、今夜の夕食の素材を物色していた木佐は、背後に聞こえ始めたバタバタと騒がしい足音が誰のものか分かっていった。

「き、キサさん、キサさん！ み、見ちゃった……！ ささささつき、碧姐々と王霊君がチツスしてた……！」

沙龍が、そんな報告をしに来たのだ。

「……で？」

「い、いやあ、身内のそういうシーンって、なんかドキドキしちゃうわー」  
「初心な高校生じゃあるまいし……」

木佐は、網を持ったまま、微動だにしない。

いまから、スズキを掬い上げようというのに、沙龍に大声を出されて集中を切られたくないのだ。

「そ、そうなんだけども。こういうのって、思いもかけぬところで進展してるのねーって……あれ？　そういえば、聖霄は？」

「白帝君なら、任地に帰ったよ」

「あ、そうなの。結構、淡泊だなー」

てつきり、水晶宮の色んな場所で勝手に行われている酒盛りに参加してるかと思いきや、女っ気の少ないのが気に入らなかったのだろうか。

「……よし」

木佐が選別して掬い上げた魚が元気よく跳ねて、その水が沙龍にかかった。

「……ム」

「今日はこのスズキさんにしよう」

「サトウさんは？」

「馨にしてはいいボケだ」

木佐が、そのスズキを持って、口パクをした。

「どうも、スズキイチロウです」

そんな冗談を言い合っている二人は、高校生だったときとなにも変わらないと思っっている。

ひとしきり、スズキで遊んだ後、木佐が言った。

「巽凛さんが釣ってくれた魚たちだ。今日はこれを美味しく頂くのです」

「おおー、竜田揚げとか、いいね！ よろしく、コックさん」

「その前に、九雷元帥と仲直りしておけよ。馨が怒って口きいてくれないって、嘆いていたぞ」

「えー。だって、人に死ぬほど心配させたんだから、怒って当然でしょ！」

いや、なにかは変わった、と木佐は思う。

特に、一番変わったのは自分かもしれない。

「ねえ、キサさん、魂が転生する意味ってなんだろう？」

沙龍がぽつりと漏らした。

「壮大なテーマだな。そして、不毛なテーマだ」

「ぶ」

「そんなの考えるだけ無駄だろう。答えなんかないんだから」

沙龍の頭上に舞い降りてきた小龍が、『クエツ』と一声鳴いた。

「キサさん、ホント変わったよなく。前はそんなえー加減な人じゃなかったの  
に」

「人生を楽しむ方法を学んだんです」

「数年前のキサさんに聞かせてやりたいよ……」

【終】

この話は、二〇〇八年の三月から十一月にかけて書いた話です。

書いている途中で何度も方向転換してしまった編ですが、景春と巽凜という今作での主人公二人が、磯で語るというラストシーンだけは最初から決まっています。景春にとってはあそこでやっとな過去の清算ができたんじゃないかと思えます。

景春の素敵なイラストを描いてくれたMickさんには本当に感謝です！

二〇一一年八月八日 小龍



